

「なごや認知症カフェ」の在り方に関する調査研究 報告書



2017年3月



**「なごや認知症カフェ」
はじまる**

カフェをはじめるきっかけ

認知症の人・家族への支援のために

介護する家族の交流やご本人の交流で、地域のなかで安心して暮らせることをめざしたい

施設入所の面談の際に、入所はまだ希望しないが少し認知症が始まっている今の状態で今後どのように生活・介護していこうか不安に思っている等の相談を受け、何かできることはないかと考えたことがきっかけになりました

認知症のご家族に予防知識、介護方法をお伝えしたり、介護負担軽減を考慮

認知症介護をしている家族様が相談できる場

認知症の方が増えていることと、認知症の方と家族の社会参加のきっかけになりたいと思っているから

地域で認知症の方、その家族が孤独にならないよう開かれた空間として場所を提供したい。また、高齢者の方が認知症にならないよう、おでかけの場として開催したいと考えました。さらには古くから地域に根差している医療機関としての責任です

増加の一途をたどっている認知症の方々への支援の一環として、検討した結果、カフェの運営実施に取り組むことになった

デイサービスに行くまでではないが、認知症の方が自分の力を発揮したり、誰かと交流できたりする場が作れるといいなと思った

特養入居者への面会などで家族様より親戚、知り合いの方が困っているとの相談を受け、相互交流、情報交換の場になれば始めました

介護者が介護の方法や接し方などを1人で抱え込んでいる話を聞き、同じ立場の人が交流できる場があるよと思った。気さくに話ができる場ができ、介護者に気持ちのゆとりが少しでも取れるような場を作りたいと職員が話し合った

認知症の方、家族の情報交換ができる場所ができると良いと思いました

認知症の進みをゆるやかにしたり、認知力の低下に不安を抱いている者同士が交流することで認知力をアップしたいという思いあり

地域密着型の介護施設の方針の基に、地域交流の認知症カフェを作り、ボランティアさんと共に認知症の方々やご家族様たちが暮らしやすい街作りのお手伝いを行っています

閉じこもりとなる本人、そしてそのことを知られたくない同居家族があえて認知症の相談所へ出向いていくことに抵抗感があるという住民からの話をうかがい、交流、外出するきっかけとして野菜の直売所を設置し、買い物ついでにお茶しながら交流を図ることを企画した

認知症の人を抱える家族、本人、認知症の予防をしたいと考えている方々に交流の場を提供し、少しでも役に立ちたいと考えたため

地域の声をきいて

地域住民から介護のことで気軽に相談できる場があると助かるとの声があった

小規模多機能型施設の運営推進会議メンバーである地域住民から声が上がリ、地域住民の協力もあって始めています

病院での認知症患者が増加し、地域の方より困っている様子を聞いてはじめてました

いきいき支援センターによる助言と、町内会からの希望があり、地域に認知症啓発したい

東区で認知症カフェが少ないと伺ったこと

家族サロンを開催するなかで家族より安心して外出できる場所が少ないとの意見を受けたこと。いきいき支援センターとしてモデル的に認知症カフェを開催することで港区の認知症カフェを拡大していくため

民生委員の活動を通して家にこもりがちになっている高齢者の姿を多く目にしました。体調以外に出かける先がないという理由がそこにはあった。高齢者の家以外の居場所のひとつになれば、そしてこの場所から他者との交流が広がればという思いでカフェを開いた

地域に開かれたサロンの運営をしたいとボランティアさんから申し出ていただいた

もともと私どもの法人は、本部のある三重県で数年前より四日市市内4カ所で認知症カフェを開催しており、当介護センターオープン時から認知症カフェの設置は視野に入れていた。オープン後も運営推進会議等において地域住民の方等からのニーズもあることを知り、2015年9月にオープンした

地域のつどいの場、相談できる場づくりのために

ケアマネジャーの仕事上での経験で、高齢者の孤独を見て、高齢者の居場所づくりをしようと思ったのがきっかけ

地域に認知症に関わる人々の立ち寄りスペースをつくりたくて、デイサービスの場所を使って定休日にカフェをおこなうようにした

認知症の方が増加していることと、地域の老人が孤立しないように情報の交換等のために

認知症カフェのことを研修や新聞記事で知り、私たちの地域でも地域住民の交流の場にしたいと思いました

入居者様といっしょに地域の方が交流できるように

分室が開設したのをきっかけにいきいき支援センターのPRを兼ね、認知症の人も介護の人も地域の人、誰でも気軽に集まれる場所を作った

グループホームの共有部分を利用して地域住民の方とグループホーム利用者が交流できる機会の創出ができると考えた

居場所づくり

もともとパン教室を定期で開催しており、地域の方や認知症をかかえる方が一緒に参加をし、情報交換の場となるよう認知症カフェを始めた

「地域住民が安心して集える場所、気軽に相談や情報交換できる場所を」との声から

自分の母が認知症（アルツハイマー型）になり、地域の方々と共に勉強したり、いこいの場を作ったことから（代表）

医療生協では、組合員さんたちの自主的活動として「班会」や誰でも参加できる「サロン」活動で仲間づくり・居場所づくりに取り組んでいます。また、診療所では、かかりつけ診療所として気軽に相談できる窓口としての役割も大切になってきており、2015年の名古屋市認知症カフェ開設事業を機に取り組むことに

カフェをはじめた みなさんの 声

認知症の理解を広げたい

認知症を理解してもらい、**認知症になっても今までと変わりなく生活できる街にしたい**

地域の方に認知症を知って頂きたいということ。地域の方へ近くに介護施設があり、その中に認知症の方が入居されていることを知ってもらおう

新オレンジプランがきっかけで地域交流、認知症の方が役割をもち、いきいきしている姿をみていくことで**認知症のイメージを変えていくことを目的に**、地域の方が気軽に交流できる場を作る

家族が認知症の認識がない、情報交換して理解してほしいと思ったから

地域住民の認知症の理解と情報交換、自施設の宣伝

認知症の人たちが介護サービスを利用できていないこと、家族の認知症への知識不足、近隣の人の認知症の対応不足

認知症予防プログラム（体験型）に楽しみながら通うことにより、**認知症の方への理解が深まり、支え合う仲間づくり**ができると思っていたので

地域の高齢者が気軽に足を運べる場所であるという福祉会館の利点を生かし、認知症の人に寄り添うカフェを作りたいと思ったから。また、カフェという日常的な場で交流することで**認知症への偏見をなくし、認知症になっても暮らしやすい地域をつくるきっかけ**となる場所になればと思ったから

地域に貢献したい

今後ますます地域での支え合いが必要だと感じています、その一端を担えれば…と思い始めました

地域包括ケアの一環として在宅生活を支援するため。地域に開かれた施設を目指したいため

もともと当院はもの忘れ外来を行っていて認知症の方を介護する家族の方が出入りしています。困っているときはおたがいさまの活動をしていたので、ロビーでやっている喫茶にもっと多くの方をお誘いしたいため

老人ホームを開放することで老人ホームのイメージを変えていければと思い、はじめました

老健施設として地域に貢献

施設として何か地域への貢献活動ができないかと考え、認知症地域支援推進員の方に相談したこと

新オレンジプランから、**当施設で地域に対してできることは何かを施設内で検討した**。また、老健の果たす役割のひとつとして認知症カフェの開設の話が出た。施設内で認知症カフェ開設プロジェクトを立ち上げ、会議を重ね現在に至っている

自施設では認知症専門棟フロア（入所）があったり、もの忘れ外来の診療も行っている。**地域で認知症の方々やその家族を支えていく活動をしていきたいと思っていたから**

法人としてより深い地域貢献を行うため

特別養護老人ホームが開設して5年目を迎えるにあたり、地域の人びとへの開放、社会貢献等、「地域」とのつながりを再構築していきたい…と考え、カフェをはじめさせていただきました

以前より認知症の介護家族から個人的に相談を受ける機会が何度もあり、家族や**本人の抱える悩み等を自施設を通して共有し合いたい**と考えたから

訪問看護ステーションを開設する時、**地域に開かれたスペースの活用を検討し**、認知症に関する取り組みの中からカフェを開こうとなりました

法人として、施設としての社会貢献

いきいき支援センターの認知症家族会に出席し、認知症本人だけでなく、その家族、また地域へ向けた支援をしていきたいと思い、それがカフェのきっかけとなった

地域に向けて過去にも取り組みを展開してきたが、自施設の周囲も高齢世帯が多いことから、地域の住民に認知症を理解し、皆で考えていきたかったから

高齢者の慢性期医療を担う療養病床としての機能を活かし、認知症予防という視点で地域に還元できることはないかと考えた。神経内科の医師（常勤）が5名という強みを活かし、認知症外来を開放。認知症の診断や予防に対する専門的なアプローチができるのではないかと考えた

施設を地域に知ってもらいたい

地域の人との関わり方の向上と、認知症の居宅事業所として周囲に力になればと思いました

かねてから法人として地域貢献できる場づくりを模索していた。いきいき支援センターから認知症カフェの取り組みの紹介があった

小規模多機能で名古屋市独自報酬加算を算定する内容に、「地域住民が参加している行事を開催している」というのがあるため。どうせやるなら利用者さんのためになるイベントを企画したかったのだ

地域の方々に役に立てることがないだろうかと思っていた時、包括の方に勧められて

取り組みに共感して

最近マスコミでも認知症について取り上げられることが増え、名古屋市でも認知症に対する前進的な取り組みを目指していると知ったため

「認知症カフェ登録受付中」のチラシを見て

いきいき支援センタースタッフよりお話をきいて興味を持ちました

元々施設内で入居者向けに喫茶店を行っていたところ、いきいき支援センター職員より認知症カフェの話聞き始めるようになった

南区で認知症カフェを開催している施設がいくつかあり、興味を持ったため

名古屋市から「やりませんか？」と声をかけられたことがきっかけです

認知症サポーター養成講座を受講したのがきっかけです

他社のオープンを見て

名古屋市からの案内

地域に認知症カフェがなく、名古屋市も認知症カフェ設置を勧めていた

しょうちゃんカフェに参加し、重要性を確認した

「なごや認知症カフェ」の在り方に関する調査研究 報告書

目 次

序章. はじめに	5
第1章. 本調査の背景	6
1. なぜ認知症カフェに注目が集まっているのか	6
2. 名古屋市における認知症カフェの取り組み	7
第2章. 「なごや認知症カフェ」の現状と課題	11
1. アンケート調査の概要	11
2. 「なごや認知症カフェ」の現状	11
3. 「なごや認知症カフェ」の課題	14
第3章. 課題の克服をめざす取り組み	18
1. 課題の克服をめざして	18
2. 訪問調査から明らかになった実践の工夫	19
3. 「なごや認知症カフェ」の活動支援	23
第4章. まとめ：認知症になっても安心して暮らせるまちづくりに向けて	29
1. 「なごや認知症カフェ」の課題とその克服をめざして	29
2. カフェへの期待と今後	30
3. 本調査の限界と今後の課題	31
参考文献	32

参考資料

1. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査票	34
2. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査結果の詳細	37
3. 座談会：「なごや認知症カフェ」活動支援への思い	52
4. 名古屋市における取り組み	56
◎「なごや認知症カフェ」事業について	56
・なごや認知症カフェ登録事業実施要領	56
・なごや認知症カフェ開設助成事業実施要領	57
・なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領	58
◎「なごや認知症カフェ」運営者交流会 実施報告	59

序章. はじめに

認知症は「何もできなくなる」「何も分からなくなる」病気といった偏見が強く、認知症と診断された人やその家族は混乱したり動揺したりすることが多い。さらに「どこで相談できるのか分からない」という初期ケアにおける空白期間の存在が問題視されている。そこで、名古屋市は、認知症をもつ人やその家族を支援する新たな仕組みとして「なごや認知症カフェ」を2015年7月から設置してきた。

「なごや認知症カフェ」は、名古屋市において認知症施策の重点事業の1つに位置づけられている。事業開始から1年半を経て、2017年3月31日時点で127のカフェが開設・運営されているものの、新しい取り組みのためその実態はこれまで十分に把握されることはなかった¹。「なごや認知症カフェ」をどのように形作り、運営していくかを検討するためには、客観的なデータに基づいた現状分析が欠かせない。

そこで、本稿では「なごや認知症カフェ」の現状と課題についてアンケート調査を用いて分析し、考察した。加えて、アンケート調査を実施した結果をもとに、2カ所について訪問調査を行い、運営スタッフと協力者による参加者へのアプローチの詳細を明らかにしようと試みている。これらの調査で得たデータと現時点で利用可能なデータを用いて、本稿は「なごや認知症カフェ」の現状と課題を明らかにし、同時に課題解決に向けた新たな方向性を提示することで、カフェ運営者のみならず「なごや認知症カフェ」の整備に関わる関係者が現状と課題を共有し、今後のあり方について検討する際の材料を提供することをめざす。

¹ 認知症カフェを対象にした調査研究は進みつつある。全国規模の調査には、東北福祉会・認知症介護研究・研修仙台センター（2017）と認知症の人と家族の会（2013）がある。次に、「なごや認知症カフェ」を対象にした調査研究には金治・染野・山本（2016）があるが、運営スタッフや協力者が参加者間の交流がはかれるようどのようにアプローチしているのか、あるいは運営者が地域住民／地域にある他機関にどのように働きかけをしているのかといったことまでは明らかにされていない。

第1章. 本調査の背景

1. なぜ認知症カフェに注目が集まっているのか

わが国の65歳以上の高齢者人口は、2015年10月1日時点で過去最高の3,392万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）も26.7%と過去最高になった（内閣府（編），2016）。今後、高齢化率は上昇を続けて2030年には33.4%に達し、3人に1人が65歳以上の高齢者になると予測されている。

高齢者人口の急増とともに認知症の人が増加し、2025年には700万人になると推計されている（厚生労働省，2015）。65歳以上の高齢者のうち5人に1人が認知症になる見込みで、厚生労働省は「今や認知症は誰もが関わる可能性のある身近な病気」（厚生労働省，2015年，pp.1）と位置づけている。

認知症の増加に伴い、厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチーム（2012）は、2012年6月に出した『今後の認知症施策の方向性について』のなかで、「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる社会」（pp.2～3）の実現を目指す方針を発表した²。同時に、認知症に関する正しい知識と理解の普及、見守り、相談支援などの地域による支援体制の構築について、多くの自治体では十分な対応ができていないと指摘している。上記の方針と指摘を受け、厚生労働省は『認知症施策推進5か年計画』（2012年）と『認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向け』（2015年）を作成し、認知症の人やその家族に対する支援の一環として認知症カフェの設置をうたっている³。

認知症カフェについて、厚生労働省は「認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場」（厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチーム，2012年，pp.23）と記述するのみのため、運営者の捉え方もさまざまで、地域の実情に合わせて様々な実践や運営方法がとられている⁴。たとえば、医師で認知症カフェの実践者でもある武地（編）（2015）は、認知症カフェを「認知症の人とその家族・友人にとって自分らしさを発揮し、社会とかかわりをもてる場所であるとともに、情報交換や共感ができ、心が安らぐ場所」（pp.36）と定義している。また、東北福祉会・認知症介護研究・研修仙台センター（2017）は「認知症の人と介護者を第一に、地域住民、専門職も、住みやすい地域社会づくりに貢献できる場所」であり、「多様な人々の対話と会話を基盤としており、地域そして地域住民とのゆるやかな調和と協働により成立するものである」（pp.14）と述べている。

認知症カフェは全国に広がり、47都道府県の2,253カ所（2015年度）で開催されている（厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室，2016）。認知症カフェが全国で注目を集める理由は、第一に、認知症の人にとって早期診断・早期対応が非常に重要とされているにもかかわらず、認知症の人や家族が支援の入り口にたどり着くまでに時間を要する現状がある（「京都式認知症ケアを考えるつどい」実行委員会（編），2012；武地（編），2015）。その現状を改善する主体として、認知症カフェに注目が集まっている。認知症の人や家族がカフェに参加することで認知症への理解が深まり、早期受診につながると考えられている。第二に、早期受診の結果「認知症と診断されたが、どこに相談したらよいのか分からない」といった悩みを認知症の人や家族がもつ場合も多くある。認知症カフェの取り組みは彼らを支援する新たな手法として期待されている。

² 厚生労働省（2012）は、これまでの認知症施策について「かつて、私たちは認知症を何も分からなくなる病気と考え、徘徊や大声を出すなどの症状だけに目を向け、認知症の人の訴えを理解しようとするどころか、多くの場合、認知症の人を疎んじたり、拘束するなど、不当な扱いをしてきた」（pp.2）と振り返っている。

³ 厚生労働省（2015）は、認知症カフェの推進について、2018年度以降全ての市町村に配置される認知症地域支援推進員等の企画により地域の実情に応じ実施するとしている。

⁴ 矢吹（2016）は、認知症カフェには現時点で公的な基準や制約がないことを指摘したうえで、新しい取り組みのため「認知症カフェの専門家」という人はほとんどいない」（pp.V）と述べている。

2. 名古屋市における認知症カフェの取り組み

名古屋市に暮らす65歳以上の認知症高齢者数は、2010年からの5年間で約12,000人増加して55,059人（2016年3月末）となっており、今後も増え続けることが予測されている（名古屋市，2015）。そのため、厚生労働省が作成した『認知症施策推進総合戦略』の柱としてうたわれている「認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」や「容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供」、「介護者への支援」のように、名古屋市においても早期診断・早期対応を軸とした、先を見据えた早い段階からの認知症の人や家族の支援が不可欠になっている。

名古屋市における高齢者人口等の将来推計

区 分	第6期			第7期	第9期
	2015年	2016年	2017年	2018年～	2024年～
●人口の将来推計 (人)					
総人口	2,274,000	2,274,000	2,273,000	2,265,000	2,238,000
65歳以上	553,000	562,000	569,000	580,000	588,000
65～74歳	291,000	289,000	286,000	275,000	237,000
75歳以上	262,000	273,000	283,000	305,000	351,000
●認知症高齢者数の将来推計					
認知症高齢者	56,000			66,000	75,000
増加率	(2010年42,938人を100%とすると) 130%			153%	174%
●要支援・要介護者の将来推計					
要支援	34,800	38,200	41,700	48,300	51,400
要介護	68,300	70,800	73,300	80,400	90,400
合計	103,100	109,000	115,000	128,700	141,800

出典：名古屋市（2015）を参考に筆者作成

名古屋市は、各区に地域のネットワークを構築するため地域包括ケア推進会議と認知症専門部会を設置したり、各区にあるいきいき支援センター⁵が認知症総合相談窓口となって認知症高齢者を介護する家族支援事業を実施するなど、積極的に認知症施策に取り組んできた。同時に、認知症に対する理解を深めることを目的に認知症サポーター⁶を97,071人養成している（2017年3月31日時点）。こうした取り組みを基礎としながら、名古屋市は認知症の人と家族を支援する中核機関として認知症相談支援センターを設置したり、認知症初期集中支援チームや認知症地域支援推進員をすべてのいきいき支援センターに配置するなど、早期診断・早期対応の支援体制づくりを進めている。

支援体制づくりのなかで、地域での活動拠点となる取り組みが認知症カフェである。名古屋市では、認知症カフェを「認知症の人や家族、地域住民、専門職など誰もが気軽に集える場で、認知症の人や家族同士の相互交流・情報交換、家族の介護負担の軽減、認知症状の悪化予防又は地域での認知症啓発を目的とするもの」と定義し、次の5つの役割を担うとしている。

- ①認知症の人が安心して過ごせる場所（地域での居場所）
- ②認知症の人を介護する家族の負担を軽減できる場所
- ③認知症の正しい理解が深められる場所（普及・啓発）
- ④認知症について気軽に相談できる場所
- ⑤地域でのつながりや連携が深められる場所（地域ネットワークづくり）

⁵ いきいき支援センターは、名古屋市における地域包括支援センターの名称である。名古屋市では各区に1～2カ所、全市に29カ所設置されている。また、分室が各区1カ所設置されている。各センター・分室には保健師・社会福祉士・主任介護支援専門員といった専門職が配置され、高齢者の身近な健康、福祉、介護等の総合相談窓口になっている。

⁶ 認知症サポーターは、認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する応援者を指す。市町村や職場などで実施されている認知症サポーター養成講座を受講した人が認知症サポーターになる。厚生労働省は2017年度末までに認知症サポーターを800万人養成することを目指している（厚生労働省，2015）。

名古屋市では、こうした認知症カフェを「なごや認知症カフェ」と呼び、推進や普及を図るため、2015年7月から「なごや認知症カフェ登録事業」と「なごや認知症カフェ開設助成事業」を設け、2016年9月からは「なごや認知症カフェ運営助成事業」も開始している⁷。2017年度までに市内150カ所（概ね中学校区に1カ所）の設置をめざし、各いきいき支援センターに配置された認知症地域支援推進員が中心となって開設・運営の支援をしている。2017年3月31日時点で「なごや認知症カフェ」は127カ所の登録がある。

「なごや認知症カフェ」の大きな特徴は専門職の配置である。名古屋市では、「なごや認知症カフェ開設助成事業」および「なごや認知症カフェ運営助成事業」の要件として、参加者がいつでも安心して相談できるよう相談業務等に従事したことがある専門職の配置を必須としている。専門職とは「医師・看護師等の医療関係者や社会福祉士・精神保健福祉士等の福祉関係者、認知症キャラバン・メイト⁸等認知症に関する知識を習得している者」で、「認知症の相談業務に従事した経験のある者」を指す。専門職が配置されることで「いつ、どの段階で、どこに相談していいのかわからない」といった不安を抱く認知症の人や家族に対して役に立つ情報を提供して、早期診断・早期対応の機会を提供することをめざしている。

認知症施策の重点事業として名古屋市が位置づける「なごや認知症カフェ」であるが、新しい取り組みであるためその実態は十分に把握されていない。そこで、次章では「なごや認知症カフェ」の現状と課題についてアンケート調査を用いて分析し、考察する。

① なごや認知症カフェ登録事業

【内容】


- ・「なごや認知症カフェ」として名古屋市へ登録し、把握したカフェを一覧化して周知・PRするもの

【要件】

- ・実施主体：団体
- ・頻度：年4回以上
- ・場所：市内の一定の場所

【登録したカフェへの特典】

- ・一覧化し、インターネット等で広報
- ・認定ステッカーの進呈



※開設助成を受けたカフェは、同時に「なごや認知症カフェ」に登録されるため、改めて登録する必要はない

② なごや認知症カフェ開設助成事業

【内容】

- ・カフェを開設しようとする団体に上限5万円まで、開設に必要な物品購入費を助成するもの

【要件】

- ・実施主体：団体
- ・頻度：月1回以上（1回あたり概ね2時間）
- ・場所：市内の一定の場所
- ・期間：3年以上継続実施
- ・人員：医師・看護師等医療関係者、社会福祉士等の福祉関係者であり、相談業務に従事経験のある者1名を配置

③ なごや認知症カフェ運営助成事業

【内容】

- ・消耗品費や印刷製本費など、カフェの運営にかかる経費を半期ごとに助成するもの
- ・月2～3回：月額2,000円
- ・月4回以上：月額4,000円

【要件】

- ・対象：なごや認知症カフェに登録しており、月2回以上開催しているカフェ実施主体
- ・人数：各回5人以上（運営スタッフ除く）の参加がある

※ その他の要件は、開設助成と同様



名古屋市西区にある認知症カフェ
「お茶の間びわ」の様子（2015年11月11日撮影）



「なごや認知症カフェ」認定ステッカー

⁷ なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領の制定は2016年8月だが、2016年4月実施分より助成対象としている。

⁸ キャラバン・メイトは認知症サポーターを養成する「認知症サポーター養成講座」を開催し、講師役を務める人。キャラバン・メイトになるためには、自治体ごとに開催する「キャラバン・メイト養成研修」を受講し、登録する必要がある。

「なごや認知症カフェ」の基礎情報（2017年3月31日時点、127カ所）

区別カフェ数	カ所
千種	2
東	4
北	13
西	9
中村	7
中	2
昭和	6
瑞穂	5
熱田	6
中川	15
港	8
南	17
守山	6
緑	10
名東	7
天白	10

運営団体（法人種別）	カ所
株式会社	42
社会福祉法人	25
医療法人・社会医療法人	21
地域住民	11
生活協同組合	9
有限会社	5
いきいき支援センター	4
合同会社・合資会社	3
特定非営利活動法人	3
財団法人	1
独立行政法人	1
一般社団法人	1
学校法人	1

開催場所	カ所
介護関連事業所	83
医療機関	15
いきいき支援センター	2
その他	27

開催頻度	カ所
週1回以上	11
月3回	1
月2回	8
月1回	93
年8回（1.5カ月に1回）	1
年6回（2カ月に1回）	7
年4回（3カ月に1回）	6

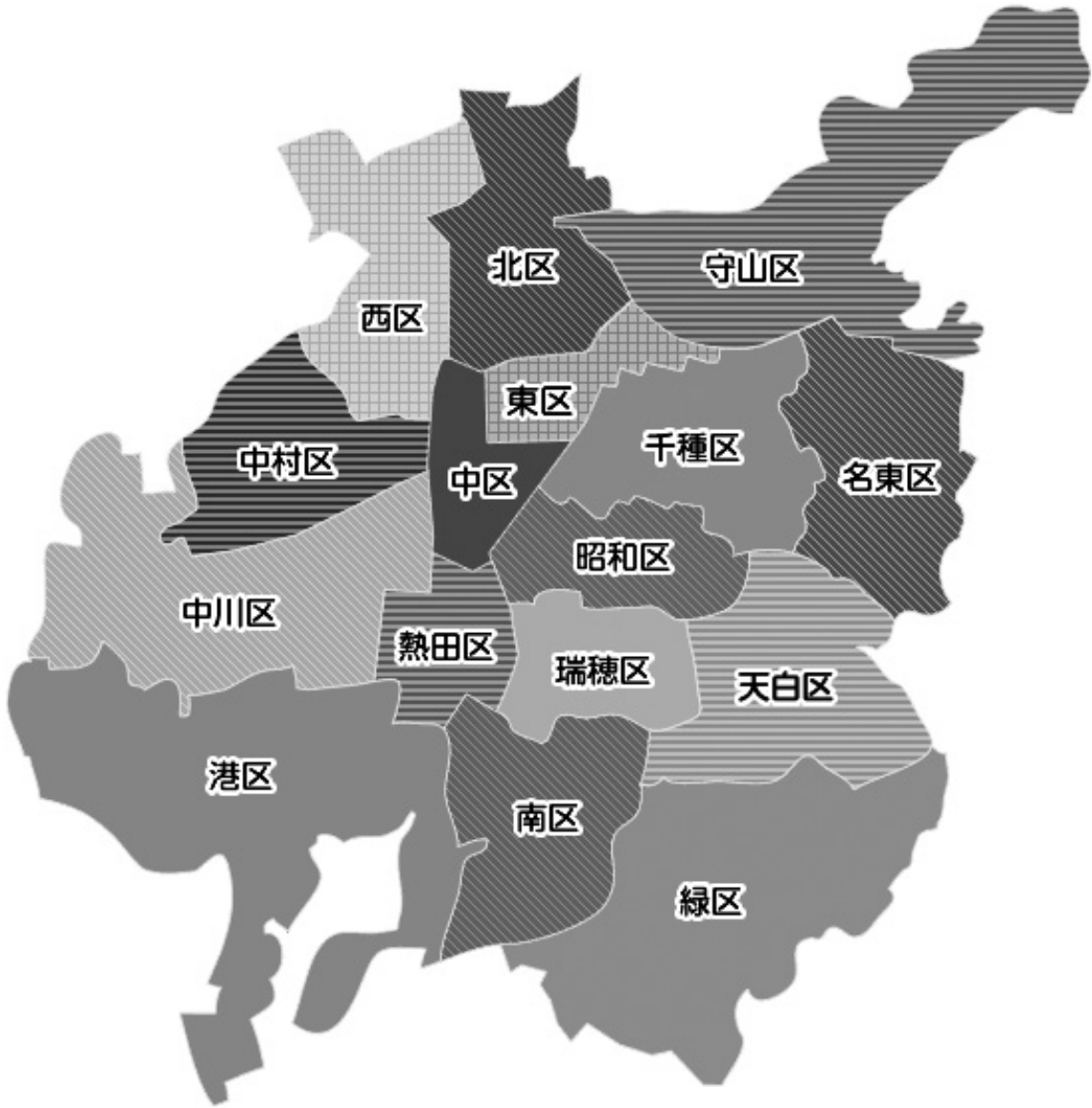
開催時間	カ所
1時間30分	18
2時間	97
2時間30分	4
3時間	6
4時間以上	2

運営主体（事業所種別）	カ所
デイサービス	16
複数種別	13
介護老人保健施設	12
特別養護老人ホーム	11
地域住民	11
グループホーム	8
介護付き有料	7
診療所	7
小規模多機能型居宅介護	6
病院	6
居宅介護支援事業所	5
いきいき支援センター	4
訪問介護	4
認知症対応型デイサービス	2
高齢者住宅	2
住宅型有料老人ホーム	2
訪問看護	1
喫茶店	1
事業団	1
福祉会館	1
歯科	1
地域密着型特別養護老人ホーム	1
短期大学	1
保育園	1
薬局	1
その他	2

開催曜日	カ所
月曜日	10
火曜日	14
水曜日	22
木曜日	20
金曜日	15
土曜日	23
日曜日	17
曜日指定なし	21

参加費	カ所
0円	20
～100円	61
～200円	29
～300円	15
～400円	1
～500円	1

名古屋市 区の配置図



出典：名古屋市公式ウェブサイトより

第2章. 「なごや認知症カフェ」の現状と課題

1. アンケート調査の概要

本調査は2016年6月30日時点で開設されている「なごや認知症カフェ」86カ所に対して行われ、76のカフェから回答を得た（回収率88.4%）。ここでは定量的な面での調査結果とアンケートの自由記述欄に寄せられた現場レベルでの率直な意見や要望等を用いながら、「なごや認知症カフェ」の現状と課題を整理する。

調査の概要

(1) 調査の目的

「なごや認知症カフェ」の現状と今後の課題を明らかにすることで、実際の運営を行うカフェ運営者のみならず、「なごや認知症カフェ」の整備に関わる関係者が、現状の課題を共有し、今後の在り方について検討する際の材料を提供することをめざす。

(2) 調査の概要

- ◎調査対象：2016年6月30日時点で開設されている「なごや認知症カフェ」86カ所
- ◎調査方法：調査票郵送、回収
- ◎調査時期：2016年7月21日（調査票郵送）～2016年8月31日（回収）
- ◎調査票回収状況：発送数86票 回収数76票
- ◎回収率：88.4%

(3) 用語の定義

運営スタッフ：団体に所属し、「なごや認知症カフェ」の運営に携わる人

協力者：事前準備、運営、振り返り等に協力する団体以外の人（ボランティア）

参加者：上記の運営スタッフ、協力者以外の参加者（認知症の人や家族、地域住民など）のこと

認知症地域支援推進員：

認知症の人や家族が暮らしやすいまちづくりをめざし、地域におけるネットワークの構築、認知症ケアパスの作成・普及、認知症カフェの開設・運営支援などに取り組む専門職のこと。2016年4月から、名古屋市内の全いきいき支援センターに1名ずつ配置されている。

2. 「なごや認知症カフェ」の現状

(1) 開催目的

「なごや認知症カフェ」は、「なごや認知症カフェ登録事業実施要領」によると「(1) 認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換、(2) 家族の介護負担の軽減、(3) 認知症状の悪化予防、(4) 地域での認知症啓発」の全部または一部を主たる目的とする。もっとも重視する目的を問う設問に対して、多い順に認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換66.2%、地域での認知症啓発19.1%、その他11.8%、家族の介護負担の軽減2.9%であった。認知症状の悪化予防を挙げたカフェはなかった^{9, 10}。

⁹ もっとも重視する目的に「その他」を選択した8つの認知症カフェについて詳しく見ると、それぞれ「地域交流の場としての役割」（熱田区）、「地域貢献」（南区）、「地域の皆様の社会交流の場の提供」（熱田区）、「家にこもりがちな方が出かけるきっかけになる場を設けること」（港区）、「特養老人ホームの地域開放」（中川区）、「軽度認知障害の人々も含めて認知症発症の予防」（中川区）、「認知症予防プログラムへの参加を通じて、認知症に対する理解と支え合いのネットワークを作りたい」（中村区）、「認知症の方が（自施設を）利用していただくキッカケになるようにしていく（括弧内は筆者加筆）」（天白区）を目的として重視している。

¹⁰ 2番目に優先する目的として「認知症状の悪化予防」を挙げた認知症カフェは14ある。別の設問（問3）でカフェのプログラムを問うところ（自由記述）、9.3%のカフェが認知症予防と回答している。

	回答数	構成比
認知症の本人や家族同士の相互交流・情報交換	45	66.2 %
家族の介護負担の軽減	2	2.9 %
認知症状の悪化予防	0	0.0 %
地域での認知症啓発	13	19.1 %
その他	8	11.8 %

(注) 構成比 = 回答数 / 有効回答 68

(2) 参加者数とその変化

参加者は、認知症の人や家族、地域住民などを指し、運営スタッフと協力者を含まない。カフェ1回につき参加者の平均は13.9人である¹¹。内訳は65歳以上の認知症の人3.1人、64歳以下の認知症の人0.2人、家族1.9人、地域住民5.5人、いきいき支援センター職員0.4人、介護・福祉専門職1.3人、医療専門職0.4人、その他1.1人である。

参加者を性別で見ると、女性が男性に比べて3.5倍多い。男性の参加がないカフェは、全体の13.0%を占める。

参加者数には変化はあるのだろうか。カフェをこれまで3回以上開催した運営者を対象に「開設時に比べて参加者の変化を教えてください」と尋ねたところ、参加者が「増えている」のは37.7%、逆に「減っている」のが11.6%であった。「増えている」理由としては「地域へ向けて回覧板や民生委員さんと連携強化を図っている」(中村区)、「少しずつカフェの周知、開催日時の告知方法、チラシ配布等の広報活動等々の成果が上がってきている」(中川区)、「毎月のチラシ配布と開催の様子を「おたより」として知らせている」(緑区)、他方「減っている」理由としては「地域PR不足」(南区)、「認知症カフェとのネーミングがあるため、ご自分は認知症ではないとか、まだそこまではないと参加されない」(中川区)、「対象者をしばっている」(西区)といった意見があった。

	回答数	構成比
増えている	26	37.7 %
ほとんど変化なし	35	50.7 %
減っている	8	11.6 %

(注) 構成比 = 回答数 / 有効回答 69

(3) 広報

認知症の人や家族に案内を行っているカフェは92.0%である。広報をしているカフェはどのような方法を用いているのだろうか。自施設の利用者に案内73.5%、いきいき支援センターと連携して案内69.1%、民生委員と連携して案内47.1%、町内会・地域自治会と連携して案内44.1%、自団体のホームページ、SNSを通して案内44.1%が多い傾向である。

地域住民に案内をしているカフェは94.5%だった。同様に案内方法を見ると、自団体でチラシ作成・配布79.4%、いきいき支援センターと連携して案内63.2%、町内会・地域自治会と連携して案内54.4%、民生委員と連携して案内47.1%、自団体のホームページ、SNSを通して案内29.4%が多い傾向だった。

¹¹ 「なごや認知症カフェ」に多くの参加者が集まることは大切である。けれども、筆者は、カフェを必要とする認知症の人や家族が居心地の良さを感じ、有効な情報を得たり、交流できることの方がより大事と考えている。さらに、会場の規模や最大収容人数などが本調査では不明であることから、参加者数がカフェの評価基準とは言い難い。

(4) 協力者

協力者とは事前準備、運営、振り返り等に協力する団体以外の人（ボランティア）を指す。カフェで活動する協力者の平均は5.4人である。その属性は、介護・福祉専門職24.4%、地域住民22.0%、民生委員12.2%、認知症サポーター9.8%、その他9.1%が多い傾向だった。また、協力者のいないカフェは12.3%ある。

協力者の募集は40.5%のカフェが行っている。その募集方法は自団体の関係者に募集43.3%がもっとも多く、いきいき支援センターと連携して募集33.3%、町内会・地域自治会と連携して募集30.0%、自団体でチラシ制作・配布26.7%が続く。

協力者のスキルアップについては、32.4%のカフェで取り組まれていた。内容は、認知症サポーター養成講座の受講やカフェ終了後の振り返り・意見交換など様々である。

(5) 認知症地域支援推進員・いきいき支援センターとの連携

カフェ支援をしているのが認知症地域支援推進員といきいき支援センターである。連携はどれくらいできているのだろうか。「認知症地域支援推進員やいきいき支援センターはカフェを応援しています。連携はどれくらいありますか」という設問に対し、もっとも多かったのが「とれている」で38.4%、続くのが「あまりとれていない」で35.6%だった。

連携を肯定的に評価する意見としては、「カフェ開設時にボランティア向けに研修を実施したが、講師としてボランティアの心構えや留意点等をご教示いただいた。また、カフェの側面的な支援として、必要時に連携をとっている」（千種区）、「認知症カフェ交流会を開催しているため、それに参加、カフェにも出来る限る参加してくれている」（中川区）などがあつた。その一方で、連携が不十分と感じている運営者が39.7%（「あまりとれていない」と「とれていない」の合計）いる。その理由として、たとえば週末にカフェを開催している運営者からは、「いきいき支援センターが土曜日・日曜日に開所していないため連携がとりにくい」といった意見（天白区・北区）や、認知症地域支援推進員といきいき支援センターからの現場への訪問・アプローチが少ないといった声が複数あつた。

	回答数	構成比
十分とれている	16	21.9%
とれている	28	38.4%
あまりとれていない	26	35.6%
とれていない	3	4.1%

（注）構成比＝回答数／有効回答73

(6) 地域（地域住民、町内会）との関わり

カフェを開設したことで地域との関わりが「増えている」と回答したカフェが45.3%ある。地域との関わりが「増えている」具体的な内容としては、以下のような自由記述回答があつた。

一方で「ほとんど変化なし」と回答したカフェは54.7%あつた。

いかにして町内の方々に役立てることが出来るかを町内会役員の方とよく話すようになってきている【南区】
町内会長をはじめ老人会会長、民生委員等にご参加いただいている。また、案内配布などカフェのPRにもご協力いただいている【瑞穂区】
地域の方が認知症サポーター養成講座を受けている【中川区】
民生委員の方が協力的で告知などの助言をしてくださるようになった。またカフェボランティアの方がカフェ開催日以外でも毎週決まった曜日に施設にボランティアに来てくださるようになった【中川区】
カフェをきっかけに地域住民からいろいろな相談や地域行事への誘いをいただくようになった【西区】

(7) 認知症カフェの効果

認知症の人に対して効果を感じているカフェは60.6%だった。同様に、認知症の人の家族に対しては60.6%、地域住民に対しては63.2%、協力者に対しては63.8%、運営スタッフに対しては77.8%のカフェが効果を感じている。

自由記述回答からは、上記の人たちへの具体的な効果を読み取ることができる。

認知症の人	<ul style="list-style-type: none"> ・カフェに参加中は表情がいきいきとされ、「楽しかった」と帰るときに言われる【北区】 ・「カフェに定期的に何うことで、本人が以前に比べ明るくなった」「生活が規則正しくなった」「新しい友人が増えた」「出かける場所ができ、生きがいができた」「何もお話しできないけれど、出かけられることを楽しんでいる」「出かけてお茶を飲める場所ができ、性格が穏やかになった」「カフェは心からくつろげ、安心していられる場所」など好ましい効果が生まれている【千種区】 ・とてもイベントを楽しんでおられる。貴重な外部とつながる社会交流の場になっている【瑞穂区】 ・デイも利用されていますが、全然雰囲気が違うのでリラックスしてみえるように思います【千種区】 ・地域住民とご本人が顔なじみとなり、気軽に会話できる関係となっている【中川区】
認知症の人の家族	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が楽しんでいる姿を見て、安心され前向きに変わられた【熱田区】 ・「同じような立場の方々と話ができて、慰められることがある」「本音で話せる友人がみつけれられた」「自分自身の憩いの場所になっている。皆様から親切をいただいている」「介護の役立つ知識が得られる場所」「家族サロンしか知らなかったが何物にも代えがたい場所になっている」など、カフェに参加している間は介護から解放され、介護者の癒しの時間となっている【千種区】 ・「認知症」という病気を知っていただくことと、ご本人の姿（きちんと支援すれば安定）を見てもらえる【緑区】 ・「一緒に来られるところできてよかった。家ではほとんど会話しないがここではよく話できて楽しい」と言ってくださっている【守山区】 ・気楽に看護師、ケアマネジャーと話ができる場所として効果大である【南区】
地域住民	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症への知識を深めようと質問される方が増加。気軽に認知症のご本人への声掛けをされる方が増加した【中川区】 ・自治会の方々とともに仲良くなり、地域の防災訓練、施設の防災訓練など、おたがいに参加するようになった【瑞穂区】 ・アンケート結果（5回来店したり、リピーター向けアンケート）では認知症のイメージが変わった人が15人中11人【南区】 ・活動を通じての地域の方々を含むボランティアと参加者とのつながり構築に寄与している【名東区】 ・近隣の住宅より自治会長さんやボラさん、民生委員さんが参加。地域の方は認知症の方を見守り、カフェへ一緒にみえる。また防災についての話し合いをする【北区】
協力者	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の方と直接関わることで認知症の方の「できること」に目を向けるなど、理解が深まっている【港区】 ・認知症への誤解や偏見が少なくなり、地域ネットワークづくりに取り組んでくださっている【瑞穂区】 ・認知症の方と普段関わりはないが、興味があり、協力したいと思っている方がたくさんいらっしゃる。そんな方たちの第一歩になっていると思う【瑞穂区】 ・ボランティアのため、人が人を呼ぶ効果は感じている【南区】 ・地域で認知症について話題にすることが多くなっている【名東区】
運営スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の方はもちろん、地域の方とのふれ合い、交流も含めとても貴重な時間を過ごさせてもらっている。地域の需要があることを実際に感じることで、活動のモチベーションにつながっている【熱田区】 ・月1回の運営スタッフでの会議では、認知症の方と家族のボランティア参加に向けた支援の検討など参加者に向けた議論ができるようになってきている（モノ、カネの話が少なくなっている）【南区】 ・認知症の人や家族と会話することで、その人たちが求めている思いを聞くことができた【守山区】 ・施設サービス、在宅サービス関係なく、介護職員として地域への連携協力ということへの意識が少しずつ高まってきているように感じている【中川区】 ・自分たちも地域の一員としての自覚が芽生え、参加者の笑顔や言葉がけからモチベーションが上がり、認知症ケアについても自ら学びたいというスタッフも増えてきた【中川区】

3. 「なごや認知症カフェ」の課題

「なごや認知症カフェ」が自らの目的を達成するためにクリアすべき課題は何か。設問「今後、カフェを継続していくうえでの課題や問題点を教えてください（複数回答可）」に対する回答は以下のとおりだった。

	回答数	構成比
カフェの認知度が低い	53	70.7 %
認知症の本人の活躍の場ができていない	23	30.7 %
参加者が少ない	33	44.0 %
家族からの相談に対応できていない	5	6.7 %
地域住民の認知症への理解度が低い	21	28.0 %
運営スタッフのスキルアップ（場づくり・認知症の理解）	12	16.0 %
運営スタッフの確保が難しい	27	36.0 %
協力者の確保が難しい	21	28.0 %
協力者のスキルアップ（場づくり・認知症の理解）	10	13.3 %
運営費用の確保が難しい	15	20.0 %
開催場所の確保が難しい	3	4.0 %
地域の他機関との連携ができていない	18	24.0 %
その他	10	13.3 %

（注）複数回答のため、構成比＝回答数／有効回答75として計算した。

カフェ運営者の70.7%が「カフェの認知度が低い」ことを課題と捉えている。以下、多い順で見ると参加者が少ない44.0%、運営スタッフの確保が難しい36.0%、認知症の本人の活躍の場ができていない30.7%、地域住民の認知症への理解度が低い28.0%、協力者の確保が難しい28.0%となっている。

「なごや認知症カフェ」の課題について、上記の結果から本稿では「運営面：地域とのつながりをつくる」と「実践面：認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる」に整理したい。

- 【運営面】 地域とのつながりをつくる
- (1) 認知度の向上
 - (2) 連携
- 【実践面】 認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる
- (3) 仲間づくり
 - (4) 場づくり

これらの課題は、「地域を知り、地域とともにカフェを運営していくこと」と言い換えることもできるだろう。なぜなら、地域を知ることで、カフェ運営者が(1) 認知度の向上をはかる方策を検討できるし、地域にある他機関と(2) 連携をはかることもできる。さらに地域とともに在ることでカフェを運営する(3) 仲間づくりも可能になって、その仲間と協力して(4) 場づくりを行うことができる¹²。

最後に、整理した上記4つの課題について、アンケートの自由記入欄に寄せられた現場レベルでの率直な意見や要望等を用いて確認したい。

¹² アンケート調査で「運営費用の確保が難しい」を課題に挙げたカフェ運営者は2割いる。カフェの運営について、運営費用の確保が重要と筆者も認識しているけれども、本稿では地域で仲間を見つけ、協力して運営の工夫をしているカフェも少なくないことから、継続的な運営のための視点として前述の4点に焦点をあてる。

(1) 認知度の向上

すでに触れたように、カフェ運営者の7割が「カフェの認知度が低い」ことを課題に挙げている。また、「参加者が少ない」ことを課題と考える運営者も4割いる。さらに「地域住民の認知症への理解度が低い」ことを課題と捉える運営者が3割弱いた。

自由記入欄に目を向けると、地域住民への広報活動の必要性を訴える回答が複数ある。そのほかにも認知度向上の必要性を訴える次のようなものがあった。

施設がある場所の本当に近い距離の地域の人（ご近所さん）の参加が少ないので、施設がある町内、近隣の町内の方がカフェに足を運んでリピーターになってほしい。町内・近隣町内の方のいこいの場にしたい【中川区】
もっと宣伝して認知症の方やご家族さんが来れるようになるといい【南区】
区の運営会議に地域老人会の代表や民生委員、町内代表の参加を提案します。高齢者関係のいろんなイベントに認知症カフェの代表や代表チームを送ることなど社会認知度を高めていくことが必要だと思います【北区】
カフェの認知度を高めていただき、参加者を増やし、協力できる街づくりが必要【熱田区】

また、認知度が高くないために「あまり「認知症」というワードを使いすぎるのはどうかと思っている（敬遠されることも多い）」（熱田区）、「認知症カフェ」と書いてしまうと思いがいをされるケースが多い」（緑区）とのコメントもあった。

(2) 連携

認知症カフェを始めるのにエネルギーがいる。それと同じくらい「続ける」ことにもエネルギーと工夫がいる。非営利の活動である「なごや認知症カフェ」を継続的に運営するには、それ単体ではどうしても限界がある。地域に目を向け、町内会などの他機関との連携、そして認知症カフェ同士のつながりづくりを図ることが重要になる。けれども、カフェ運営を支援する認知症地域支援推進員といきいき支援センターとの連携が不十分と感じている運営者が4割近くいることはすでに触れたとおりである。さらに、アンケート調査では2割の運営者が「地域他機関との連携ができていない」ことを課題に挙げている。

ここでは連携についての運営者の意見を掲載する。

地域ボランティアさんと認知症カフェ、および福祉施設との交流を活発化するために情報交流・交換会等の頻度を増やしてもらい、またその後の経過や結果等を観察してもらい、より良い循環を作っていけたらと思います【天白区】
いきいき支援センターの形式的でない支援や取り組みを望みます。民生委員の方々との連携ができると良いのですが、個人情報の為情報が得られません。一人で閉じこもっている人々をどうしたらお誘いできるか、方法を探っています【中川区】
カフェ同士協力し合って単独ではなく、中村区全体で盛り上げていきたい。そのための情報交換だけでなく、運営していくうえでの人とお金について支援がほしいです【中村区】
役所やいきいき支援センターへ相談来所されたご本人やご家族へカフェの積極的な参加を促してもらいたい。行政職員にも参加いただき、カフェで気軽に相談もできるような環境が必要と考えている【中川区】

(3) 仲間づくり

認知症の人と家族が過ごしやすい環境をつくるためには、地域での仲間づくりが欠かせない。なぜなら地域に暮らす人たちをカフェの仲間に加えることによって、地域のニーズを知ることができる。さらに多様な経験をもった仲間が運営に加わることをきっかけにして、運営スタッフとの相互作用が生じて新たな視点が生まれる可能性も出てくるだろう。参加者にとっても、カフェをより身近に感じて足を運びやすくなるという利点もある。

けれども、現実問題として運営者の3割弱が「協力者の確保が難しい」と回答している。また、認知症サ

ポーターの参加がないカフェも78.4%あった。

運営スタッフの人数が少なく余裕がないため、協力者を募集しているが、なかなか集まらない。ボランティアの確保が必要【南区】
運営スタッフは通常の業務との兼ね合いでカフェに集中していただけないことがある。協力者、地域住民の協力がますます必要だと思います【中川区】
ボランティアスタッフさんやオレンジリングを持っている方への声かけ等、まだまだ足りていない【北区】
地域住民への広報活動（カフェの意義・目的を伝える）をし、協力を得る【中川区】

(4) 場づくり

認知症カフェを設置すれば参加者の抱える課題を解決できる、あるいは居場所になるわけではない。認知症の人や家族が集まって語り合ったとしてもピア・サポート¹³が生まれるわけではないのである。そこでは、カフェにおける運営スタッフと協力者による働きかけ、つまり場づくりが鍵になる¹⁴。

場づくりを進めるためには、運営スタッフと協力者のスキルアップが不可欠である。なぜなら、カフェ参加者の多様なニーズを把握することが求められるからである。

場づくりの課題を運営者がどのように捉えているのかについては、本稿の問題関心に照らし合わせて整理が必要である。「運営スタッフの確保が難しい」と36.0%の運営者が回答しているものの、これは「なごや認知症カフェ」全般の課題というよりも運営主体（とくに介護事業所）の置かれた状況に依ると筆者は考える。そのため、本稿では「認知症の本人の活躍の場ができていない」（30.7%）、「運営スタッフのスキルアップ（場づくり・認知症の理解）」（16.0%）、「協力者のスキルアップ（場づくり・認知症の理解）」（13.3%）といった課題を優先的に扱うことにする。

本人と家族のための認知症カフェだからこそできる活動を加えていくこと（認知症に関わる話題やテーマを取り上げ、情報を提供する）。参加者や協力ボランティアが参加意義を感じてもらえるような仕掛けを作っていくこと（医師などを招いてミニ講話を開催する）。地域に根付き必要だと思っていただけるように専門的な支援に結び付ける窓口となるような場所になること【守山区】
認知症のご本人の参加を増やしていくことが難しいと感じています。具体的に必要な支援というのは思い浮かないのですが、そのような方の参加を増やしていけると良いと思います【中区】
全体を見渡すのが難しいため、机などの設置の工夫が必要【南区】
単にお茶して語らうカフェにこだわらない集いの仕方について視野を広げることも必要だと思う【天白区】
地域の中に埋もれている認知症の方やご家族の方が安心して気軽に相談できる場所となれるようにカフェの運営主体も努力し、それに向けていきいき支援センターの協力や連携を強化できるような仕組みができることを望みます【中村区】

¹³ 伊藤（2013）はピア・サポートを「ある人が同じような苦しみを抱えていると思う人を支える行為、あるいは、そのように思う人同士による支え合いの相互行為」（pp.2）と定義している。

¹⁴ 三井（2012）は場を「ある特定の空間における、さまざまな人やモノが織りなす関係性」（pp.25）と定義したうえで、場の力を育もうとするときには「その＜場＞を直接にコントロールすることを目指すよりも、そこにいる人たちの力を「信じる」ことが必要になる」（pp.36）と述べている。

第3章. 課題の克服をめざす取り組み

1. 課題の克服をめざして

「なごや認知症カフェ」の運営者が運営上の課題を抱えていることを前章で確認した。その一方で、課題を克服しようとする取り組みが現場では始まっている。「地域とのつながりをつくる」（認知度の向上・連携）と「認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる」（仲間づくり・場づくり）の好事例から学ぶことで、カフェを必要とする人たちに支援を届けていくことができるのではないだろうか。

以下では、まずアンケートに寄せられた現場レベルでの率直な意見を用いながら、その取り組みを見ていく。

(1) 認知度の向上

多くのカフェが認知度の向上をめざして試行錯誤をしながら、地道な取り組みをしている。認知症の人と家族に対しては92.0%、地域住民に対しては94.5%のカフェが働きかけをしていることはすでに触れたとおりである。

- 地域の様々な人びとに「認知症カフェ」というものを知ってもらいたいため、広報活動に力を入れている。地元の朝市（地元JA主催）でチラシを配布。施設周囲にのぼりを立てたり、看板を自分たちで作成し、設置している（少しずつ認知度は上がってきているようにも感じる）【中川区】
- 認知症カフェは月1回（第2水曜日）の開催であるが、他の週もコミュニティカフェをオープンし、「水曜日はあそこのカフェに行く」という馴染みの場所として位置づけるようにしている【西区】
- まずは窓口を広げるために地域の方々にお知らせをしている【南区】
- 近くのクリーニング屋さんにチラシを置いていただいて、お客さんに声かけしていただくようにしている【千種区】

(2) 連携

「近所の方へ声かけをしたり、チラシをポスティングしたりしていますが、効果がみられません」と回答するカフェ（北区）もあるように、カフェ単体での働きかけには限界がある。そこで重要になってくるのが連携である。複数のカフェでは、いきいき支援センターや民生委員、町内会等と連携がはかられている。

- 他事業所と連携をとり、プログラム等のアドバイスを受けている【中川区】
- 中村区は連携して介護に取り組まれているように感じる。そういった会に時間があるときは必ず管理者が参加し、カフェのみならずいろいろな情報を得るようにしている。その情報をカフェに活かしていこうと考えている【中村区】
- 関係各社への売り込み（声かけ、アピール）。居宅介護支援専門員が関わることでスムーズに行えている【熱田区】
- 認知症に関する最新情報を収集、学ぶため新聞やネットから、またいきいき支援センター職員様から聞き取り、カフェ当日情報発信できるようにしている【中川区】

(3) 仲間づくり

認知症の人と家族が過ごしやすいカフェをつくるためには、地域での仲間づくりが欠かせない。まず、協力者の募集は4割のカフェが行っている。その一方で2割を超すカフェが「協力者の確保が難しい」と回答している。どんな立派な取り組みでも、そこに何らかの意味をつくりだすことができなければ仲間づくりは難しい。「正しい」だけでは仲間は増えないのである。仲間づくりに向けて、現場では様々な工夫がおこなわれている。

- 自由な発想を大切に、上下の分けへだてなく参加意識でもって運営している【南区】
- 地域住民が共に学び、共に考え、自由に意見が言い合える場であること【瑞穂区】
- ボランティアさんが自主的に行動できるよう、アイデアは行動に移せるよう物品を用意したり、人を手配したりしている【北区】
- より多くの方が利用していただけるようにボランティアさんや地域の方々に働きかけを行っている【南区】
- 協力者（ボランティア）の役割分担、事前・事後のミーティングを必ず行う【守山区】
- カフェを今後開催しようとする方々のための「カフェ開設準備講座」を開催し、カフェ実施上のスタンスや運営上の工夫とノウハウ、カフェ利用者の思いなどを伝えている。名古屋市内外からの視察や取材はお断りせず受け入れている【千種区】

(4) 場づくり

認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくるために、さまざまな工夫が行われている。

- 参加者に認知症の方本人が見える際に、スタッフ（専門職）はそばにるようにしている。参加者同士で認知症介護の大変さを話される方もあり、それを聞いてつらくならないようにするため【南区】
- カフェの場所を身近に感じてもらえると良いと思っているので、入りやすいように専門職は私服にしています。音楽（BGM）をかけたり【天白区】
- 日頃の介護疲れの解消の場となるよう、話しやすい雰囲気づくり、席の配置に配慮している。認知症の方とそうでない方、どちらも居心地よく過ごしていただけるよう、認知症に対する正しい知識の共有に努めている【北区】
- 楽しい、役に立つ企画を考えて提供したいという思いもあるが、提供するだけでなく参加者が交流する、相談できる場をもうけることを心がけている。あくまでも企画はそのきっかけになればという気持ちである【熱田区】
- 専門職がかかわることで相談内容に柔軟に対応できる【天白区】
- 毎回アンケートをとり、カフェに参加されている方のニーズに沿ったプログラムを施設内での「認知症カフェプロジェクトチーム」の会議にて検討している【中川区】
- 来る方を主体の運営にしていきたい。お互いに顔見知りになれるため名札を付けている【中川区】
- 参加者が主体的、能動的に活動できるようスタッフが手や口を出し過ぎない【中村区】
- 認知症の方、地域住民を区別するのではなく、みんなが楽しみながら安心して過ごすことができ、気軽に相談したり、情報交換できる雰囲気づくり【港区】
- 参加者全員に声かけをする（認知症の本人、家族、地域住民）【港区】

2. 訪問調査から明らかになった実践の工夫

アンケート調査を通じて、「なごや認知症カフェ」の運営者が多くの課題を抱えながらも、個々に工夫した取り組みをしていることが明らかになった。その調査結果をもとに、実際に2カ所のカフェを訪れ、カフェ全体の様子と運営スタッフ・協力者による参加者へのアプローチの詳細を明らかにすることを目的に、訪問調査を行った。

(1) 調査対象と方法

1) 調査対象の選定方法

調査対象の選定は以下の条件で行い、港区にある「カフェとうち」と天白区の「カフェさんぽ道」を選んだ。

<選定条件>

- カフェ開設後、6カ月以上が経過している
- 平均参加者数が15人以上である
- 地域住民の協力者がいる
- アンケート調査の回答において、認知症の人・家族への効果を「感じている」と回答している
- 主催団体種別として最も多い「介護関連事業所」から1カ所、次に多い「医療機関」から1カ所を選定する

2) 調査方法

参加者とともにカフェに参加しながら、運営スタッフと協力者の働きかけや参加者の過ごし方などを調査する。また、運営スタッフと協力者、そして参加者を対象に聞き取りも実施した。

(2) 調査概要

1) カフェとうち

<調査日>

2016年11月19日（土）

<カフェ概要>

開催区	港区		
開設日	2015年10月17日		
運営主体	みなと医療生活協同組合		
会場	みなと医療生活協同組合 当知診療所（港区小碓2丁目284番地）		
開催日	毎月第3土曜	開催時間	14時～16時
参加費	100円	事前申込の有無	不要
専門職の配置	有（看護師・ケアマネジャー）		
スタッフ数	9人（うち、協力者4人）		
毎回のおおよその参加者数	17人		
主目的	認知症の人や家族同士の相互交流・情報交換		
特徴	・認知症の人や家族が安心して過ごせる居場所づくりに重点をおく ・組合員がボランティアとして、一緒にカフェづくりを担っている		
主な内容	・レクリエーションや健康体操 ・お茶を飲みながら交流		
調査日の様子	認知症の人や家族が1組参加していたほか、地域住民や診療所の患者等、15人が参加。各テーブルに4～5人が座り、近い距離で交流していた。認知症の人と家族は離れたテーブルに座り、家族が日頃の悩みなどを話しやすいよう配慮されていた。各テーブルに協力者と専門職が入り、交流の橋渡しをしたり、盛り上げ役になっていた。		

<実践の工夫>

①認知度の向上

診療所としての強みを生かし、通院患者のうち認知症の人とその家族に積極的にカフェを案内している。その結果、地域に暮らす認知症の人と家族の参加が3組ある。

広報は大々的に行わず、参加者の口コミや協力者が地域で気になる人に声をかけるなどの方法をとって、参加者は少しずつ増えている。

②連携

運営スタッフが「港区認知症カフェ交流会」や「港区認知症サポーターフォローアップ交流会」に参加し、認知症地域支援推進員や他カフェとの情報交換の機会をつくっている。他のカフェの取り組みから良いものは取り入れながら活動をしている。

③仲間づくり

運営主体である「みなと医療生活協同組合」は地域に多くの組合員をもつ。カフェ開設にあたって、地域住民と一緒に作り上げていきたいと考えた運営者が組合員に声をかけたところ、医療生協の行事などで積極的にボランティア活動をしていた組合員数名が、カフェの協力者として参加するようになった。

④場づくり

訪問調査を行った日は、レクリエーションとして折り紙で作った輪を積み上げるテーブル対抗のゲームが行われた。ゲームを通じて、テーブルごとに一体感が生まれ、初めて会った参加者同士がすぐに打ち解けることができていた。認知症の人にとっても、簡単なルールのためわかりやすく、楽しい雰囲気もあり、笑顔で参加されていた。認知症の人のそばには協力者がいて、さりげなくサポートしていた。

専門職は各テーブルをまわり、参加者とコミュニケーションをとるほか、家族から認知症の人の状況を聞いたり、日頃の悩みを聞くなどの対応をしていた。協力者は各テーブルに入り、一人で参加している人に気を配って声かけをするなど、一人一人が交流しやすいように働きかけていた。



2) カフェさんぽ道

<調査日>

2016年11月20日（日）

<カフェ概要>

開催区	天白区		
開設日	2015年8月16日		
運営主体	有限会社みちくさ		
会場	認知症対応型デイサービスみちくさ（天白区土原2-408）		
開催日	毎月第1・3日曜	開催時間	10時～12時30分
参加費	100円	事前申込の有無	不要
専門職の配置	有（介護職員・看護職員・ケアマネジャー・医師）		
スタッフ数	10人（うち、協力者7人）		
毎回のおよその参加者数	15人		
主目的	地域での認知症啓発		
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣住民に施設のスペースを貸し出す取り組みを行うなど、事業所と地域とのつながりが強い ・もともとは、事業所が施設スペースを貸し出して、住民主体のサロンが開設されていたが、2015年8月から事業所職員も企画・運営に関わる形で「なごや認知症カフェ」としてスタートした 		
主な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・健康体操 ・懐かしの歌をうたう ・お茶を飲みながら交流 ・野菜の朝市 		
調査日の様子	<p>地域住民を中心に、事業所の利用者や認知症の人を介護している家族など約20人が参加。常連の参加者が多かった。参加する地域住民は施設の近隣に住む人が大半で、民生委員や町内会長も参加していた。</p> <p>会場は、ソファ席、テーブル席など大ききの違う5つのグループにわかれており、4人～10人が腰をかけられるようになっていた。手作りのおやつと、飲み物が提供され、同じテーブルの参加者とおしゃべりをして交流していた。</p>		

＜実践の工夫＞

①認知度の向上

もともとサロンを実施していたこともあり、地域住民が口コミで集まっている。そのほか、事業所の運営推進委員である町内会長や民生委員の協力を得て周知をしたり、医療機関や介護事業所等へカフェのPRをしている。地域密着型サービス事業所の特性を生かし、地域とのつながりを大切にしているため、協力を得やすい基盤がある。

②連携

カフェ運営者が「天白区認知症サポーターフォローアップ交流会」に参加することを通して、認知症サポーターに対してカフェの取り組みを周知したり、運営者同士で顔のつながりをつくる機会をもっている。同交流会には、協力者も一緒に参加している。

③仲間づくり

カフェには地域住民でもある協力者が6～7人参加し、専門職と協働で運営を担っている。協力者は揃いのエプロンを着て、カフェで提供するお菓子づくりや当日の準備・片付け、終了後のふりかえりにも参加している。

「なごや認知症カフェ」としてスタートする以前は、住民主体のサロンとして実施されていたという経緯があり、サロンの立ち上げ・運営に関わっていた協力者が、継続的にカフェ運営に関わっている。

④場づくり

協力者がキッチンから明るい笑顔で出迎えてくれるため、入りやすい雰囲気がある。交流時には協力者がテーブルに入り、参加者と一緒に交流していた。

専門職はカフェの全体進行や健康体操、歌などの取り回しを担当するほか、各テーブルをまわり、参加者に声かけをして、一人一人とコミュニケーションをとっている。

また、歌をうたう際に配られた手書きの歌詞カードは、書道の得意な認知症の人が書いたものだと言った運営スタッフから説明があった。「認知症の人の『できること』『得意なこと』を知ってほしい」という思いから、歌詞カードが紹介されていた。



(3) 訪問調査で明らかになったこと

2カ所の「なごや認知症カフェ」を対象に訪問調査を行ったが、どちらも共通して地域に根差した取り組みを展開している点が特徴的であった。地域住民とともにカフェを企画・実施することで、地域の声を聞いてニーズを把握することができ、カフェの取り組みに生かすことが可能になる。専門職とは異なる立場の協力者がカフェの空間にすることで、地域住民がカフェに入りやすくなったり、居心地のよい雰囲気がつくられていた。

また、認知症の人や家族が安心して過ごせるような配慮がされていることも共通していた。年代問わず誰でも楽しめるレクリエーションの企画が準備されていて、認知症の人とそうでない人という枠組みをなくして、同じ空間にいる参加者みんなと一緒に楽しめるような雰囲気があった。「カフェとうち」では、認知症の人の隣に協力者がさりげなく座ってサポートを行い、それを見た参加者も認知症の人に対して自然にフォローができていた。「カフェさんぽ道」では、家族だけが集まるテーブルを設けて、家族が日頃の介護負担や不安に感じていることなどを気軽に話し合える環境がつくられていた。このように、認知症の人や家族への配慮、換言すれば運営スタッフと協力者による働きかけは、認知症カフェの目的を実現するためには不可欠である。

2カ所のカフェで異なる点は、認知度の向上のための方法や、場づくりの工夫である。「カフェとうち」は、「本人・家族の安心して過ごせる場づくり」を主目的に掲げているため、広報においても認知症の人や家族を中心に声をかけ、地域に広げすぎないようにしていた。「カフェさんぽ道」は、「認知症の啓発」を主目的にし

ているため、町内会長や民生委員を通じて近隣の地域住民へ広く周知がされていた。また、場づくりにおいても、「カフェさんぽ道」は認知症のマイナスイメージを地域住民からなくし、理解を深めてもらえるよう、認知症の人が書いた歌詞カードを使って歌をうたうなど、認知症の人の強みをさりげなく伝える工夫をしていた。

主となる目的をどこに置くかによって少しずつ実践方法が異なるものの、どちらのカフェも地域に根差した取り組みを展開することで、運営の課題を克服しようと試みている。


3. 「なごや認知症カフェ」の活動支援

アンケート調査で明らかになった「なごや認知症カフェ」の運営上の課題（認知度の向上・連携・仲間づくり・場づくり）について、カフェ単体で解決していくことは難しい面もある。そこで、全市および各区では、カフェを運営しやすい基盤づくりや活動支援が行われている。本項ではそれらの取り組みについて紹介する。


(1) 名古屋市認知症相談支援センターによる活動支援

名古屋市認知症相談支援センター（以下、認知症相談支援センター）¹⁵は、各区の認知症地域支援推進員の活動支援をするとともに、なごや認知症カフェ登録事業・開設助成事業・運営助成事業のとりまとめなど、全市のカフェへの活動支援を担っている。

1) なごや認知症カフェ研修会・助成事業説明会

実施日	2015年6月25日、2016年8月17日
内容	<p>「なごや認知症カフェ」の開設に関心のある団体を対象に研修会を開催した。「なごや認知症カフェ」の役割や意義を伝えるとともに、先進的なカフェの取り組みをしている実践者から話をきいて、カフェの魅力を知る機会とした。研修会終了後には、助成事業・登録事業の申請方法等に関する説明会を実施した。</p> 
成果	2015年度には約400名、2016年度には約130名が参加した。現在、参加をした43団体がカフェを実際に開設している。

2) なごや認知症カフェ運営者交流会

実施日	2016年12月14日
内容	<p>「なごや認知症カフェ」の運営者を対象に交流会を開催した。武地一氏（藤田保健衛生大学医学部認知症・高齢診療科教授）による認知症カフェの役割についての講演に加え、運営者がグループに分かれて、カフェの取り組みや工夫について情報交換をしたり、これからやってみたいことなどについて意見交換をした。</p> 

¹⁵ 名古屋市認知症相談支援センターは、名古屋市において認知症の人や家族を支援する中核機関として、市域のネットワーク構築や各認知症地域支援推進員の活動支援をするとともに、「なごや認知症カフェ」の推進をはじめ認知症コールセンターの運営、若年性認知症の人の相談支援等の業務を行っている。運営は、2012年より名古屋市から委託を受けて社会福祉法人名古屋市社会福祉協議会が行っている。

成果	<p>81名が参加し、参加した運営者同士が情報交換を行った。また、グループワークを通して、カフェ運営者の生の声を聞き、運営上の課題やその解決のために行っている工夫、これから行いたいことなどについて意見交換した。地域とつながりをつくるための工夫としては、「高齢者ふれあい給食会など、地域の行事に出向いてPRをする」、「施設のおまつりに地域の方を呼ぶ」などのアイデアが出た。また、認知症の人や家族が過ごしやすい場所にするための工夫としては、「最初はひとりにしないように意識的に声かけをする」「席の配置に配慮する」などの意見があった。</p> <p>※運営者交流会の詳細については参考資料（pp.59, 60）を参照。</p>
----	--

3) 周知・啓発の支援

①一覧表の作成とウェブ公開

「なごや認知症カフェ」の情報（開催日時、主催者、専門職の有無、PRなど）を一覧化し、名古屋市が運営するウェブサイト「NAGOYAかいごネット」にて公開している。また、同サイト上には、カフェ検索ページが設けられており、区を選択すると該当区のカフェ情報一覧を閲覧することができる。

②「なごや認知症カフェマップ」の公開

グーグルマップを活用して「なごや認知症カフェマップ」を作成・公開している。地図上に、「なごや認知症カフェ」の位置を示し、アイコンをクリックすると、それぞれのカフェの詳しい情報（開催日時、主催者、専門職の有無、PRなど）が見られるようになっている。

③市民向けチラシの作成・配布

「なごや認知症カフェ」がどんな場所なのかを市民に向けて周知することを目的にチラシを作成・配布している。チラシには、カフェの概要を紹介するほか、実際のカフェの雰囲気わかる写真が入っている。いきいき支援センターや区役所等へ配布し、市民へのPRに使用している。



(2) 認知症地域支援推進員による各区での活動支援

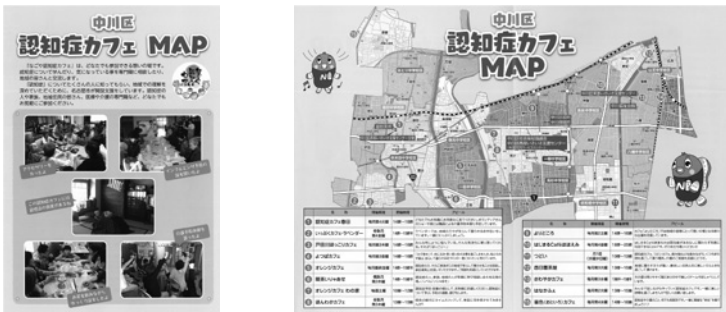
名古屋市では、各区のいきいき支援センターに配置された認知症地域支援推進員が、「なごや認知症カフェ」の開設・運営支援の役割を担い、区の実情に応じて様々な取り組みをしている。ここではそれらの取り組みについて、認知度の向上・連携・仲間づくりの点から紹介する。

1) 認知度の向上


カフェ運営者は認知度が低いことを運営の課題に挙げている。カフェがどんな場所なのか、どこにカフェがあるのかといった情報が地域に伝わらず、地域住民が気軽にカフェに足を運ぶような状況にはまだなっていない。

そこで、いくつかの区では地域住民への情報発信やカフェのPRに力を入れている。

①認知症カフェマップの作成

実施区	中川区
内容	<p>区内のどこに、どんなカフェがあるのか、気軽に情報が得られるよう「認知症カフェマップ」を作成している。中川区の地図にカフェの位置を示し、それぞれのカフェの開催日、特徴などが一目でわかりやすく表になって記載されている。区役所、保健所、認知症疾患医療センター、民生委員、ケアマネジャー、認知症セミナーの参加者などへ配布し、広く地域住民にカフェを知ってもらうためのツールと位置付けている。</p> 
成果	<p>マップを見てカフェに参加する人が実際増えた。地域住民に「なごや認知症カフェ」の存在が浸透し、認知度の向上につながった。さらに、マップを見て「カフェをやりたい」という団体から推進員に相談があった。</p> <p>また、マップを作成する過程で認知症地域支援推進員がカフェを1カ所ずつまわり、打合せを重ねたことで、推進員とカフェとの連携が強まった。</p>


②認知症カフェPRイベントの開催

実施区	北区
頻度	2016年度 1回
内容	<p>「なごや認知症カフェ」について、目的やそれぞれの場所、活動内容を知ってもらうため、北区役所の玄関ロビーにて、「出張認知症カフェ」を開催。コーヒーを飲みながらおしゃべりできる交流スペースをつくった。また、簡単な体操などの企画、各カフェの写真やチラシ等を展示し、紹介コーナーを設けてPRした。</p> 
成果	<p>当日は約170人が来場し、「なごや認知症カフェ」の役割や実際の雰囲気を体感してもらう機会になった。また、北区内のカフェ運営者らが集う「北区認知症カフェ検討会」のメンバーで企画・実施をしたところ、メンバー同士の連帯感が強まると同時に、カフェの取り組み発信への意識向上にもつながった。</p>


2) 連携

カフェ運営を行うにあたって、他カフェと情報交換し、悩みを共有したり、お互いの取り組みから学び合うことも大切である。そのためのネットワーク構築の機会として、いくつかの区ではカフェ同士の検討会・交流会が実施されている。

①北区認知症カフェ検討会

開催区	北区
頻度	月1回
内容	<p>北区内のカフェ運営者や今後カフェを開設したいと考えている団体等が集い、情報共有や意見交換をしている。毎回約15人が集まり、日頃活動する中で感じている課題などを共有し、解決方法についてグループに分かれて意見交換をしている。</p> 
成果	<p>カフェ運営者同士が顔見知りになり、互いのカフェの見学や、開催時の手伝い、カフェの協働開設などにつながったケースもあった。また、主な課題であった広報啓発について、上述の認知症カフェPRイベント（pp.25）の開催につながった。</p>

②南区認知症カフェ交流会

開催区	南区
頻度	2016年度 2回
内容	<p>南区内のカフェ運営者同士の交流と情報交換を目的に実施されている。初回はグループに分かれて、お互いのカフェ活動について紹介し合った。2回目は、カフェに協力者として参加している認知症の人と家族に、カフェでの活動のやりがいについて話をしてもらった。</p> 
成果	<p>互いのカフェを見学に行くなど、カフェ同士のネットワークができた。さらに、認知症の人と家族の声を聞くことで、運営者のモチベーション向上につながっている。</p>


3) 仲間づくり

「なごや認知症カフェ」を継続して運営していくためには、地域のなかに一緒に取り組んでくれる仲間をつくることが重要になる。そこで、地域住民でもある認知症サポーターに注目をして、彼（女）らにカフェを知ってもらって、カフェでの活動につなげるために、いくつかの区では交流会等の取り組みが行われている。

①認知症サポーターフォローアップ交流会

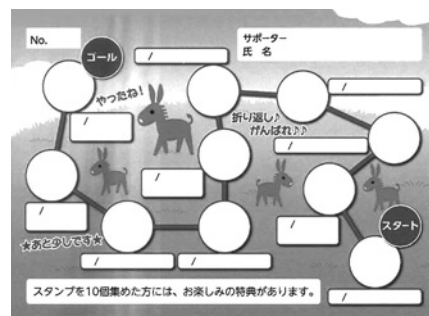
開催区	天白区
頻度	2015年度 1回、2016年度 1回
内容	<p>認知症サポーターとカフェ運営者が集い、交流会を行った。まず各カフェが活動紹介を行ったのち、グループに分かれてカフェ運営者と認知症サポーターが交流した。1回目は約100人が集まった。2回目は、1回目に参加した認知症サポーターのなかで特に「カフェでの活動に関心がある」と回答した人に絞って声かけをし、17人の認知症サポーターが参加してカフェ運営者と密に交流した。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>第1回（2016年3月5日）</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>第2回（2016年10月12日）</p> </div> </div>
成果	交流会後、興味をもったカフェに認知症サポーターが実際に訪れ、ボランティア活動につながった。

②「認知症サポーター交流会」における認知症カフェの紹介

開催区	北区
頻度	2016年度 2回
内容	<p>認知症サポーターにカフェの役割に加え、北区にはどのようなカフェがあるかを知ってもらうことを目的に開催した。約60人の認知症サポーターが参加し、認知症カフェの役割について説明を受けた後、各カフェのポスター展示をまわり、運営者から説明を聞いた。</p> <p>2回目はカフェの運営者と認知症サポーターが、具体的な事例をもとにグループワークを行い、認知症カフェが地域の人たちにどのように活用されているかを確認した。</p> <div style="text-align: right;">  </div>
成果	交流会後、興味をもったカフェに実際に訪れ、ボランティア活動につながった認知症サポーターがいた。

③認知症カフェスタンプラリー

開催区	北区
内容	<p>認知症サポーターへのフォローアップの取り組みの一環として発案され、「北区認知症カフェ検討会」とともに実施している。</p> <p>認知症サポーターが専用スタンプカードを持ってカフェに参加した場合にはスタンプがもらえる仕組みで、10個集めると飲み物等の特典がある。</p>
成果	<p>本取り組みがきっかけで、実際にスタンプカードを持参し、カフェでボランティア活動を始めた認知症サポーターがいる。</p>



(3) 活動支援のまとめとして

地域を基盤に、カフェと住民との出会い、カフェ運営者同士の出会い、認知症サポーターとカフェとの出会いといったそれぞれの立場の人たちが出会うことで、認知度の向上や仲間づくり、カフェ単体ではできなかった新たな取り組みの実施といったカフェの発展した形に結びついている。その「出会い」の機会をつくるのが認知症相談支援センターや各区の認知症地域支援推進員の役割であり、カフェからも大きな期待が集まっている。

第4章. まとめ： 認知症になっても安心して暮らせるまちづくりに向けて

本稿では、アンケート調査と訪問調査で収集したカフェ運営者の生の声をもとに、実践上の課題やそれを克服するための取り組みに焦点を当てて考察をした。以下では、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりの手段としての「なごや認知症カフェ」にあらためて焦点を当てて、その課題と解決の方向性を整理する。

1. 「なごや認知症カフェ」の課題とその克服をめざして

アンケート調査の結果から、「なごや認知症カフェ」の課題として「運営面：地域とのつながりをつくる」と「実践面：認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる」を提出した。これらの課題は、「地域を知り、地域とともにカフェを運営していくこと」と言い換えることもできる。

【運営面】 地域とのつながりをつくる

- (1) 認知度の向上
- (2) 連携

【実践面】 認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる

- (3) 仲間づくり
- (4) 場づくり

それでは、カフェの運営者はどのように課題を克服しようとしているのだろうか。まず、「地域とのつながりをつくる」について、一定の参加者があり、運営が軌道に乗りはじめたカフェの特徴として、開設以前から地域とのつながりがあったり、町内会長や民生委員との関係を構築したり、地域行事に参加するなど、地域との関係性を重要視しているカフェが多いことが調査によって明らかになった。地域との関係性が深まることで、地域のなかでカフェが認知され、自然と参加者が増え、定着している。

地域とのつながりをつくるカフェでは、「カフェ以外の日にも声をかけてくれるようになった」「野菜などを持って来てもらえた」など日常的な関係性が生まれ、それによって運営スタッフや協力者のモチベーションが向上している。さらに、その関係性は地域に開かれた施設や事業所としての地域交流の土台にもなっている。

次に、「認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる」については、カフェへの入りやすさを工夫したり、参加者、特に認知症の人が不安になったり失敗したりしないように配慮するなど、多様な「過ごしやすい場をつくる」のための取り組みがカフェではされている。また、家族同士がゆっくりと交流できる場を設けるなど、それぞれのカフェの目的に合わせて工夫がされていた。さらに、「なごや認知症カフェ」の特徴でもある認知症に関する相談対応ができる専門職の配置や、カフェならではの介護や医療関係者の参加を生かし、カフェというリラックスした雰囲気のなかで自然と会話の延長で相談ができるように工夫しているカフェもあった。

「過ごしやすい場をつくる」ためには、専門職に加えて地域に暮らす人たちと協同して運営することも重要である。アンケート調査の結果によると、事業所内の限られた人員のなかで運営スタッフを確保することは難しいという声が複数きかれた。けれども、だからといって単に人手が足りないから「ボランティアをお願いする」のではなく、一緒にその地域に必要なカフェを考えて、協同しながら実施することが大切ではないだろうか。なぜなら地域に暮らす人たちを仲間に加えることによって、地域のニーズを知ることができるし、参加者にとってもカフェをより身近に感じて足を運びやすくなるという利点もある。

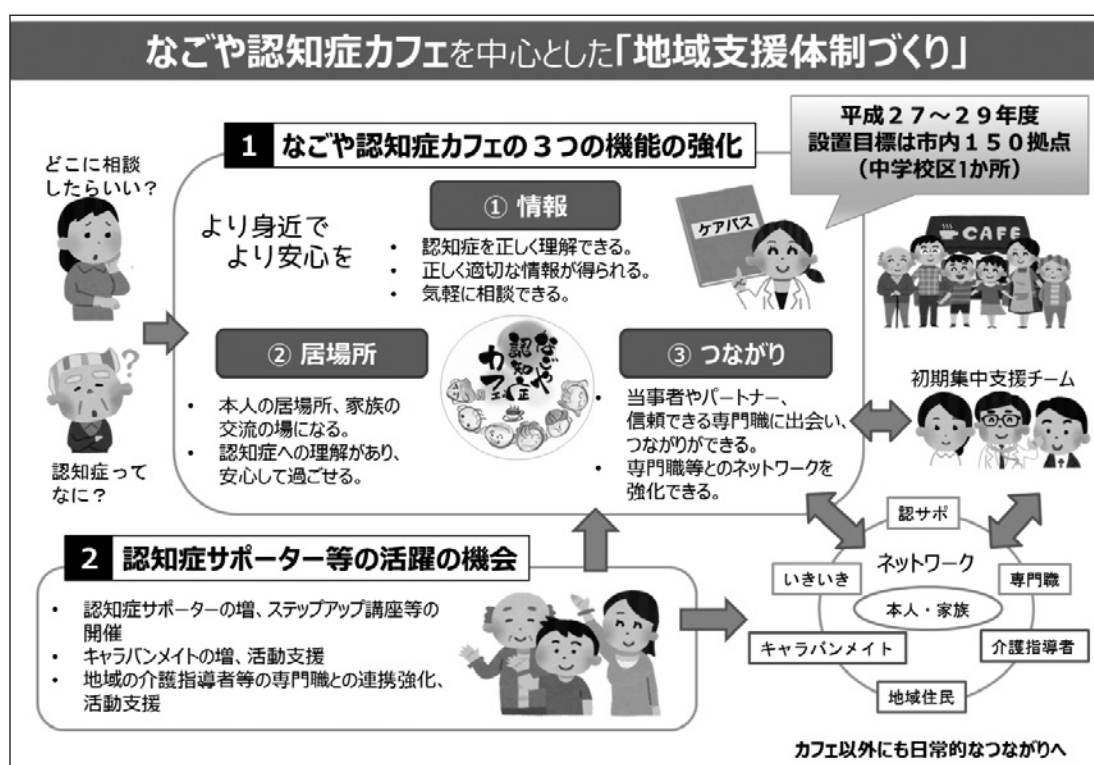
ただし、カフェ単体では「地域とのつながりをつくる」と「認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつく

る」には限界が生じる。例えば、「なごや認知症カフェ」自体が知られていないため、地域住民への働きかけが難しい場合がある。そのため、「地域とのつながりをつくる」ための後方支援として、地元のいきいき支援センターや認知症地域支援推進員、社会福祉協議会の協力が不可欠である。また、カフェの認知度を高める活動は、名古屋市や認知症相談支援センターの市域での取り組みが求められる。

さらに「毎回、どんなプログラムを実施したらよいのか悩む」や「同じ業種のカフェがどのように運営しているか知りたい」というカフェ運営者の声に対しては、前章で紹介したように、すでにいくつかの区の認知症地域支援推進員が区内のカフェを集めた交流会を開催したり、認知症相談支援センターが市域での交流・研修会を開催するなど、交流・学び合いといったカフェを支援する機会がつけられている。アンケート調査で4割のカフェがいきいき支援センターや認知症地域支援推進員との連携が不十分と答えていることから、連携をすることで運営の課題解決につながるのではないだろうか。

2. カフェへの期待と今後

「なごや認知症カフェ」は、当事者にとって、地域にとって、そして運営主体である団体・事業所にとっても効果があり、地域に好循環を生む手段となる可能性がある。名古屋市では、カフェの目指すべき姿を「地域とのつながりがあり、安心して過ごせる場」、「信頼できる専門職に会い、適切な情報が得られる場」と考え、カフェを中心とした地域支援体制づくりをめざしている。



これは、カフェを身近な場所として2017年度までに市内150カ所（中学校区に1カ所以上）の設置を目標にしているもので、カフェの場が①情報、②居場所、③つながりの機能を持ち、何らかの活動をしてみたいと考えている認知症サポーター等にとって身近かつ認知症の人に出会える場、活躍できる場となることを想定している。カフェをきっかけに、必要に応じて認知症初期集中支援チーム¹⁶の支援につながったり、地域住民等

¹⁶ 認知症初期集中支援チームとは、医療・介護の専門職、そして認知症の専門医で構成されたチームで、名古屋市では各いきいき支援センターに設置されている。医療機関への受診や、介護サービスの利用ができていない認知症の人の自宅を訪問するなどして、サービス利用の動機づけや利用の調整、認知症の重症度に応じた助言、介護負担感軽減のための家族への支援等を行っている。できるだけ早い段階で医療・介護サービスの利用に結びつけることで、認知症の進行を抑えることを目的に活動している。

の日常的な関わりや助け合いにつながっていくこと、さらには、認知症に対するマイナスイメージがなくなり、認知症が正しく理解されることに加え、「その人らしさを大切にしたい、特別ではないふつうの関わり」が生まれることを目指している。今後は、カフェ運営主体と運営支援する側の認知症地域支援推進員がカフェの目指すべき姿に近づくことができるよう、連携して取り組んでいく必要がある。

「なごや認知症カフェ」に対する期待は大きい。カフェの運営主体を詳しく見ると、その8割が介護関係事業所である。カフェの開設・運営をきっかけに地域との関係性を深め、カフェの時間だけではなく、ふだんの業務のなかでも地域とのつながりとその効果を実感している介護関係事業所が増えている。地域とのつながりは、カフェを継続するためのモチベーションの維持・向上になっているという声も多く聞かれる。地域のなかにある介護関係事業所として「積み上げてきた認知症ケアのノウハウを地域のために還元しよう」とのりしを伸ばしてみることで、地域とのつながりが深まり、同じ地域の一員としての役割を担うことができるのではないだろうか。

最後に、カフェの今後の在り方について述べる。カフェは、誰でも参加可能なオープンな形や認知症の人や家族のみを対象としたクローズな形などの目的に合わせた在り方がある。まずは参加した認知症の人と家族の声や地域のニーズをしっかりと受け止め、それを土台にカフェづくりを進めていくことが第一歩と考えられる。そこを起点にニーズに応じた次の一歩を展開していくことが望ましい。

カフェの在り方の第2は、いかに協力者が活躍する機会を設けるかが大切になる。ある程度の人数の協力者が集まり、協同で進めていくようになると、協力者同士の関わりやグループ化といった協力者を対象にした活動支援が大切になる。けれども、介護関係事業所は協力者が活躍できるよう対応するのが不慣れである場合が多いように思われる。そのため、ボランティアを「活用する」のではなく、それぞれが主体となって協同しながら一緒にカフェを運営していけるよう、いきいき支援センターや認知症地域支援推進員がうまく支援していくことが重要である。

「なごや認知症カフェ」は、事業が開始されて1年半が経過し、早くから開設しているカフェのなかには、参加者の少なさやプログラムの悩みといった立ち上げ当初の課題を克服し、参加者の固定化や本来参加してほしい対象者への声かけ、協力者との協同などカフェを継続していくための課題に移行するなど、質の向上を目指すカフェも出てきている。

3. 本調査の限界と今後の課題

本稿では「なごや認知症カフェ」の現状と課題についてアンケート調査を用いて分析し、考察した。加えて、アンケート調査を実施した結果をもとに、2カ所について訪問調査を行い、運営スタッフと協力者による参加者へのアプローチの詳細を明らかにしようと試みた。これらの調査で得たデータと現時点で利用可能なデータを用いて、本稿は「なごや認知症カフェ」の現状と課題を明らかにし、同時に課題解決に向けた新たな方向性を提示することで、カフェ運営者のみならず「なごや認知症カフェ」の整備に関わる関係者が現状と課題を共有し、今後のあり方について検討する際の材料を提供することをめざした。

本稿には限界と今後の課題がある。「なごや認知症カフェ」の効果的な運営、そしてそのための支援を検討するためには（1）カフェ運営者と（2）カフェ参加者の視点からの現状把握が不可欠である。本稿は主にカフェ運営者を対象に調査を行ったが、「なごや認知症カフェ」の実態や今後の課題を知るためには、カフェの参加者に対する調査が今後必要になってくるだろう。同時に、地域住民を対象にしたカフェの利用促進要因の調査も今後の課題である。

【参考文献】

- 伊藤智樹（2013）「ピア・サポートの社会学に向けて」伊藤智樹（編）『ピア・サポートの社会学－ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の声を聴く』晃陽書房.
- 金治宏・染野徳一・山本文香（2016）「「なごや認知症カフェ」の現状と今後の課題に関する調査研究」『愛知淑徳大学 アクティブラーニング』第9号、pp.13-28.
- 厚生労働省（2012）『認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）』.
- 厚生労働省（2015）『認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（概要）』.
- 厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチーム（2012）『今後の認知症施策の方向性について』.
- 厚生労働省老健局総務課認知症施策推進室（2016）『認知症カフェの現状について』.
- 「京都式認知症ケアを考えるつどい」実行委員会（編）（2012）『認知症を生きる人たちから見た地域包括ケア 京都式認知症ケアを考えるつどい2012 京都文書』クリエイツかもがわ.
- 三井さよ（2012）「＜場＞の力 ケア行為という発想を超えて」三井さよ・鈴木智之（編）『ケアのリアリティ－境界を問いなおす』法政大学出版局.
- 名古屋市（2015）『名古屋市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画「はつらつ長寿プラン2015」』.
- 内閣府（編）（2016）『高齢社会白書平成28年度版』.
- 認知症の人と家族の会（2013）『認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業報告書』.
- 武地一（編）（2015）『認知症カフェハンドブック』クリエイツかもがわ.
- 東北福祉会・認知症介護研究・研修仙台センター（2017）『認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書』.
- 矢吹知之（2016）『認知症カフェ読本知りたいことがわかるQ&Aと実践事例』中央法規出版.

参考資料

1. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査票	34
2. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査結果の詳細	37
3. 座談会：「なごや認知症カフェ」活動支援への思い.....	52
4. 名古屋市における取り組み	56
◎「なごや認知症カフェ」事業について.....	56
• なごや認知症カフェ登録事業実施要領.....	56
• なごや認知症カフェ開設助成事業実施要領.....	57
• なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領.....	58
◎「なごや認知症カフェ」運営者交流会 実施報告	59

1. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査票

名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究

「なごや認知症カフェ」状況調査及び運営者向けアンケート

状況調査及びアンケート調査へのご協力のお願い

時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。
皆さまには日頃から、「なごや認知症カフェ」の運営にご理解・ご協力賜り、厚く
お礼申し上げます。

さて、名古屋市認知症相談支援センターでは、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボ
レーションセンター金治宏助教と協働で、「名古屋市における認知症カフェの在り方
に関する調査研究」を行っています。

この調査研究は、市内86か所（平成28年6月末時点）で開設されている「なご
や認知症カフェ」の現状や課題、効果などを把握し、皆さまが安心して継続的に認知
症カフェの活動に取り組めるよう、今後の活動支援に役立てることを目的としていま
す。

つきましては、お忙しいなか大変恐縮ですが、「なごや認知症カフェ」の状況調査
及び運営者を対象としたアンケート調査にご協力いただきますようお願い
申し上げます。

なお、集計結果については、皆さまでに郵送させていただくほか、平成28年11月
に開催を予定している「なごや認知症カフェ運営者交流会」にてご報告させていた
きます。

平成28年7月 名古屋市認知症相談支援センター

ご回答にあたって、裏面をご覧ください。

ご回答にあたってのお願い

- 本アンケート調査は、名古屋市に登録する「なごや認知症カフェ」の運営者に送
付しています。
- 担当者または団体としての方針や考え方をお答えいただける方のご記入をお願い
いたします。
- 調査結果はすべて統計処理し、個人の名前や回答が特定されることはありません。
普段思われることをありのままにお答えください。
- 回答された調査票は8月31日(木)までに同封しました返信用封筒（切手不要）
に入れて、お近くのポストに投函してください。
- このアンケートについてのご質問などがありましたら下記までお問い合わせくだ
さい。

【問い合わせ先】

〒462-8553名古屋市北区清水4-17-1 名古屋市総合社会福祉会館6階
名古屋市認知症相談支援センター 担当：染野・山本
TEL 052-919-6622/FAX 052-913-8553/
mail:n-renkei@nagoya-shakyo.or.jp

【アンケート返送先】

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23
愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーションセンター 金治

本アンケートにおける用語の説明

- ※1 運営スタッフ
貴団体に所属し、認知症カフェの運営に携わる人のことをいいます。
- ※2 協力者
事前準備、運営、振り返り等に協力する貴団体以外の人（ボランティア）のことを
いいます。
- ※3 参加者
上記の運営スタッフ、協力者以外の参加者（認知症の本人や家族、地域住民など）
のことをいいます。
- ※4 認知症地域支援推進員
認知症の本人や家族が暮らしやすいまちづくりをめざし、地域におけるネットワー
クの構築、認知症ケアパスの作成・普及、認知症カフェの開設・運営支援などに取
り組む専門職のことをいいます。平成28年4月から、市内の全いきいき支援セン
ターに1名ずつ配置されています。

認知症カフェの状況調査

現在、ご登録中の情報が記載されています。ご確認ください、変更点があれば訂正をお願いします。

カフェ名	＜カフェ名＞
開催区	＜区＞ 区
カフェの開設日	＜開設日＞
運営主体	＜申請者＞
会場	＜会場＞ (使用している部屋の名称:)
開催日	＜開催日＞
参加費	＜参加費＞ 円
専門職の有無	＜専門職＞

ご記入をお願いします。
(例：地域交流室 等)

・ 変更事項や誤りがある場合は、—— (二重線) で消していただき、修正してください。

運営者向けアンケート

問1 カフェに取り組み目的について、当てはまるものに○をつけてください。

※ 当てはまるものが複数ある場合は、順位を付けてください。【例】当てはまるものが3つの場合は () 内に1、2、3と順位を付けてください。

()	認知症の本人や家族同士の相互交流・情報交換
()	家族の介護負担の軽減
()	認知症の悪化予防
()	地域での認知症啓発
()	その他(具体的に:)

問2 カフェをはじめめるきっかけになったこと (例: 介護する家族が困っている様子を見て、認知症の人が増えている新聞記事を読んだ など) を教えてください。(自由記述)

--

問3 カフェではどのようなプログラム (例: お茶を出す、認知症の勉強、音楽演奏を通しての交流 など) を行っていますか。プログラム内容を具体的に教えてください。(自由記述)

--

問4 認知症の本人や家族への案内を行っていますか。

1 行っている	2 行っていない
「1」の場合は、その方法について、当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)	
()	医療関係者・機関と連携して案内
()	いきいき支援センターと連携して案内
()	社会福祉協議会と連携して案内
()	民生委員と連携して案内
()	町内会・地域自治会と連携して案内
()	その他(具体的に:)

問5 地域住民への案内を行っていますか。

1 行っている	2 行っていない
「1」の場合は、その方法について、当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)	
()	貴団体のチラシ作成・配布
()	いきいき支援センターと連携して案内
()	社会福祉協議会と連携して案内
()	民生委員と連携して案内
()	町内会・地域自治会と連携して案内
()	その他(具体的に:)

問6 カフェの協力者の人数を教えてください。

人

問7 協力者の属性を教えてください。(複数回答可)

()	地域住民
()	民生委員
()	認知症サポーター
()	いきいき支援センター職員
()	介護・福祉専門職
()	その他(具体的に:)

問8 協力者の募集を行っていますか。

1 行っている	2 行っていない
「1」の場合は、その方法について、当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)	
()	自施設の関係者に募集
()	貴団体のチラシ制作・配布
()	いきいき支援センターと連携して募集
()	社会福祉協議会と連携して募集
()	民生委員と連携して募集
()	町内会・地域自治会と連携して募集
()	その他(具体的に:)

問9 協力者のスキルのアップのための取り組みを行っていますか。

1 行っている	2 行っていない
「1」の場合は、具体的な内容を教えてください。(自由記述)	

問 10 1 回あたり参加者の参加者の内訳とおおよその数を教えてください。

6 5 歳以上の認知症の本人	() 人	いきいき支援センター職員	() 人
6 4 歳以下の認知症の本人	() 人	介護・福祉専門職	() 人
家族	() 人	医療専門職	() 人
地域住民	() 人	その他[]	() 人

問 11 カフェ参加者の男女比（全体を 10 としてその割合【例】 5：5）を教えてください。

男：女 = ()：()

問 12 カフェを 3 回以上開催した運営者にお尋ねします。開設時に比べて参加者数の変化を教えてください。

1 増えている	2 ほとんど変化なし	3 減っている
「1」または「3」の場合、その理由を教えてください。（自由記述）		

問 13 認知症地域支援推進員やいきいき支援センターはカフェを支援しています。連携はどれくらいありますか。

1 十分とれている	2 とれている	3 あまりとれてない	4 とれていない
その理由を教えてください。（自由記述）			

問 14 カフェを開設したことによる地域（地域住民、町内会など）との関わりの変化を教えてください。

1 増えている	2 ほとんど変化なし	3 減っている
「1」または「3」の場合、具体的な内容と理由を教えてください。（自由記述）		

問 15 カフェを実施して、①～⑤に対する効果（好ましい現象）について教えてください。

① 認知症の本人への効果

1 感じている	2 感じていない
「1」の場合、具体的な内容を教えてください。（自由記述）	

② 認知症の人の家族への効果

1 感じている	2 感じていない
「1」の場合、具体的な内容を教えてください。（自由記述）	

③ 地域住民への効果

1 感じている	2 感じていない
「1」の場合、具体的な内容を教えてください。（自由記述）	

④ 協力者への効果

1 感じている	2 感じていない
「1」の場合、具体的な内容を教えてください。（自由記述）	

⑤ 運営スタッフにとっての効果

1 感じている	2 感じていない
「1」の場合、具体的な内容を教えてください。（自由記述）	

問 16 カフェを運営する中で、日頃工夫されていることをご自由にお書きください。

問 17 今後、カフェを継続していくうえでの課題や問題点を教えてください。（複数回答可）

() カフェの認知度が低い	() 認知症の本人の活躍ができていない
() 参加者が少ない	() 家族からの相談に対応できていない
() 地域住民の認知症への理解度が低い	() 運営スタッフのスキルアップ（場づくり・認知症の理解）
() 運営スタッフの確保が難しい	() 協力者のスキルアップ（場づくり・認知症の理解）
() 協力者の確保が難しい	() 運営費用の確保が難しい
() 運営費用の確保が難しい	() 開催場所の確保が難しい
() 開催場所の確保が難しい	() その他（具体的に：)

問 18 今後、カフェを継続していくうえでの必要と思う支援をご自由にお書きください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

36

2. 名古屋市における認知症カフェの在り方に関する調査研究 調査結果の詳細

問1 カフェに取り組む目的

	回答数	構成比
認知症の本人や家族同士の相互交流・情報交換	45	66.2%
家族の介護負担の軽減	2	2.9%
認知症状の悪化予防	0	0.0%
地域での認知症啓発	13	19.1%
その他	8	11.8%

(注) 構成比 = 回答数 / 有効回答68

問2 カフェをはじめのきっかけ

地域住民から介護のことで気軽に相談できる場があると助かるとの声があった
法人として、施設としての社会貢献
名古屋市から「やりませんか？」と声をかけられたことがきっかけです
認知症介護をしている家族様が相談できる場
自分の母が認知症（アルツハイマー型）になり、地域の方々と共に勉強したり、いこいの場を作ったから（代表）
「認知症カフェ登録受付中」のチラシを見て
いきいき支援センターによる助言と、町内会からの希望があり、地域に認知症啓発したい
名古屋市からの案内
介護する家族の交流やご本人の交流で、地域のなかで安心して暮らせることをめざしたい
認知症の人たちが介護サービスを利用できていないこと、家族の認知症への知識不足、近隣の人の認知症の対応不足
地域包括ケアの一環として在宅生活を支援するため。地域に開かれた施設を目指したいため
認知症の方が増えていることと、認知症の方と家族の社会参加のきっかけになりたいと思っているから
しょうちゃんカフェに参加し、重要性を確認した
入居者様といっしょに地域の方が交流できるように
認知症の進みをゆるやかにしたり、認知力の低下に不安を抱いている者同士が交流することで認知力をアップしたいという思いあり
家族が認知症の認識がない、情報交換して理解してほしいと思ったから
増加の一途をたどっている認知症の方々への支援の一環として、検討した結果、カフェの運営実施に取り組むことになった
閉じこもりとなる本人、そしてそのことを知られたくない同居家族があえて認知症の相談所へ出向いていくことに抵抗感があるという住民からの話をうかがい、交流、外出するキッカケとして野菜の直売所を設置し、買い物ついでにお茶しながら交流を図ることを企画した
小規模多機能型施設の運営推進会議メンバーである地域住民から声が上がリ、地域住民の協力もあって始めています
地域の方に認知症を知って頂きたいということ。地域の方へ近くに介護施設があり、その中に認知症の方が入居されていることを知ってもらおう
地域住民の認知症の理解と情報交換、自施設の宣伝
新オレンジプランがきっかけで地域交流、認知症の方が役割をもち、いきいきしている姿をみていくことで認知症のイメージを変えていくことを目的に、地域の方が気軽に交流できる場を作る
もともとパン教室を定期で開催しており、地域の方や認知症をかかえる方が一緒に参加をし、情報交換の場となるよう認知症カフェを始めた
高齢者の慢性期医療を担う療養病床としての機能を活かし、認知症予防という視点で地域に還元できることはないかと考えた。神経内科の医師（常勤）が5名という強みを活かし、認知症外来を開放。認知症の診断や予防に対しての専門的なアプローチができるのではないかと考えた
地域密着型の介護施設の方針の基に、地域交流の認知症カフェを作り、ボランティアさんと共に認知症の方々やご家族様たちが暮らしやすい街作りのお手伝いを行っています
施設入所の面談の際に、入所はまだ希望しないが少し認知症が始まっている今の状態で今後どのように生活・介護していこうか不安に思っている等の相談を受け、何かできることはないかと考えたことがきっかけになりました
新オレンジプランから、当施設で地域に対してできることは何かを施設内で検討した。また、老健の果たす役割のひとつとして認知症カフェの開設の話が出た。施設内で認知症カフェ開設プロジェクトを立ち上げ、会議を重ね現在に至っている
特別養護老人ホームが開設して5年目を迎えるにあたり、地域の人びとへの開放、社会貢献等、「地域」とのつながりを再構築していきたい…と考え、カフェをはじめさせていただきました
いきいき支援センターの認知症家族会に出席し、認知症本人だけでなく、その家族、また地域へ向けた支援をしていきたいと思い、それがカフェのきっかけとなった
ケアマネジャーの仕事上での経験で、高齢者の孤独を見て、高齢者の居場所づくりをしようと思ったのがきっかけ
認知症カフェのことを研修や新聞記事で知り、私たちの地域でも地域住民の交流の場にしたいと思いました
認知症のご家族に予防知識、介護方法をお伝えしたり、介護負担軽減を考慮
認知症の人を抱える家族、本人、認知症の予防をしたいと考えている方々に交流の場を提供し、少しでも役に立ちたいと考えたため
<ul style="list-style-type: none"> ・以前より認知症の介護家族から個人的に相談を受ける機会が何度もあり、家族や本人の抱える悩み等を自施設を通して共有し合いたいと考えたから ・地域に向けて過去にも取り組みを展開してきたが、自施設の周囲も高齢世帯が多いことから、地域の住民に認知症を理解し、皆で考えていきたかったから
法人としてより深い地域貢献を行うため
認知症の方が増加していることと、地域の老人が孤立しないように情報の交換等のために
特養入居者への面会などで家族様より親戚、知り合いの方などが困っているとの相談を受け、相互交流、情報交換の場になれば始めました
<ul style="list-style-type: none"> ・施設を地域に知ってもらいたい ・認知症を理解してもらい、認知症になっても今までと変わりなく生活できる街にしたい
最近マスコミでも認知症について取り上げられることが増え、名古屋市でも認知症に対する前進的な取り組みを目指していると知ったため
認知症予防プログラム（体験型）に楽しみながら通うことにより、認知症の方への理解が深まり、支え合う仲間づくりができると思ったので
病院での認知症患者が増加し、地域の方より困っている様子を聞いてははじめました
いきいき支援センタースタッフよりお話をきいて興味を持ちました
グループホームの共有部分を利用して地域住民の方とグループホーム利用者が交流できる機会の創出ができると考えた
他社のオープンを見て

もともと私どもの法人は、本部のある三重県で数年前より四日市市内4カ所で認知症カフェを開催しており、当介護センターオープン時から認知症カフェの設置は視野に入れていた。オープン後も運営推進会議等において地域住民の方等からのニーズもあることを知り、2015年9月にオープンした
東区で認知症カフェが少ないと伺ったこと
小規模多機能で名古屋市独自報酬加算を算定する内容に、「地域住民が参加している行事を開催している」というのがあるため。どうせやるなら利用者さんのためになるイベントを企画したかったので
「地域住民が安心して集える場所、気軽に相談や情報交換できる場所を」との声から
地域の人のとの関わりの上と、認知症の居宅事業所として周囲に力になればと思いました
認知症の方、家族の情報交換ができる場所ができると良いと思いました
家族サロンを開催するなかで家族より安心して外出できる場所が少ないとの意見を受けたこと。いきいき支援センターとしてモデル的に認知症カフェを開催することで港区の認知症カフェを拡大していくため
老健施設として地域に貢献
医療生協では、組合員さんたちの自主的活動として「班会」や誰でも参加できる「サロン」活動で仲間づくり・居場所づくりに取り組んでいます。また、診療所では、かかりつけ診療所として気軽に相談できる窓口としての役割も大切になってきており、2015年の名古屋市認知症カフェ開設事業を機に取り組むことに
民生委員の活動を通して家にこもりがちになっている高齢者の姿を多く目にした。体調以外に出かける先がないという理由がそこにはあった。高齢者の家以外の居場所のひとつになれば、そしてこの場所から他者との交流が広がればという思いでカフェを開いた
もともと当院はもの忘れ外来を行って認知症の方を介護する家族の方が出入りしています。困っているときはおたがいさまの活動をしていたので、ロビーでやっている喫茶にもっと多くの方をお誘いしたいため
デイサービスに行くまでではないが、認知症の方が自分の力を発揮したり、誰かと交流できたりする場が作れるといいなと思った
元々施設内で入居者向けに喫茶店を行っていたところ、いきいき支援センター職員より認知症カフェの話聞き始めるようになった
地域に開かれたサロンの運営をしたいとボランティアさんから申し出ていただいた
認知症サポーター養成講座を受講したのがキッカケです
施設として何か地域への貢献活動ができないかと考え、認知症地域支援推進員の方に相談したこと
かねてから法人として地域貢献できる場づくりを模索していた。いきいき支援センターから認知症カフェの取り組みの紹介があった
地域で認知症の方、その家族が孤独にならないよう開かれた空間として場所を提供したい。また、高齢者の方が認知症にならないよう、おでかけの場として開催したいと考えました。さらには古くから地域に根差している医療機関としての責任です
居場所づくり
介護者が介護の方法や接し方などを1人で抱え込んでいる話を聞き、同じ立場の人が交流できる場があるとよいと思った。気さくに話ができる場ができ、介護者に気持ちのゆとりが少しでも取れるような場を作りたいと職員が話し合った
自施設では認知症専門棟フロア（入所）があったり、もの忘れ外来の診療も行っている。地域で認知症の方やその家族を支えていく活動をしていきたいと思っていたから
南区で認知症カフェを開催している施設がいくつかあり、興味を持ったため
今後ますます地域での支え合いが必要だと感じています、その一端を担えれば…と思い始めました
地域の方々に役に立てることがないだろうかと思っていた時、包括の方に勧められて
訪問看護ステーションを開設する時、地域に開かれたスペースの活用を検討し、認知症に関する取り組みの中からカフェを開こうとなりました
地域に認知症カフェがなく、名古屋市も認知症カフェ設置を勧めていた
地域の高齢者が気軽に足を運べる場所であるという福祉会館の利点を生かし、認知症の人に寄り添うカフェを作りたいと思ったから。また、カフェという日常的な場で交流することで認知症への偏見をなくし、認知症になっても暮らしやすい地域をつくるきっかけとなる場所になればと思ったから
老人ホームを開放することで老人ホームのイメージを変えていければいいと思います
地域に認知症に関わる人々の立ち寄りスペースをつくりたくて、デイサービスの場所を使って定休日にカフェをおこなうようにした
分室が開設したのをきっかけにいきいき支援センターのPRを兼ね、認知症の人も介護の人も地域の人、誰でも気軽に集まれる場所を作った

問3 カフェのプログラム内容

認知症の勉強、配食サービス試食会、ボッチャ大会、回想法、コグニサイズ、音楽療法、認知症予防体操、カフェタイム（コーヒー・紅茶を飲みながらおやつを食べる）
認知症に効果があるとされていることを提供 ・運動（ぼっちゃ・ゲール） ・音楽療法（ボランティアのピアノ演奏による合唱） ・回想法（名古屋弁かるたを使用） ・創作（切り絵など）
・飲み物、菓子の提供 ・毎回みんなで懐メロを歌う（2曲ほど） ・認知症や健康にまつわる企画（笑いヨガ、脳トレ、体操など、専門職によるお話や落語などもありました） ・最後に交流会としてグループ（机）ごとにお話しています
その月に合わせて行事を行っています。6月は音楽演奏、7月は七夕で願い事を書いていただき、8月は風鈴作りを行いました。9月はおはぎ作りをする予定です
己書を行っています
音楽療法、日本舞踏、集団体操など
健康体操、三味線演奏、フルート・ピアノ演奏、童謡等をみんなで歌う（合唱・輪唱）、調理（わらびもち作り）、健康相談・介護相談
コーヒーサービス、地域のパン屋さんの販売、特養入居者様のお抹茶サービス、音楽演奏会、回想法、ボランティアさんの持ち芸を披露、折り紙
コーヒーとお菓子を提供し、おしゃべりの場を提供しています。認知症の方本人の参加もありますが、普段自宅であり話をする機会のない方や認知症の方を介護する家族の参加があり、交流の場になっていると思います
①指体操or体操 ②自己紹介 ③30分程メインの行事（音楽会、折り紙、地域防災についての話し合いなど） ④お茶とクッキーを食べながらお話し合い（地域の方の交流、認知症家族の方との相談）
お茶を出す、音楽を流し一緒に声を出しその頃を思い出してもらい、昔なじみの歌を選んでもらい、昔の衣装（カラオケ等）を着てもらい（嫌な人はなし）
・お茶を出す ・歌をうたう ・体操をする
・お茶、コーヒー、ジュースを出す ・毎回ごとの企画（リハビリ体操、各種勉強会）
季節の漢方養生の話（ミニ講座）、認知症予防体操の学習、カフェタイム
飲み物＋ケーキ、お悩み相談
音楽療法やボランティア・有料ボランティアの方の出し物をみたり、認知症予防体操をおこなう
・専門職から話をきく（介護の仕方、介護保険について、嚥下の力のアップ、嚥下しやすい食品について） ・認知力アップ運動・ゲーム ・最近話題になっていることについておしゃべり（成年後見について、終活運動など）
・お茶を出す ・おしゃべりを楽しんでいただく（じっくり心から話す機会が少ない方々なので）

通常のカフェと同じでオーダーをとり、珈琲とパンをお出しする。カゴの中に数種類のお菓子を入れておくが、好きなものを2種類、ご本人に選んでいただいている。※食品衛生上、カフェ以外に同時刻に実施してはいけないという指導下で実施している
・周辺に買い物をする場所がなくなったため、買い物をする場所の提供　・お茶を出す　・認知症高齢者の見守り　・介護者の相談援助　・地域内交流
ミニ講座（医師、看護師、CM、介護福祉士）30分～40分程度、その他交流会90分（その中で気軽に専門職とお茶しながら相談できるようにしている）
・情報交換　・質疑応答
お茶を出す、認知症・健康についての勉強、身体機能の低下予防のための運動プログラム
利用者様が1から手作りで五平もちを作り、コーヒーも豆を挽き用意していただいています。来客の方に私たちが作った五平もちですと提供・説明しながら交流をしてもらっています
パン教室の先生の説明のもと、一緒にパン作りを行い、お互い協力し合いながら喫茶香りカフェの準備（コーヒーの豆挽き、テーブルクロスを敷く、テーブルに飾るためのお花を生ける、おしな書き）を役割分担していく
茶菓の提供（フリードリンク）、相談業務[医師（神経内科）、看護師（認知症ケア専門士、介護支援専門員など有資格者）、社会福祉士などが対応]、勉強会の実施　※決められたプログラムは作成しておらず、その日の参加者のニーズに合わせて対応している
月一度の認知症講座を開き、認知症に関する理解を深めていただいたり、ボランティアさんの協力を得て音楽や絵や自然との触れ合いを通し、暮らしやすい街作りに貢献しております
・飲み物を出す、ケーキを出す　・音楽を使用した脳トレ　・認知症や生活についての講座
第1回：やさしい認知症講座（専門医より）、第2回：認知症介護者の話（両親が認知症、自宅で両親を介護している息子様から話を聞く）
工作の作業、お菓子作り、体操教室などを行っています。お茶、お菓子を出して談話交流をはかったり、特別養護老人ホーム入居者、デイ利用者の方々が作った作品を展示しています。認知症に関する情報も提示したりしています
来訪者へ数種類のメニューから飲み物を選んでいただく。認知症の関わりのある話題を提供。ボランティアによる音楽演奏や手芸、当施設で行っている体操や歌を毎回ランダムに組んでいる
オレンジカフェとしてインスタントのコーヒー・紅茶・緑茶、クッキー、その他菓子類の提供。プログラム・脳と認知症の勉強20分間（看護師の講習）・脳に良い運動をする（コグニサイズ）　・認知症予防のための遊び（カラオケとダンス、ガンパルー体操、クラフト）
認知症関連の講演、体操等を行ったあと、コーヒー等を飲みながら専門職員との交流の時間を持つ
お茶を出し、話し合い　小物づくり　心のメンテナンス、終活の相談
茶話会、生活に役立つサービスの紹介（配食サービス、福祉用具紹介、訪問介護）、認知症予防体操
カフェの説明、自己紹介（テーマを決めて）、認知症の勉強、お茶を提供、時には皆で作ります。多職種のいる老健としてそれぞれの専門性を認知症に関連させて毎回入れている。会の後半では座談会と称し、困りごとの相談や交流で2時間を超過するくらい有意義に開催できていると思っています
ウエルカムライブ、施設見学会、小物づくり、ボランティアのフラダンス等、オレオレ詐欺勉強会、茶話会
お茶→歌をうたう→作品等を作る、ゲームをする→お茶、コーヒー、お菓子
1人のお客様に1人職員がつき、相談を受けます。主に雑談ですが、お客様の話を傾聴することで何にも解決していなくても気分は楽になるようです。
3部構成　1部ミニ講座：介護保険、認知症、季節などできるだけその時旬なことを取り入れる　2部ものづくり：事前にスタッフが割程準備　3部交流会：飲み物は5種類からセレクト。おやつは厨房の手作り
レクリエーションをして交流し、その後お茶を飲みながら相談等を受ける。現在までは季節のレクリエーション（豆まき、夏祭り等）に合わせて行いました
2時間のうち、前半の1時間はiPadを使った認知症予防プログラムを行い、回想法、体操、音読、想起トレーニング、ゲームアプリ体験などを楽しむ。後半の1時間はお茶とお菓子で参加者同士が会話を楽しんだり、認知症の家族介護者からの相談に応じたりしている
お茶とお菓子の提供、認知症の予防、音楽療法、リハビリなど
・お茶を出す　・ご希望を確認（話がしたい、身体を動かしたい、歌を歌いたいなど）　・個々に合わせて対応（参加者が少ないので）　・認知症の勉強や認知症サポーター養成講座も実施
音楽療法士（ボランティア）が音楽を通して季節感や回想をして話題の提供を行い、その後お茶やお菓子にて交流を図る
お茶出し、軽食、レクリエーションの見学
・コーヒータイム　・おもしろお話タイム（認知症のミニレクチャー等）　・お楽しみタイム（音楽療法、合唱、ゲーム、体操など）　・ほっと一息タイム（フリートーク、質問など）
毎月違うイベント（音楽、体操、手芸、ハーブ等）を用意し、その後みんなでお茶会を行っている
・勉強会　・セミナー　・レクリエーション　・茶話会
・交流会（カフェ）　・地域の方のお知らせ（行事等）　・困りごと相談（基本、介護や認知に関係なくてもOK）　・催事（事業所、地域の方の自由発表会）
・認知症の予防・勉強　・手作業（折り紙、ローズウィンドウ等）、身体を動かす（コグニサイズ）　・回想法　・お茶、お菓子を出す
コーヒー・お菓子の提供、回想法、介護予防体操、音楽療法、コグニサイズ、マッサージ、福祉用具、相談コーナー
・コーヒー、お茶、菓子などを出す　・認知症講座　・ミニエクササイズ　・相談、歓談
歌（最近ではハーモニカ演奏、電子ピアノ持参の参加者の演奏もあり）、脳トレ、軽い運動を取り入れたレクリエーション、お茶（お菓子）を飲みながら交流
外部の協力者を得てメインのイベントをひとつ。その後、飲み物と手作りの菓子を飲食しながら話を楽しむ。　・過去のイベント：介護保険の話、ボラの学生さんのミニコンサート、訪問マッサージの紹介、福祉用具プラザの福祉用具紹介、防災の話、マイナンバーの話など　・これからのイベント：ヤクルトさんの協力でおなかの健康、災害時の非常食づくり、笑い体操
お茶、お菓子、コーヒーがあり、ボランティアさんやデイケア利用の方などと交流を中心にしています
・お茶（飲み物）とお菓子の提供　・脳トレのプログラム　・制作物　等
喫茶中心、交流（悩み相談）
認知症の学習、コーヒーを飲みながら談笑
・介護予防に役立つ「腰痛」「肩こり」解消体操など　・薬剤師が考案した「健康茶」の提供　・手軽にできるアロマセルフケア
・お茶、お菓子出し（ボランティアの方手伝いあり）　・健康体操、脳トレ　・ピアノ演奏（ボランティアの方）　・認知症に関する勉強会
・ドリンクの提供（コーヒー、紅茶、オレンジジュース）、モーニングの提供（小倉トースト、ホットドッグ、トースト月変わり）　・認知症勉強会（15分、認知症カフェとは、認知症予防最前線、ADとは、老健とは、認知症の薬、認知症ケア、みつばちプロジェクトの紹介、若年性認知症当事者の詩の朗読など）　・脳トレ（15分、フラメンコ、折り紙など）
・飲み物、お菓子の提供、健康体操、脳トレなど　・その時々でカフェの趣旨にふさわしい企画など参加された方々の交流（雑談の時間を多くとっています）
朝の打ち合わせ、手芸、手づくりパンなど差し入れ提供、ピアノ演奏、新聞記事などの紹介、終了後の食卓会

1年間のスケジュールを参加者と一緒に決めている（学習したいこと、やりたいこと、行ってみたいことなど）。先回は「新しい総合事業の話」をいきいき支援センターより講師を招き、オープン参加で開催した。終了後、自施設の参加者は別室に移り、お茶とお菓子で交流をした。講師をまじえて行う。自施設参加者のみ参加費をいただいた
・コーヒー、ジュース、抹茶の提供（おやつ付き） ・ミニ学習会 ・情報交換
お茶を出す、作品をつくる、体操、認知症に関する相談、談話、認知症に関する書籍などの設置
・飲み物の提供 ・ケアマネに依る出し物（うた、演奏など） ・認知症の勉強 ・ボランティアによる出し物（紙芝居） ・脳トレ、体操
飲み物メニューにて飲み物決め→飲み物出し、その他は自由に過ごしていただく
ゆっくり流れる居場所を考えており、プログラムも学習や企画は控えめにお茶を飲んでゆっくりできることを大切に考えて運営しています
これまでは外部の人・団体（音楽、体操、マジック、栄養講座、詐欺防止等）をボランティアで依頼し、カフェの前半をやってもらい、後半はお茶と茶菓子を提供しておしゃべりをする内容で、認知症予防や交流を行う
①飲み物の提供（日本茶、紅茶、コーヒー） ②音楽演奏、菜園づくり（さつまいもの植付け）、マッサージ、回想法など ③参加者同士の交流（情報交換）
駄菓子屋に来ていただいて、音楽を流しながら回想法のようなことをしています
お茶を出すことは毎回。立ち寄るきっかけづくりのため、ハンドマッサージ、ハーブティ講座、体操なども行っている
・歌声喫茶 ・ビンゴ大会 ・ウォーキング ・体力測定 ・メイク教室 ・笑いヨガ

問4 認知症の本人や家族への案内とその方法

行っている	92.0 %	自施設の利用者に案内	73.5 %
行っていない	8.0 %	医療関係者・機関と連携して案内	16.2 %
		いきいき支援センターと連携して案内	69.1 %
		介護関係者・機関と連携して案内	25.0 %
		社会福祉協議会と連携して案内	25.0 %
		行政担当者・機関と連携して案内	11.8 %
		民生委員と連携して案内	47.1 %
		当事者会（家族の会など）と連携して案内	10.3 %
		町内会・地域自治会と連携して案内	44.1 %
		貴団体のホームページ、SNSを通して案内	44.1 %
		その他	11.8 %

問5 地域住民への案内とその方法

行っている	94.5 %	貴団体のチラシ作成・配布	79.4 %
行っていない	5.5 %	医療関係者・機関と連携して案内	14.7 %
		いきいき支援センターと連携して案内	63.2 %
		介護関係者・機関と連携して案内	22.1 %
		社会福祉協議会と連携して案内	23.5 %
		行政担当者・機関と連携して案内	10.3 %
		民生委員と連携して案内	47.1 %
		当事者会（家族の会など）と連携して案内	5.9 %
		町内会・地域自治会と連携して案内	54.4 %
		貴団体のホームページ、SNSを通して案内	29.4 %
		その他	10.3 %

問6 カフェの協力者の人数

平均	5.4 人
中央値	4.0 人

協力者が0人のカフェ	12.3 %
------------	--------

問7 協力者の属性

地域住民	22.0 %
医師	2.4 %
民生委員	12.2 %
医師以外の医療専門職	4.3 %
認知症サポーター	9.8 %
行政職員	1.2 %
いきいき支援センター職員	7.3 %
社会福祉協議会職員	3.0 %
介護・福祉専門職	24.4 %
当事者会（家族の会など）のメンバー	4.3 %
その他	9.1 %

問8 協力者の募集

行っている	40.5 %	自施設の関係者に募集	43.3 %
行っていない	59.5 %	医療関係者・機関と連携して募集	3.3 %
		貴団体のチラシ制作・配布	26.7 %

介護関係者・機関と連携して募集	3.3%
いきいき支援センターと連携して募集	33.3%
行政担当者・機関と連携して募集	0.0%
社会福祉協議会と連携して募集	13.3%
家族の会など当事者会と連携して募集	3.3%
民生委員と連携して募集	13.3%
貴団体のホームページ、SNSを通して募集	13.3%
町内会・地域自治会と連携して募集	30.0%
その他	13.3%

問9 協力者のスキルアップのための取り組み

行っている	32.4%	ラジオ体操指導員の資格を取得し、気軽にできる運動をカフェ参加者に伝えられるよう取り組んだ
行っていない	67.6%	施設内研修
		カフェ終了後の反省会
		認知症のオレンジリングの養成講座を受ける（今年9月）
		担当者に体操学習の機会を作ったりしている
		認知症サポーター養成講座の開催
		事業の一環として位置付けているので、定期的に研修を行っている
		協力者（カフェボランティア）定例会を毎月1回開催している。カフェ運営の成果や課題について話し合い、改善を行っている。また、認知症の治療や対応方法、新たな制度等の情報交換及び学修会を行い、カフェの利用者らとの会話や交流に役立てている
		カフェの終了後に30分程度反省会や振り返りを行っている
		定期研修を行っている
		認知症フォローアップ研修に参加、認知症ケア専門士など有資格を得て、研修に参加
		認知症講座を開き、地域住民の方々やボランティアさんとの交流をはかり、理解を深めています
		学びの日（毎週火曜日13時～15時）会員の看護師、ケアマネジャー、外部の講師による勉強会
		意見交換会を行っている
		同じ認知症予防プログラムを行っている全国の仲間との研修会やFacebookによる情報共有
		認知症サポーター養成講座をいきいき支援センターの職員の方と一緒に院内で行っている。
		カフェ終了後にふりかえりミーティングを行っている
		認知症サポーターに依頼しているため、打ち合わせ時に対応方法確認。直接、認知症の方と関われるプログラム内容で実施
		・認知症サポーター養成講座受講 ・守秘義務について ・事後ミーティングでのディスカッション ・次回勉強会、脳トレのスタッフ・ボランティアによる予習（参加者の交流促し、脳トレ（手作業）の企画・運営と3～4カ月に1回指導）
		朝の打ち合わせ、その日の提案内容（新聞記事などの情報）を報告し、意見をききながら実施している
		生協で脳いきいきインストラクター養成講座を開催して、協力者を広げている
		いきいき支援センターが主催した認知症サポーターフォローアップ講座に参加案内を送った
		・認知症サポーター養成講座への参加 ・医師に依る認知症予防講座の開催

問10 1回あたりの参加者数の内訳

65歳以上の認知症のご本人	3.1人
64歳以下の認知症のご本人	0.2人
家族	1.9人
いきいき支援センター職員	0.4人
介護・福祉専門職	1.3人
医療専門職	0.4人
地域住民	5.5人
その他	1.1人

問11 カフェ参加者の男女比

男：女＝2.2：7.8

問12 開設時に比べて参加者数の変化（対象は3回以上開催したカフェ）

	回答数	構成比
増えている	26	37.7%
ほとんど変化なし	35	50.7%
減っている	8	11.6%

（注）構成比＝回答数／有効回答69

増えている理由
参加された方の口コミで広がり、ほとんどの方がリピーターになっていかれる
口コミの効果だと思う
地域への案内を増やした。営業をかけた
参加された方が近所の方に声をかけていただいているため

最初は身内のみ、その後やや認知症の家族1～2増えた
まさに生活必需となる買い物は認知症高齢者にとっても大切なもので、不思議とその数は少しずつ増えていると感じます
子どもたちが来るようになり、小学校に知れ渡り、人数が増加。地域の推進協の方に声かけ、チラシを渡していることで3回に1回は来てもらえるようになり増加
少しずつカフェの周知、開催日時の告知方法、チラシ配布等の広報活動等々の成果が上がってきているのではないかと考えます
地域住民に周知されてきた。参加者の口コミにて増加
微増です。口コミでしょうか？チラシでしょうか？
初回は6人から徐々に増え、現在は安定してきている
友人を誘って来園してくださる
参加者が他者を誘ってくれている
常設型は減っている→1対1の対応は遠慮されている、イベント型は増えている→人伝えで増えている
地域へ向けて回覧板や民生委員さんと連携強化を図っている
口コミで広がっている。クリスマスはLiveと決まっていて、参加者にファンの方が多くできたので、大盛り上がりである
カフェ開催が地域住民に認知され始めている
毎月のチラシ配布と開催の様子を「おたより」として知らせている。いきいき支援センター（緑区南部・北部分室）の協力
参加者が誘ってくれる
地域で毎月ポスティングを行っています。一度参加された方がリピーターとなっています
地域住民や併設病院の患者さん、職員等の参加が増えているため
口コミ

減っている理由
開設時に所長（医師）の話（認知症の話）を企画し、宣伝にも力を入れたためたくさん集まったこと。企画によって人数が変動することもあるようです
認知症カフェとのネーミングがあるため、ご自分は認知症ではないとか、まだそこまでではないと参加されない。ご家族が多忙で連れてくることのできない
第1、2回目より対象者をしばっている。1、2回目はイベント的要素が大きかった
利用者が継続しない
地域PR不足
本人が亡くなられたり、施設入所されると介護者自身が「卒業」と言って参加されない

問13 認知症地域支援推進員・いきいき支援センターとの連携

	回答数	構成比
十分とれている	16	21.9%
とれている	28	38.4%
あまりとれていない	26	35.6%
とれていない	3	4.1%

（注）構成比＝回答数／有効回答73

十分とれている
常に細やかにお互いに報・連・相を行っている
地域の方々へのお声がけをしてくださっている。参加に同行してくださる。用具を貸してくださる。チラシに掲載してくださる
毎月認知症カフェ検討会が区役所で開催されている。名刺等いただいております、電話連絡等すぐとれる状態
認知症カフェ連絡会を主催して情報交換を行っている
認知症ケア会議に参加させていただいているので、その際に報告、相談させてもらっています
圏域内のいきいき支援センター（社会福祉協議会）とは、カフェ開設時にボランティア向けに研修を実施したが、講師としてボランティアの心構えや留意点等をご教示いただいた。また、カフェの側面的な支援として、必要時に連携をとっている。認知症相談支援センターとはカフェ運営上の示唆をいただいている
広報（チラシ等）の配布や地域の情報共有ができています。アドバイスなどもいただいている
・認知症カフェ交流会を開催している為、それに参加　・カフェにも出来る限る参加してくれている（区役所カフェ担当者も）
オープン当初より認知症地域支援推進員さんを中心に相談にのってもらったり、関係者にカフェの情報を広めてもらったりしている
いきいき支援センターが実施
見学の案内や南区内の認知症カフェと一緒に出向いたり、今後の運営に関するアドバイス、情報をしてもらうため
いきいき支援センター職員も運営スタッフにかかわっている。相談コーナーで受け付けた内容で了承が得られた場合は、いきいき支援センターや担当ケアマネジャーにつながるような仕組みにしている
主に支え合い事業関係で打ち合わせ多
カフェ開催はいきいき支援センターが主体となったため現在もその傾向はあるが、今後の運営はボランティアが中心となって行えるよう支援している
いきいき支援センターが運営しているので

とれている
認知症カフェ検討会に参加している。認知症地域支援推進員はよくわかりません
認知症カフェ検討会が月に一度お会いして情報交換しています。オープン時とその後一度、自施設のカフェに来ていただいています
サロン検討会に月1回参加し、情報をもらう
北区の運営会議に参加し、いろいろな情報やアドバイスをいただいている
ときどき見学に来て、自身の担当する高齢者への声掛けを行っていただいています。いきいき支援センターにて作成するチラシへの掲載もし、同様に情宜いただいている
各地域のいきいき支援センター職員が見学、情報交換を行っている

連絡を常に取りあって、カフェの状況を報告しています
いきいき支援センターの職員が参加して下さった
開設にあたり、さまざまな場所への営業・告知を行って下さったことによって参加者が増えたと感じている為です
カフェに参加してくださっています（毎回ではないのですが）。カフェの広告チラシをいきいきの来訪相談者へ渡してくださっています
チラシ等を配布していただいたり、時には参加がある
チラシの配布等
6月より中村区でのカフェ運営施設の会があり、毎月他運営施設とも一緒に話し合う機会を設けていただいています
とても気にかけてくださり、カフェに顔を出してくださっています
毎回いきいき支援センターの方にご参加いただいている
・案内を出している　・時どき参加していただく
立ち上げのころや初期のころに親身にアドバイスをくださり、大変参考になり、いま上手く運営されているのはそのおかげだと思います。
こちらからより、いきいき支援センターの方からいろいろな提案や訪問いただいている
いきいき支援センターの方が対象者を連れてきてくださった
家族の会のメンバーなどに紹介していただいている。家族の悩みを相談し、助言を受けている

あまりとれていない
いきいき支援センターの方には協力していただいているが、その他はなかなか機会がありません
土日が休みになって連絡が取れない（いきいき支援センター）。見学にも一度も来ない
認知症地域支援推進員にまだお会いしていない。どうコンタクトをとっていいかわからない
まだ就任してから間がない為これから関係を深めていきます
始めた当初に比べカフェの参加回数が減少した
行政は忙しく、現場へのアプローチに制約があって、自由な活動ができにくいと思われる
最近になって交流会が始まった
まだこれからと考えている
始めた頃1回みえたきりである
チラシを月に1度送らせていただいている以外はとくにない
いきいき支援センターさんは多忙で、スケジュールが土曜開催のカフェに合わせにくいそうです
担当の方は時々カフェにも参加してくださるが、どのように活用してよいか定まっていな。また、利用されている方が特養の入居者・家族が多いという部分もあり、連携となると難しい
参加者が減っていることを報告していない
こちらが必要な時のみ連絡している
（認知症地域支援推進員を）どなたなのか知らない

とれていない
いきいき支援センターは日曜日がお休みで、日曜日に開いているため参加は全く不可能とのこと（地域住民の協力や家族は日曜日が参加しやすいので）
・いきいき支援センターは見学に來ただけ。パンフレットは提供したが、紹介はゼロ　・認知症カフェの交流会があったが、いきいき支援センターの主導の会議形式であり、交流の場ではない
もともとカフェがあり、困った人への相談や支援を自前の組織で行っていたため、支援をとくに必要としなかったため

問14 地域との関わりの変化

	回答数	構成比
増えている	34	45.3 %
ほとんど変化なし	41	54.7 %
減っている	0	0.0 %

（注）構成比＝回答数／有効回答75

増えている
地域住民から気軽に相談を受けることが増えた
施設というもののイメージが変化しているように思う。気軽に質問や見学を依頼されることが増えている
もともと医療・介護活動の利用者以外の方から問い合わせがあり、初めて参加される方がみえる。地域へ宣伝に行くに興味を持ってもらえる
打ち合わせをしたり、回覧板に入れていただいたり、交流が増えた
まず民生委員と知り合え、協力関係ができた。また地域の方がカフェを通して当法人に興味を持ってくださった
カフェで地域の方が集まり、交流し、顔なじみになり、毎月1回参加してもらっている。いろんな情報を得ている
町内会とのかかわりが増えた
現在地に移転後、2月目にカフェを開設したが、学区の自治会や民生委員に積極的に声掛けを行い、町内掲示板への貼付けや組回覧にて町内会全戸にカフェ開設チラシの案内をした
地域への会議（福祉連絡協議会など）への参加依頼をいただくなど、地域福祉活動への依頼をいただけるようになった
認知症の病気については「他人事ではない」と、とても関心が深まってきている。ご家族も気軽に来所できるようになったと思う
地域のお祭りに出かけたりすると顔見知りの方が増えてきたと思っています。利用者さまとのかかわりも増えています
まだこの職についてから半年位で、現在地域住民の方々や行政とのかかわりをどんどん増やしている最中です
施設の場所や老人ホームがあることは知っていたけど、初めて施設内に入りました、との声が聞かれました。また、施設内の職員とも協力し合い、地域の集まりへの参加、地域の店舗にチラシを貼っていただけないかと交渉させていただいたり、協力・連携・つながりを意識しています
所属町内のみならず隣町内からの相談が増加した
・道で会うとあいさつを先に声かけをしていただける　・カフェを通じてサービスにつながった　・散歩の途中で手作りの飾り物を届けていただいた
地域のイベントでの関わり等

民生委員の方が協力的で告知などの助言をしてくださるようになった。またボランティアの方がカフェ開催日以外でも毎週決まった曜日にボランティアに来てくださるようになった
地域の方が認知症サポーター養成講座を受けている
民生委員より認知症と思われる方に対する対応などの相談がある
デイサービスの利用につながった
・カフェをきっかけに地域住民からいろいろな相談や地域行事への誘いをいただくようになった　・施設行事にも地域住民の方々の協力がいただけるようになり、ボランティアに参加してくださる人が増えた
地域の方が利用者さんの顔を覚えてくださって散歩のとき等声かけしてくださる。お茶会の時も以前よりおしゃべり（利用者さんと）されている
町内会長をはじめ老人会会長、民生委員等にご参加いただいている。また、案内配布などカフェのPRにもご協力いただいている
通常日でも「〇〇さん」と気軽に声をかけられるようになった
地域で認知症カフェを開催してほしいとの声が増えた
老健で行ったサロン利用につながっている。コミセンのサロンへのリハビリ職員派遣の際、顔の見える関係になった。参加者が友人を連れてくることが多くなっている。老人会の人たちで来る
町内会、老人会、公民会、囲碁、陶芸、さおり織メンバーなどの参加増
今まで当施設に来たことのない方が興味をもち来てくださった
いかにして町内の方々に役立てることが出来るかを町内会役員の方とよく話すようになってきている
地域の認知症予防、介護予防の場となっている
いきいき支援センターの名前よりカフェの方が認知度up

ほとんど変化なし
開設時なし、今もなし

問15① 認知症の人への効果

	効果を感じている	効果を感じていない
認知症の本人に対して	60.6%	39.4%

感じている内容
表情が明るくなり、積極的に参加されるようになった
参加は少ないですが、続けて参加されている方もみえるため、交流の機会になっているようです
カフェに参加中は表情がいきいきとされ、「楽しかった」と帰るときに言われます
笑顔が増え、カフェはいつかと聞いてくる
ご夫婦でカフェに参加している方がみえます。夫が認知症ですが、妻と気兼ねなく出かけられる場となっています
ここに来るのが楽しいと言われる
笑顔が増えた
その場で楽しんでいるようです
デイも利用されていますが、全然雰囲気が違うのでリラックスしてみえるように思います
(アンケート結果より)「カフェに定期的に何うことで、本人が以前に比べ明るくなった」「生活が規則正しくなった」「新しい友人が増えた」「出かける場所ができ、生きがいが増えた」「何もお話できないけれど、出かけられることを楽しんでいる」「出かけてお茶を飲める場所ができ、性格が穏やかになった」「カフェは心からくつろげ、安心していられる場所」など好ましい効果が生まれている
ただのお茶会では習慣づかなかっただろうと思う。買い物先でお話したり、お茶をいただいたりすることは認知症を呈していても変わらないんだと思う
地域の住民と会う機会が増えて嬉しそうです
利用者様とのかかわりが増えたこと
地域の方との交流が深まる事で積極性が出てきた
表情が豊かになったり、笑顔がよく見られる
地域住民とご本人が顔なじみとなり、気軽に会話できる関係となっている
居場所を得て喜んでいる人がいる。グループ活動、ダンス、演奏、習字等の出張レクリエーションをして居場所づくりをしています。皆様、喜んで出場してくださいます。
家族と一緒に楽しめる時間を持てた
「楽しいのでまた来たい」と言われる方が多くなった
カフェの間の2時間を集中して楽しみながら参加をされ、毎回開催を楽しみに待たれ、参加を継続的にしていただいている
カフェ当日は利用者もお手伝いをしてくれるため役割ができた
笑顔や会話が增えた
コミュニティの場として外出が増えている
外に出るきっかけ作りもでき、家族以外の人との交流の機会がある
地域との交流により生活に活性化が生じている
リラックスできている
月1回の開催ではあまり馴染まず効果が薄かったが、毎週水曜日（認知症カフェ以外の水曜日）にコミュニティカフェとしてオープンすることで「水曜日にあそこに行かなければ…」という馴染みの場所になり、散歩（徘徊？）の途中に（他の曜日でも）カフェに入ってくるようになった
とてもイベントを楽しんでおられる。貴重な外部とつながる社会交流の場になっている
カフェ開催日を心待ちにされている。カフェに参加されているときは、笑顔で発言も積極的にされている
そのこと自体は覚えていないが、開催日になると「楽しいことがある」ということだけ覚えている。気持ち的なものだが、1日を通して落ち着いた日を送れる
参加してくださった方には、活性化につながっていると思われる
出掛ける場所が増えた。外出を嫌がる認知症の方が家族と認知症カフェに参加。その後デイサービス利用につながる
外出の機会、会話する機会が増えた
継続して参加してくれている。笑顔が見られる

法人内居宅ケアマネジャーの担当している認知症の方の参加の場としてボランティアを提案した。定着して参加でき、意欲的に仕事に降り組まれている
毎月楽しみにしてくださり、それが喜びとなっている方が見えます
外出機会増、手作業、交流。居場所づくりが効果をもたらしたと…
家族に気持ちのゆとりができ、本人に対しての接し方が変わってきた（家族の話）
やりがいを感じて行ってくださっている
体操や脳トレなど自宅でもやっているとのこと。紙芝居や歌など楽しいひとときを過ごせると感想をいただいた
笑顔で話をされることが多くなった。表情が明るくなられた
カフェで友人と会うことを楽しみにしてくださっている

問15② 認知症の人の家族への効果

	効果を感じている	効果を感じていない
認知症の人の家族に対して	60.6%	39.4%

感じている理由
本人が楽しまれている姿を見て、安心され前向きに変わられた
「相談する場がほしかった」「参加することで気が楽になる」と言われる方がみえました
悩みをお話され、気持ちが楽になったと言われる
気軽に相談できる場がほしかったとのこと
他のご家族や施設職員と歓談され、ストレス解消されたり、ご自身も楽しまれています。笑顔で帰られます
「しゃべれてホッとした」とおっしゃって帰る
家で介護をしている方が「ここ（カフェ）で話をきいてもらおうとスツとする」と言って下さっています
参加者同士で顔なじみになり、介護の悩みを相談されている
家族同士悩みを話すようになった。認知症の母を持つ娘がボランティアをしてくれるようになった
専門職との話がスムーズにできる
介護保険、社会資源について案内ができ、かかえている悩みを共有することができた
関心が高まっていると思います
話し合いのなかでお互いヒントをもらっている
ひと月1度の開催ですが、「楽しかった、思い切りしゃべれた」と言って下さっています。開催を楽しみにしてみえます
（アンケート結果より）「同じような立場の方々と話ができて、慰められることがある」「本音で話せる友人がみつけれられた」「自分自身の憩いの場所になっている。皆様から親切をいただいている」「介護の役立つ知識が得られる場所」「家族サロンしか知らなかったが何物にも代えがたい場所になっている」など、カフェに参加している間は、介護から解放され、介護者の癒しの時間となっている
買い物の付き添い感覚で出かけていただいて、かまえずに相談いただけている。また本人を誘いやすいようである
日常のなかでのケアの仕方については家族のお困り事を早く聞けるようになったと思う
他の方と接していくことで、認知症に対する気持ちや介護に前向きになっているように思う
ご家族の方の理解が深まり、お互いの信頼感が生まれています
今後どのように介護していくのか、施設とはどのようなものか等について相談を受けることができたと感じています
こういった活動や会・集まりに参加してみようかという気になりましたとの声をいただきました
相談しやすくなった
知らなかったことが多く、とても役に立ったとの感想があり効果を感じている
不安事に対して相談しやすい関係性が築けている
認知症のいろいろな症状を理解され、他のご家族のお互いの大変さを分かり合えたと思います
「楽しむ時間ができた。相談できる機会が増えた」との声があった
家族の方からも参加させたいと希望される方の声が増えている
息抜きや悩みをかかえこまず、はきだせる場所となっている
安心してもらっている
認知症の理解が深まる
一緒に音楽など楽しまれ、穏やかな時間を持たれている。施設に面会に来るきっかけになっている
「認知症」という病気を知っていただくことと、ご本人の姿（きちんと支援すれば安定）を見ていただける
家にいるとケンカしてしまうと話す家族が本人と一緒に楽しむ場所が増えた
相談ができる
夫婦で参加している方で、認知症の家族の方が楽しそうに過ごしている。ハーモニカを練習して演奏してくれている。単なる参加ではなく協力者
認知症の方の家族にもボランティアを提案して参加してもらっている。介護のストレスで情緒不安定だが、社会参加することで役割を持つ充実感を感じてもらおうとフォローしている
気楽に看護師、ケアマネジャーと話ができる場所として効果大である
家族に直接聞いたことはないが、あっちこっちに居場所があることのすばらしさを実感されているのではないかと思います
参加者同士の横のつながりができてきた。こちらが話題提供しなくても、参加者同士の会話ができている
認知症の本人と家族と一緒に話をしたり過ごす時間が増えている
「一緒に来られるところができてよかった。家ではほとんど会話しないがここではよく話ができ楽しい」と言ってくださっている
遠方からも友人ができたと通ってくださる

問15③ 地域住民への効果

	効果を感じている	効果を感じていない
地域住民に対して	63.2%	36.8%

感じている理由
参加時の身だしなみ・服装に変化があった（特に女性、化粧をするようになったり、おしゃれをしたり）。毎月1回をともに楽しみにされ、予定の一つとして意識されている
定期的に参加をしてくださる。お互いが顔なじみになってきている
認知症に対する理解やサポーターの必要性を認識され始めていると感じます。「認知症予防」の企画は特に好評です
認知症状の軽い方が参加してくださっています
施設へ入りやすくなった
町内会長より「効果がある」と絶賛のお言葉を頂戴しております
顔を出してくださる人が増えた
自宅で独居生活をしている高齢の方が「普段は喋らないけど、ここ（カフェ）に来ると良く喋る」と言って下さっています
近隣の住宅より自治会長さんやボラさん、民生委員さんが参加。地域の方は認知症の方を見守り、カフェへ一緒にみえる。また防災についての話し合いをする
町内会との連携がはかれた
認知症の方への対応の仕方がちがってきている
認知症本人や家族以外の地域の方々が気軽に参加していただける場所にもなっている。来所者の平均年齢は高めであるが、地域のなかの一つの喫茶店としてご利用いただき、認知症の方々への話しかけや昔話に花を咲かせたり、地域の方々との交流に活用していただいている。「認知症カフェ」のネーミングの壁を取り外されていると感じられる
付近の団地から認知症の有無を問わず、人とお話をしたりする場を求めてわざわざ買い物がてらお越しになられている
認知症の人への接し方を学べるように思います
認知症について少しでも知識を増やしていただいている
散歩の際とかに地域の方に声をかけられるようになってきている。五平もちやっつるところだねと広まっている
認知症の方と接することで、認知症への理解を深めることができた
まだまだ一部の方の理解ですが、その数を一人でも二人でも増やしていきたい
法人・施設が存在や、このカフェについて知ってもらい機会が増えたと感じています
カフェのプログラム内容が良かったとの参加者の声があり、友人を連れてきて下さるようになり、交流の幅が広がっている
定期的にカフェへ顔を見せに来てくださる参加者（固定）が増えています
認知症への知識を深めようと質問される方が増加。気軽に認知症のご本人への声掛けをされる方が増加した
一部の常連のみであるが、居場所として、またクラブ活動的なグループ参加で喜んでくださる
会場である施設を身近に感じてもらう
要支援の人たちも誘い合って意識を持って参加されている。カフェの参加者同士がつながりを見せている。高齢者が一人で散歩等をされていると、声をかけて誘ってしまおうと言われ参加増になっている
月に一度の茶屋を楽しみにしてくださっている
最初の頃は車で来られる方が多かったが、最近は施設の前にたくさんの自転車が並ぶ。以前よりは近くの方が来てくださっていると実感する
レクリエーションがメインとはいえ、まずは当施設を知っていただけようになったこと、今までご近所の方でもここにあったことを知らなかったといわれる方もいらっしゃいました
気軽に立ち寄ってもらえる場所として知ってもらえた
ボランティアの方も続いている
GHの共有スペースを利用しているため、GHの入居者の顔やGHの中身が理解してもらえている
宣伝
困っている人の「助け方」が理解していただけるようになってきていると思う。例えば、カフェのなかでコーヒーのフレッシュのふたが開けられない人がいると自然に助けてあげる等の場面が多く見られるようになった
自治会の方々ともとても仲良くなり、地域の防災訓練、施設の防災訓練など、おたがいに参加するようになった
勉強会やセミナー開催により「知らなかった。勉強になった」「良い話が聞けた。参加してよかった」等の声を耳にする
事業所の行事（オープン行事）への参加。サ高住へあそびに来てくださるようになった
認知症予防に関心を示され、参加している方が多い。家族のことや自身ことを気軽に相談される
参加者が友達を連れて参加してくれる
参加されている方は楽しみの一つにしてくれていて、そこから出会いが広がっていけばと…
認知症そのものの相談者はまだいないが、近隣住民の方が気軽に立ち寄り、デিশョートの利用者と地域の交流が進んだ
スタッフとの声のかけあいの中に「私が悪くならよろしくね」など冗談の言える関係がある。アンケート結果（5回来店したり、リピーター向けアンケート）では認知症のイメージが変わった人が15人中11人
当地域でクリニックの存在を知って頂き、地域に根差すことができています
差し入れ、スタッフ（若い人の協力がなく、思案している）
まだ少ないが、楽しみにしてくださっている方がみえる
地域の方々にも認知されている。この活動を通じての地域の方々を含むボランティアと参加者とのつながり構築に寄与している
外出先のひとつとして頂けている

問15④ 協力者への効果

	効果を感じている	効果を感じていない
協力者に対して	63.8%	36.2%

感じている理由
興味を持ち、自主的に協力している
イベントの提案をしてくださる
それぞれの役割にやりがいをもって楽しく取り組んでいただいています。運営にも主体的に参加したいという方もみえます
認知症ケアを理解してくれる方が協力して助言してくださっています
活躍の場が提供できた

色々アイデアを持ってきて下さる
継続してみえる地域の方がお茶を出したり、司会をしたり、書記をしたりしてくれる
来る協力者がだんだん慣れてきている
カフェの運営の助言をしていただける
地域に貢献できることを楽しんでいるように思います
認知症の理解が高まっている
「カフェボランティアとして参加させていただいているが、自分自身も認知症になる可能性がある。病気への理解や予防の知識をご本人やご家族と一緒に深めていきたい」「自分にも役立つことがあるのという実感を抱ける」「介護者の方のお疲れの様子が伺える。カフェの時間は自分たちがお相手します。少しでも休んでいただきたい」など。最初は、接客に消極的であったボランティアの皆様も顔なじみ利用者さんの来所を心待ちにしたり、雨天の足元を心配されたりで優しさを素直に表現して頂けるようになった
思いのほか、閉じこもりの認知症のお年寄りが出向いてこられる状況に驚かされている
地域のなかに入っていける身近な所に施設があり、風通しがよいと思う
地域の集まりなどで告知をしていただいている
継続的に協力してくださるようになった
カフェ開始前より相談にのって頂き、アドバイスしてくださっている。現在も情報を流してくださり、カフェの参考にさせていただいている
カフェのプログラムへの要望や提案が出来るようになった
月8回の催しに毎回出席し、協力者自身の認知症予防となっている
町内会長、民生委員の方々からの口コミで広がった
いつも参加している人が連絡がなく不参加となっていると気にして皆が連絡を入れてくれている。閉じこもりの人を誘い出し、輪の中に巻き込んでくれている
地域貢献への意識
認知症に関する理解が深まる
カフェに参加していただいたことにより、週1回のペースでボランティアに来てくださるようになった方がいらっしゃいます
介護保険制度の中では「アクティビティー」や「コミュニケーション」が不足しがちなので、ボランティアとして関わることにより、自由に楽しく交流することができる
ボランティアの方も続いている
民生委員さんで認知症などでの相談や連携がとれやすくなった
ボランティアとして参加することでやりがいを感じているように思う
認知症の方と普段関わりはないが、興味があり、協力したいと思っている方がたくさんいらっしゃる。そんな方たちの第一歩になっていると思う
認知症への誤解や偏見が少なくなり、地域ネットワークづくりに取り組んでくださっている
意識付けができています
認知症の方と直接関わることで認知症の方の「できること」に目を向けるなど、理解が深まっている
楽しくてボランティアで参加していることを忘れずと感想あり
参加者とのコミュニケーションにはじめは緊張感があったが、最近は自然とあいさつして会話している。運営スタッフへのアドバイスも気づいたことを教えてくれている
ボランティアのため人が人を呼ぶ効果は感じている。あと2つぐらいコミュニティカフェ増を考えている
サロンの内容が少しずつ理解が出てきたように思う。対象者に参加するよう声かけができていた
スキルアップにつながっている
どのようにして町内の方々を利用しやすくなるかを真剣に考えてくれている
まだ効果となってでないが、地域で認知症について話題にすることが多くなっている
この活動をきっかけにその他のボランティア活動へのきっかけづくりになっていると感じる。新たな認知症カフェ立ち上げにもこのカフェの運営ノウハウを含めて企画、検討に協力いただいている
カフェでのボランティアがとても楽しいと言われている（生きがいの1つになっている）。仲間づくりにつながっている
取材してもらうことで認知症カフェやいきいき支援センターの取り組みを知ってもらえる

問15⑤ 運営スタッフへの効果

	効果を感じている	効果を感じていない
運営スタッフに対して	77.8%	22.2%

感じている理由
カフェで役に立つことは、何かを考えることやそれを積極的に取り組むようになっている
人数が増えている
認知症の方はもちろん、地域の方とのふれ合い、交流も含めとても貴重な時間を過ごさせてもらっています。地域の需要があることを実際に感じることで、活動のモチベーションにつながっています
地域の方との交流、活動を知り、役割を感じる
少しずつ楽しくなっている。やりがいが出ている
認知症への理解が深まった
経験を積んでいる間に、毎回少しずつ運営の課題が見えてきました
毎月開催のため、いろいろなアイデアを出していく
認知症の理解が高まっている
食品衛生許可上の衛生面上、カフェ運営時間帯に講座などの実施ができず、カフェのみという運営は他の認知症カフェの実施内容と異なっていた。保健師、介護支援専門員としてのキャリアを有しているが、カフェ運営は素人であった。高齢者が高齢者を支えるしくみづくりの一環として顔合わせ初めの方々（ボランティア）の協力を得てのスタートは、手探り状態であったが、地道なPR活動や関係機関等の支援のもと運営を軌道に乗せることができたという実感を持つことができています
集う場所の提供、買い物場所の提供と自らが自分が「したいこと」があって集まる人々に対して援助するだけでなく、自身で行っていただくことの大切さを学ぶことができた
専門職は自然な雰囲気の中での対応で、家族支援を深めることができています

地域の方への貢献
地域住民と認知症の方の仲介役をすることで事業所内だけでなく地域への意識が高まった
認知症について意識が向上しているように感じる（患者さんなどの対応）
地域に関する関心が深まった
法人・施設が存在や、このカフェについて知ってもらう機会が増えたと感じています
自分たちも地域の一員としての自覚が芽生え、参加者の笑顔や言葉がけからモチベーションが上がり、認知症ケアについても自ら学びたいというスタッフも増えてきた
施設サービス、在宅サービス関係なく、介護職員として地域への連携協力ということへの意識が少しずつ高まってきているように感じています
毎月開催することで認知症やそのご家族のことを考え情報収集など積極的にできるようになった
月8回の催しに毎回出席し、運営スタッフ自身の認知症予防となっている
いろいろな情報を発信する場ができた
「楽しい」「また来たい」という言葉にスタッフもいろいろなアイデアが出てくる
準備等は大変であるが、温かい心の人たちと2時間と一緒に過ごすことや自分たちの思いも出すことができ地域に向けての関心が高まった。モチベーションアップにもなっている
地域の方との関わり
家族様や外部の方々と接する機会が多かった施設職員には自身の行っている仕事がどのように役立っているのか感じる機会になっている
地域のひととの距離が近くなった（カフェ以外の日に野菜などを持って施設に来てくれる）
毎回カフェのためにたくさんのアイデアを出し、カフェの担当者が自然に決まりました。そこに向けて職員が意見交換を頻繁にしています
より身近で気楽な通いの場、相談の場をつくろうと考えることが楽しい。交流が楽しい
職種が違うスタッフですが、連携がとれるようになった
地域密着としてのGHの役割が再認識できた
接客力のアップ
事務員や栄養士等が認知症のご本人にふれる良い機会になっている。専門職のスタッフもモチベーションが上がっていると思う
利用者さんが感動して涙する表情を見て、仕事のやりがいを感じている
地域コミュニティの創造に対する意識拡大
若手職員には「地域との関わり方」について勉強になったと感じる
認知症に対する意識付けができています
認知症カフェの開催や認知症サポーターへのボランティア呼びかけをとおして、本人や家族の思いなどを知ることができた
認知症の理解が増す
介護の知識が増えてきた
認知症への関心度が上がった
認知症に対する考え方や地域の方々との交流が増えたこと
月1回の運営スタッフでの会議では、認知症の方と家族のボランティア参加に向けた支援の検討など参加者に向けた議論ができるようになってきている（モノ、カネの話が少なくなってきた）
運営スタッフ自ら成長が様々な面で見られました
特に要支援者の活躍がうれしい
業務中の取り組みなので少し大変さを感じることはある
認知症の本人の社会とのつながりや生きがいを引き出すよい機会となっている。本人の能力の高さに気づくことができた
認知症予防についての知識を深めることができています。民生委員など地域の組織を知ることができた
初めの頃に比べ来所された方々に対しての声かけがスムーズにできるようになってきたこと、自分たちから動くようになってきたこと
健康で長生きを考える時、認知症の問題を避けて通れません
この活動を通じて新たな認知症カフェ立ち上げの他、その他ボランティア活動参加へのきっかけになっている
認知症のことを学ぶことができる（認知症の人や家族と会話することで、その人たちが求めている思いを聞くことができた）
参加者から花や野菜の育て方を教えてもらったり、多くの笑顔で元氣がもらえる

問16 カフェ運営の工夫

気軽に参加していただけるよう、楽しい時間であるよう、また参加したと思っていただけるよう、情報収集と実施後のフォローなどをこまめに行っている
関係各社への売り込み（声かけ、アピール）← 居宅介護支援専門員が関わることでスムーズに行えている
楽しい、役に立つ企画を考えて提供したいという思いもありますが、提供するだけでなく参加者が交流する、相談できる場をもうけることを心がけています。あくまでも企画はそのきっかけになればという気持ちです
季節を感じていただけるようにしています。また皆様が気持ちよく過ごせるよう心掛けています
近所の方へ声かけをしたり、チラシをポスティングしたりしていますが、効果がみられません
プログラム内容→認知症への効果
毎月出し物を変えた方が喜ばれるので、いろいろプログラムを変えています
ボランティアさんが自主的に行動できるよう、アイデアは行動に移せるよう物品を用意したり、人を手配したりしている
日頃の介護疲れの解消の場となるよう、話しやすい雰囲気づくり、席の配置に配慮しています。認知症の方とそうでない方、どちらも居心地よく過ごしていただけるよう、認知症に対する正しい知識の共有に努めています
少しずつ参加者は増えているが、認知症の人や家族の方の参加が少ない
①非日常性 ②音楽療法 ③家族同士のピアカウンセリングの実施
・楽しい雰囲気づくり ・話しやすい場の提供
開催日ごとにチームを決め、それぞれの色が出たカフェが運営できている
宣伝方法はさまざまな方法を考えている
出演依頼や出し物を考えている

認知症を病気として捉えるのではなく、誰もが遠からずたどる道として捉えるようにしたい。互いをいたわる中に、自分に身近なこととして捉えるようにしていきたい
どのようにしたら一歩を踏み出していただけるか。近くのクリーニング屋さんにチラシを置いていただいて、お客さんに声かけしていただくようにしている
地域に根付いた認知症カフェの運営に心がけている。カフェの所在地である千種区からの来所者が多く、他区からの来所者の増加をはかるために、他業務等でのPRに努めている。また、カフェを今後開催しようとする方々のための「カフェ開設準備講座」を開催し、カフェ実施上のスタンスや運営上の工夫とノウハウ、カフェ利用者の思いなどを伝えている。名古屋市内外からの視察や取材はお断りせず受け入れている。視察や取材だからという特別な空間をつくるのではなく、カフェに来店し体験していただくようにしている。質問事項に対しては、別室にて実施し、カフェの雰囲気や壊すことがないように配慮している。視察人数によっては、カフェ運営時間外での来所をお願いしている。食品衛生上の基準にはずれないように珈琲以外に抹茶や和菓子を準備し、季節行事に合わせて提供し、変化を楽しんでいただいている。カフェ来所のうち、一人暮らし、閉じこもりがちな方、高齢世帯の利用者の参加状況をみて、理由がなく利用期間が空いた利用者には電話連絡を入れ、安否確認をしている
認知症を特別なものではなく、地域社会で肯定して、付き合っていく、カフェというよりマルシェ感覚で交流を図ることができる環境づくりを考えて工夫していています
カフェの場所を身近に感じてもらえると良いと思っているので、入りやすいように専門職は私服にしています。音楽（BGM）をかけた
楽しい雰囲気づくりと話しやすい環境
フェイスブックなどで認知症カフェの内容を告知させ、毎月プログラム内容に変化をつけています
利用者様にご自身がやれること、役割（できること）をもって頂き、ご自身はまだまだできるんだと思って頂くことを心がけている
地域の方がもっと認知症の方への理解を深めていただけるよう一緒に協力し、お手伝いをしながらパンを作っていく
病院の喫茶室を利用しており、どなたも気軽に利用していただけるように配慮している。専門職がかかわることで相談内容に柔軟に対応できる
カフェの来客数を増やすことが最重要で、地域ボランティアさん確保のため、催事を増やすよう努めています
開催する講座をより興味を持ってもらいやすいものにする点を考えています
毎回アンケートをとり、カフェに参加されている方のニーズに沿ったプログラムを施設内での「認知症カフェプロジェクトチーム」の会議にて検討している。他事業所と連携をとり、プログラム等のアドバイスを受けている
地域の様々な人びとに「認知症カフェ」というものを知ってもらいたいため、広報活動に力を入れています。地元の朝市（地元JA主催）でチラシを配布。施設周囲にのぼりを立てたり、看板を自分たちで作成し、設置してます（少しずつ認知度は上がってきているようにも感じます）。カフェの内容も飽きがこないように、運営職員スタッフで企画し、時には利用者家族様にボランティア（体操教室、地元の体操クラブ）をお願いしたりしています
認知症に関する最新情報を収集、学ぶため新聞やネットから、またいきいき支援センター職員様から聞き取り、カフェ当日情報発信できるようにしている
如何にしたら楽しい時間を過ごしていただけるのか。活動的でない方々にダンス、カラオケ、クラフトをしていただけないので、読書コーナーを作った。喜んでもらえている
カフェの場だけでなく家に帰ってからも実行してもらえるようなプログラムを考えるようにしています
<ul style="list-style-type: none"> ・来る方を主体の運営にしていきたい ・お互いに顔見知りになれるため名札を付けている ・参加ごとにポイントを付与し、参加意欲を高めている ・参加していただいた方々にとり、少しでも役に立つ情報や知識の提供 ・いつ参加しても安心して参加できる雰囲気づくり ・考える時間、受け止める時間、楽しむ時間、問題や悩みを解決する時間として確保
いかに来てくださる人を楽しんでいただけるか。勉強会一つにとってもたんなる座学ではなく芝居を行って分かりやすく行うなど
施設に入りやすい雰囲気づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・認知症を題材にした回は、それを前向きに伝えられるよう努めている ・デイサービス利用者も活躍できる場面、役割を取り入れている
他の行政区は分かりませんが、中村区は連携して介護に取り組まれているように感じます。そういった会に時間があるときは必ず管理者が参加し、カフェのみならずいろいろな情報を得るようにしています。その情報をカフェに活かしていこうと考えています
<ul style="list-style-type: none"> ・会話を引き出す、笑いを引き出す ・新しいことに挑戦してもらい、達成感や満足感を引き出す（難しいことを簡単にできるよう伝え方を工夫する） ・主客の関係を作らない（主客一体）。対等（住民同士）。参加者が主体的、能動的に活動できるようスタッフが手や口を出し過ぎない
日常業務のなかで行っているので、スタッフの打ち合わせなどの時間が取れないので、工夫しながら時間を捻出している
チラシを玄関先におき、「カフェ」を認知していただけるようにしている。まだまだ苦戦中です
認知症を理解していただき、住民同士が互助の精神が育まれるような交流の場づくり
明るいイメージをつくる
<ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェは月1回（第2水曜日）の開催であるが、他の週もコミュニティカフェをオープンし、「水曜日はあそこのカフェに行く」という馴染みの場所として位置づけるようにしている ・専門職が「さりげないお手伝い」をさりげなく行う
特になし
「イベントを興味あるものに」と日頃からアンテナをはっている。お茶会の時は、スタッフが利用者と住民の間に入っておしゃべりする…等楽しい物になるよう工夫している
地域住民が共に学び、共に考え、自由に意見が言い合える場であること
<ul style="list-style-type: none"> ・多彩な催しを行い、集まる中での楽しみを作る ・事業所をメインにせず、地域を主体（主役）にする ・子どもの参加を呼びかけている
気軽に参加いただけるように企画（回想法、手作業等）を計画している
認知症の方、地域住民を区別するのではなく、みんなが楽しみながら安心して過ごすことができ、気軽に相談したり、情報交換できる雰囲気づくり
講座やエクササイズを考え、退屈しないように心掛けている
参加者全員に声かけをする（認知症の本人、家族、地域住民）
イベントを何にするか毎回悩んでいるので、何か利用できるサービスや催し物ができる人はいないかと気にかけている
より多くの方が利用していただけるようにボランティアさんや地域の方々に働きかけを行っている
飲み物、お菓子の提供だけでなく、何か取り組めること（脳トレや製作、歌等）を準備している
まだまだ地域の中での認知症カフェの役割になっていないため工夫等はありません（入居者とその家族が中心となっているもの）
今後PRする機会を増やして参ります
まずは窓口を広げるために地域の方々にお知らせをしている
<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔で楽しく、あいさつを心がける ・安全第一 ・清潔、手洗いをする
自由な発想を大切にし、上下の分けへだてなく参加意識でもって運営しています
毎月季節を感じられる食材を販売している。春：菜の花チラシずし 夏：桑の寒寒天 秋：栗きんとん 冬：萩ストープで焼き芋
たくさんの方が参加しやすいメニューや広告
参加者に認知症の方本人が見える際に、スタッフ（専門職）はそばにるようにしている。参加者同士で認知症介護の大変さを話される方もあり、それを聞いてつらくならないようにするため
認知症の本人とカフェ参加者の交流を深められるよう配慮している。季節に合わせた余暇を提供するようにしている

少人数なので、その日に来てくださった方に合わせた内容・プログラムでカフェを進行している（認知症の有無や性別など）
手づくりのテーブルクロスなど準備して、気持ちが安らぐ工夫を心がけています
進行スケジュール（時間の使い方）、協力者（ボランティア）の役割分担、事前・事後のミーティングを必ず行うこと、参加者に喜んでいただけるプログラム作り（楽しく安らげる雰囲気作り）
助成金の使い道、運営するたびに費用がかさんでいる
・イベントの工夫（アンケートを取り、去年人気だったイベントを取り入れる） ・お茶菓子の工夫（抹茶、甘酒、焼き芋等）

問17 カフェ継続のための課題・問題点

	回答数	構成比
カフェの認知度が低い	53	70.7 %
認知症の本人の活躍の場ができていない	23	30.7 %
参加者が少ない	33	44.0 %
家族からの相談に対応できていない	5	6.7 %
地域住民の認知症への理解度が低い	21	28.0 %
運営スタッフのスキルアップ（場づくり・認知症の理解）	12	16.0 %
運営スタッフの確保が難しい	27	36.0 %
協力者の確保が難しい	21	28.0 %
協力者のスキルアップ（場づくり・認知症の理解）	10	13.3 %
運営費用の確保が難しい	15	20.0 %
開催場所の確保が難しい	3	4.0 %
地域の他機関との連携ができていない	18	24.0 %
その他	10	13.3 %

（注）複数回答のため、構成比＝回答数／有効回答75として計算した。

問18 カフェ継続のために必要と思う支援

必要と思う支援
運営側と参加者が一方通行にならないよう、他方面の協力と理解、連携が必要です
・あまり「認知症」というワードを使いすぎるのはどうかと思っている（敬遠されることも多い）。予備軍を含め、高齢者や家族の孤立を防ぐ幅広い支援が必要 ・自分や家族が「認知症」だと受け入れているケースは多くない。認知症カフェというネーミングがナンセンス。誰もが参加できる体制が必要
カフェの認知度を高めていただき、参加者を増やし、協力できる街づくりが必要
ボランティアスタッフさんやオレンジリングを持っている方への声かけ等、まだまだ足りていない。ケアマネからの紹介等、拡散していく必要がある
周知するための広告方法、ケアマネさん等福祉関係者への周知の方法、カフェ関係者の勉強の場がほしい、家族会と連携をとる、回想法サポーターを名古屋市でも養成してほしい
話をしやすい雰囲気づくり、席の配置といった配慮ができる方がサポートに来てくださると、今後利用者が増えていっても対応ができると思います
・地域の皆さんへのPR ・認知症の理解 etc
地域の方々の参加
引き続き地域ケア会議で相談させてもらいます
区の運営会議に地域老人会の代表や民生委員、町内代表の参加を提案します。高齢者関係のいろんなイベントに認知症カフェの代表や代表チームを送ることなど社会認知度を高めていくことが必要だと思います
宣伝をお願いします
広く広報活動をしなければならない
・専門職は仕事をやりくりしてコーヒー一杯のみの御礼で来てくれている。御礼の費用が出せるよう支援がほしい ・カフェの存在を効果的に広報する手立てはないか（例、「ショッパー」などミニコミ誌への掲載）
参加していただかないと継続できないので、いきいき支援センター等主催の集まりの方々に勤めてほしい
当法人の認知症カフェの運営費用（人件費、場所代等）はすべて法人の公益事業として実施しており、来所者からいただく100円は、モーニングカフェ（珈琲、パン、菓子セット）の実費分のみ徴収させていただいている。専門職の確保は、他事業を有しているため、比較的容易に確保できている。今後は、認知症本人や家族が来所し、それぞれの思いを達成していただける認知症カフェの工夫とカフェの存在を広く知っていただき、利用につなげていくことが大切だと考えている。啓発のため地域の方など一般の方にも来ていただきたいが、認知症の方や介護者の居場所としての役割を損なわないよう心掛けていきたい
単にお茶して語らうカフェにこだわらない集いの仕方について視野を広げることも必要だと思う
うちは営利法人なので、地域の住民の中では営利に走りたいからだと思われて、区政さんの許可のもと地域の掲示板にご案内を出していますが何度も破られてしまいます。行政やいきいき支援と協力したいのですが、協力が得られていません。区政さんと民政さんが運営推進委員さんなので、いきいき支援センター担当者に協力を求めています、協力が得られていません。事業所と住民だけでは支援しきれない部分もありますので、今後不安があります
助成金がもう少しあると運営するうえで助かります
各カフェ施設を地域住民に周知できるような告知方法を行うこと。HPやチラシではなく、ポスターや看板など大々的なもの
認知症を理解する方が少ないと思います。認知症の方の問題行動を見て「何ここ？」と思われないためにもスタッフのスキルアップ、地域全体の認知症の方への理解が上があればもっと気軽に出入りして頂き、認知症の方との関わりをもっていけるようにしていきたい
開催場所が分かりづらい所になるので、開催告知の方法の提案など教えていただきたいです
地域の方に有効に活用してもらうにはどのようなアプローチを行ったら良いか。周知方法などについて助言いただきたい。現在は相談業務が主体となっているが、今後取り入れたら良いと思われるプログラムなどあれば参考にしたい
地域ボランティアさんと認知症カフェ、および福祉施設との交流を活性化するために情報交流・交換会等の頻度を増やしてもらい、またその後の経過や結果等を観察してもらい、より良い循環を作っていけたらと思います
認知症のご本人の参加を増やしていくことが難しいと感じています。具体的に必要な支援というのは思いつかないのですが、そのような方の参加を増やしていけると良いと思います。現在、地域に対して解放した場所を提供することができているのは良いことだと思います。
・広報の方法－住民の方に周知（できる限り地域の方大勢に） ・プログラム内容の検討－参加者のニーズに沿ったもの

<ul style="list-style-type: none"> ・運営職員スタッフの人員確保 ・認知症への知識、対応方法、理解の不足、スキルアップ ・いかにして認知症本人、その家族様など、当事者の受け入れを実現させられるか
役所やいきいき支援センターへ相談来所されたご本人やご家族へカフェの積極的な参加を促してもらいたい。行政職員にも参加いただき、カフェで気軽に相談もできるような環境が必要と考えている
いきいき支援センターの形式的でない支援や取り組みを望みます。民生委員の方々との連携ができると良いのですが、個人情報の為情報が得られません。一人で閉じこもっている人々をどうしたらお誘いできるか、方法を探っています
<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民への広報活動（カフェの意義・目的を伝える）をし、協力を得る ・施設職員の理解、協力が必要で、施設入所されている方々へ配慮をしなければならない ・施設の中に会場があるので、外部から来訪者があるため感染症対策をする
<ul style="list-style-type: none"> ・収益を求めることは全く考えていないが、毎回開催する中で施設の持ち出し金が発生している現状 ・施設のロビーを使用するため、準備から終了までの約3時間の間、カフェ以外の施設利用者にとっては使用できず不便である ・本当に支援の必要な人たちにカフェの存在や利用目的が伝わっているのか
他機関との連携を行えばより発展的な施策が行えるかと思っています
運営スタッフは通常の業務との兼ね合いでカフェに集中してられないことがある。協力者、地域住民の協力がますます必要だと思います
施設がある場所の本当に近い距離の地域の人（ご近所さん）の参加が少ないので、施設がある町内、近隣の町内の方がカフェに足を運んでリピーターになってほしい。町内・近隣町内の方のいこいの場にしたい
2月のオープン時より感じていることは、開設時の助成金だけでは到底不足だということ。今まで6回開催してきましたが、当然すでに助成金を上回っています。毎月3000～5000円はかかります。人件費を合わせるともう少しかかっています。運営助成事業が新しく取り入れられれば少し変わるかなと期待しています。
<ul style="list-style-type: none"> ①運営費用の確保：市の運営助成金や参加費だけでなく、地域住民や企業などからの「寄附」や「助成金獲得」のための情報提供や支援を期待したい ②行政やいきいき支援センターに「カフェを育てる」という意識を持ってほしい。いわゆる「お役所仕事」として事務的に関わっていると感じている人は多いが、「言わせない雰囲気」「言っても無理だろうと思わせる雰囲気」があり、だれも余計なことをしなくなる
運営費用を少しでも頂けるようになると、場所や内容が広がると思います
カフェ同士協力し合って単独ではなく、中村区全体で盛り上げていきたい。そのための情報交換だけでなく、運営していくうえでの人とおカネについて支援がほしいです
地域の中に埋もれている認知症の方やご家族の方が安心して気軽に相談できる場所となれるようにカフェの運営主体も努力し、それに向けていきいき支援センターの協力や連携を強化できるような仕組みができることを望みます
助成金
認知度を高める工夫がある
音楽療法などは素人集団では飽きがきて人が集まらなくなると思われる。ある程度のレベルの人を探したりするのに毎月苦勞している
<ul style="list-style-type: none"> ・運営助成事業の助成要件の見直し(ex.開催頻度が月2回以上→月1回以上…etc) ・勉強会、レクリエーション内容の紹介 ・勉強会、セミナー、レクリエーションの講師（ボランティア）の紹介
「認知症カフェ」と書いてしまうと思いがちをされるケースが多いので、認知度向上
地域住民への周知
港区全体として認知症カフェの参加人数が少ないとの課題があります。今後、認知症の認知度を高め、認知症の理解度を高めるための活動をいきいき支援センターとして行っていく必要があると考えています
送迎がないので歩いてこられる方、できない方とも付添が必要。タクシーの割引などあればよいと思う
無償でイベントを行ってくれる個人や団体を紹介してほしい（謝礼ができる経営状態ではないので、資金が乏しいので）
もっと宣伝して認知症の方やご家族さんが来れるようになるという
参加者の確保につながる広報活動
認知症の方に気軽に来ただけのようなサポート体制を作してほしい（最初の1～2回だけでよいので）
地域のケアマネジャーさんが認知症の方や家族に認知症カフェを紹介したり、一緒に来てみてほしい
特にありません
学生などの協力があればうれしい
運営スタッフの獲得が難しい。開設当初からケアマネジャーが中心で行っているが、業務に支障が出ることもあり、他事業所職員も巻き込んで行っている。診療所外来では、医師や看護師が対象となる人に積極的に声かけやチラシ配布をしている
運営スタッフの人数が少なく余裕がないため、協力者を募集しているが、なかなか集まらない。ボランティアの確保が必要。開催場所が狭いため、やれることが限られてしまう。全体を見渡すのが難しいため、机などの設置の工夫が必要
認知症に対する理解を深めること。認知症予防の重要性を理解すること
<ul style="list-style-type: none"> ・実施場所 ・運営スタッフ等担い手養成
本人と家族のための認知症カフェだからこそできる活動を加えていくこと（認知症に関わる話題やテーマを取り上げ、情報を提供する）。参加者や協力ボランティアが参加意義を感じてもらえるような仕掛けを作っていくこと（医師などを招いてミニ講話を開催する）。地域に根付き必要だと思っていただけのように専門的な支援に結び付ける窓口となるような場所になること
講座のため講師代やお車代など
行政が地域住民に向けてもっとカフェのPRをしてほしい（認知症カフェのマップ等）

3. 座談会：「なごや認知症カフェ」活動支援への思い

座談会：「なごや認知症カフェ」活動支援への思い

●座談会参加者プロフィール

・名古屋市健康福祉局高齢福祉部地域ケア推進課地域支援係

石川 隼 さん

名古屋市の認知症施策担当主事。名古屋市として、認知症カフェの開設・運営支援の制度立ち上げ等に取り組んでいる。



・南区北部いきいき支援センター 認知症地域支援推進員

山口 勇 さん

2015年度から2016年度まで推進員として活動。南区で事業所へのカフェ開設の働きかけや、カフェ交流会の実施などの運営支援に取り組んでいる。



・名古屋市認知症相談支援センター 認知症地域支援推進員

山本 文香 さん

2015年度から市域を活動対象とした推進員として配置。各区の推進員の活動支援や、市内の認知症カフェの開設助成・運営助成・登録事業の担当、カフェ開設者向け研修、運営者交流会などの企画・実施を行う。



・司会

金治 宏 (愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター助教)

「認知症を持った人が安心して暮らせるまちづくり」の調査研究に取り組む。名古屋市若年性認知症本人・家族交流会 あゆみの会でパートナーも務める。



開設支援における行政、認知症地域支援推進員、認知症相談支援センターの役割

金治：今日は、「なごや認知症カフェ」の開設・運営支援をしているみなさんに集まっていただきました。それぞれの立場から、どのような思いで認知症カフェの活動支援をされているのか、お話をうかがっていききたいと思います。

まずは、名古屋市の地域ケア推進課地域支援係の石川さんにお聞きします。名古屋市が「なごや認知症カフェ」の登録事業や開設助成事業といった制度を立ち上げた経緯を教えてください。

石川： 認知症カフェは、認知症の人の居場所であり、ご家族の情報交換や仲間づくりの場。そして地域住民が認知症への理解を深める場でもあります。このような場を地域に増やしていきたいと考え、開設助成を事業化することにしました。

事業の立ち上げにあたって、名古屋市としては認知症カフェが「認知症のことを気軽に相談できる場」になってほしいと考え、「専門職の配置」を要件としています。同時に、「なごや認知症カフェ」の登録事業も立ちあげて、登録をしたカフェのPR支援などを行っています¹⁷。

金治： 認知症カフェの取り組みを進めていくためには、各区いきいき支援センターの認知症地域支援推進員との連携が重要だと思います。推進員の皆さんにはどのような役割を期待していますか。

石川： 推進員には、認知症カフェを開設し得る団体・介護事業所にお声かけをし、開設に向けた支援をするなど、熱心に動いていただいています。認知症カフェの運営団体と課題を共有し、地域で一緒に認知症カフェを盛り上げていただけることを期待しています。

金治： 推進員が認知症カフェの開設支援を担っているということですね。では、南区北部いきいき支援センターで認知症地域支援推進員をされている山口さんにお伺いします。南区には17カ所（2017年3月24日時点）の認知症カフェがあり、名古屋市内で一番多いそうですね。山口さんは、具体的にどのような開設支援をされているのですか。また、そのとき大切にされていることを教えてください。

山口： 地域の介護事業所へ積極的に出向き、お声かけをしています。そのとき大切にしているのは、まず認知症カフェのことを知っていただくということです。何度も足を運んで、カフェのメリットを丁寧に伝え、納得していただけるよう働きかけました。そうした中で少しずつ数が増えていったのかなと思います。

金治： 認知症カフェが増えていった背景には、介護事業所といきいき支援センターとの関係性が土台にあったのでしょうか。

山口： もちろん、もともとの関係性もありましたが、2015年に「認知症ケアパス」を南区が作成したことで、地域の情報をさらに把握することができました。その中で、「ここは面白い取り組みをしているな」「ここなら、認知症カフェに関心をもってくれるんじゃないか」という介護事業所を把握し、重点的に声かけをしました。

金治： 認知症相談支援センターの山本さんにお聞きます。認知症相談支援センターでは、カフェ開設について、どのような支援をされているか教えてもらえますか。

山本： 2015年度から年1回、認知症カフェを開設したいと思っている人や認知症カフェに関心がある人を対象に、研修会を開催しています。認知症カフェについて知ってもらい、「カフェをやりたい」と思ってもらえる団体を増やすことが目的です。2016年8月に実施した「なごや認知症カフェ研修会&助成事業説明会」には約130名にご参加いただきました。

研修会では、先進的にカフェの実践をされている他市町村の実践者にお話しいただいたり、名古屋市内で先進的な取り組みをしているカフェに報告をしてもらって、カフェの効果や運営団体へのメリットなどを生の声で伝えてもらいました。

また、認知症カフェの開設者向けのパンフレット「はじめてみませんか？なごや認知症カフェ」を作成して、カフェの開設までの流れやポイントについて紹介しています。

金治： 山本さんが「なごや認知症カフェ」の支援をしていくなかで、現在課題と感じていることはありますか。

山本： 認知症カフェの開設数は増えてきていますが、なかなか参加者が集まらないなど、不安を抱えながら活動しているカフェも多いです。運営の支援も必要だと感じています。

金治： 運営支援について、山口さんはカフェ開設後どのような働きかけをしているのですか。

¹⁷ 「なごや認知症カフェ」の登録・開設助成事業については参考資料pp.56、57をご参照ください。

山口：南区北部いきいき支援センターでは、Facebookページを開設していきいき各カフェを訪問した際には、実際の雰囲気わかる写真などを載せて紹介をし、PRに努めています。また、2016年度には認知症カフェの交流会を2回実施しました。交流会を通じて運営者同士が仲良くなるなかで、お互いのカフェに訪問し合うなど、ネットワークの構築につながっています。

地域との連携がカフェを豊かに

金治：今回実施したアンケート調査では「認知度がなかなか高まらない」、「参加者が集まらない」という声がかフェ運営者から出ています。山口さんはカフェ運営者がどのような課題を抱えていると現場で感じていますか。

山口：カフェ運営主体の多くは介護事業所です。本業があるなかでボランティアとしてカフェをやっているため、人材が足りないという声があります。

もう1つ、認知症カフェ自体が社会に広く浸透していないため、参加者が少ないなどカフェの効果が見えにくく、モチベーションが下がってしまっているカフェもあると感じています。モチベーションをどう上げていくかが今後の課題だと思っています。

金治：山本さん、今、人材不足の話がありましたが、介護事業所としてはすぐに人を増やすわけにもいえないと思います。山本さんはたくさんの現場を訪問されていると思いますが、人材について感じていることはありますか。

山本：うまくいっている認知症カフェは地域と協働ができていると感じています。地域のボランティアや認知症サポーターが介護事業所と一緒に企画をして、カフェをつくり上げている事例も実際あります。

地域の人たちがボランティアとしてカフェに加わる利点は人員数の面だけではありません。専門職とは違う立場の人がスタッフとしていてくださると、カフェの敷居が低くなりますし、安心できる場所になります。地域の人たちの力を借りることはカフェを継続していくうえで、必要なことだと考えています。

金治：なるほど、地域との連携が大切ということですね。山口さんは地域との連携についてどのように捉えておられますか。

山口：もともと地域に根差していて、ボランティアが多く参加している認知症カフェもあれば、地域との連携のとり方がわからず、地域になかなか浸透していかないカフェもあるのが現状で、そのあたりが課題かと思っています。

なかには、地域の人たちが実施している「ふれあい・いきいきサロン」に足を運んで認知症カフェ



のチラシを配るなど、精力的に地域へ出て連携をはかっているカフェもあります。

認知症サポーターの活躍の場として

金治： 山本さん、認知症カフェと地域との連携が進むよう、各区で行われている取り組みはありますか。

山本： 現在、いくつかの区で、認知症サポーターと認知症カフェとの交流会が行われています。「何かやりたい」と思っている活動する場所がなかった認知症サポーターが、カフェに出合ったことで活動に結び付いています。

金治： 石川さん、認知症サポーター養成講座を受ける人は多いのですが、その活躍の場が少ないという課題があります。認知症サポーターの活躍の場としても認知症カフェはとても有効だと思いますが、いかがですか。

石川： 名古屋市では2007年度から認知症サポーター養成講座を実施し、約9万人が受講しています。2017年度には、活動の意向のある認知症サポーターへのフォローアップのための予算を立て、各区で取り組んでいただこうと考えています。ぜひ、認知症サポーターに認知症カフェで活躍していただきたいと考えています。

金治： 山本さんは認知症サポーターの活躍の場としてのカフェの可能性をどのように捉えていらっしゃいますか。

山本： 認知症サポーターは、専門職とは違う立場になります。その地域の住民でもありますので、カフェでの出会いをきっかけに、カフェだけでない地域のつながりにも発展することも期待できます。また、ご近所に認知症のことを理解している人がいるということは、認知症の人や家族の安心感にもつながります。そういう意味で、認知症サポーターの存在はすごく大きいと思っています。

「地域」が鍵

金治： みなさんのお話をうかがって、認知症カフェ単体で活動を豊かに継続していくのはどうしても難しい面があり、行政、推進員、地域それぞれと協力し合うことが大切だと思いました。それでは最後に、みなさんから一言ずつ今後の展望をお聞かせください。

石川： いずれは身近なところに当たり前に認知症カフェがあって、気軽に参加ができるまちを目指したいと考えています。また、カフェを通じて介護事業所と地域のつながりが生まれると、新しい可能性が生まれるのではないかと期待しています。

山口： 南区から認知症カフェの意義や効果を発信していきたいと考えています。カフェと地域とのつながりづくりが課題だと思いますので、推進員がパイプ役になって動いていきたいです。

山本： 名古屋市でこれだけカフェ数が増えているのは、地域の介護事業所などの団体が認知症のことを熱心に考えてくださっている結果だと思い、本当にありがたく思っています。介護事業所などが、地域とつながりながらカフェを展開していくという今の形は、名古屋市の大きな強みです。この取り組みをどんどん発信し、認知症の人、家族、地域で暮らす誰もが安心して暮らせる名古屋市を目指していけたらと思っています。

金治： みなさんのお話を伺って、「なごや認知症カフェ」のキーワードは「地域」であると再確認できました。ありがとうございました。

(2017年3月24日実施・構成：名古屋市認知症相談支援センター)

4. 名古屋市における取り組み

◎「なごや認知症カフェ」事業について

・なごや認知症カフェ登録事業実施要領

なごや認知症カフェ登録廃止届（第3号様式）を、認定ステッカーを添えて、管轄するいきいき支援センターを通じて、認知症相談支援センター所長に提出する。	
(2) 認知症相談支援センター所長は、廃止届を受理し登録を廃止する。	
6 認知症相談支援センター及びいきいき支援センターの役割 認知症相談支援センター及びいきいき支援センターは、名古屋市内のカフェについて情報を把握し、なごや認知症カフェの登録を勧奨する。	
7 その他 この要領の施行について必要な事項は、認知症相談支援センター所長が別に定める。	附 則 この要領は、平成27年7月1日から施行する。

なごや認知症カフェ登録事業実施要領	
1 目的 この要領は、軽度認知障害又は認知症（以下、「認知症」という。）の方が、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう仲間づくりや生きがい支援、介護する家族の負担軽減、地域住民への啓発のために開催される、名古屋市内における認知症カフェ（以下、「カフェ」という。）を把握し、名古屋市への登録を通じて広く周知することを目的とする。	
2 登録対象カフェ 次の各号のすべてに該当する場合は、なごや認知症カフェとして登録することができる。 (1) 定義 以下のア～エの全部又は一部を主たる目的とする、認知症の本人及び家族、それに加え地域住民、専門職等地域の誰もが気軽に集える活動拠点であり、営利、宗教、政治活動を目的としないもの。 ア 認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換 イ 家族の介護負担の軽減 ウ 認知症状態の悪化予防 エ 地域での認知症啓発 (2) 実施主体 地域住民団体やボランティア団体、NPO法人、介護事業所、福祉施設、医療機関等の団体が実施するもの。	
3 登録手続 (1) カフェ実施主体の代表者は、なごや認知症カフェ登録申請書（第1号様式）を、開設しようとする住所地を管轄するいきいき支援センターを通じて、認知症相談支援センター所長に提出する。 (2) 認知症相談支援センター所長は、申請を受理し適当と認めたときは、なごや認知症カフェ登録通知書（第2号様式）及び認定ステッカーをカフェ実施主体の代表者に交付する。 (3) 認知症カフェ開設助成の交付決定を受けた団体は、認知症カフェ開設助成事業実施要領に定める認知症カフェ開設経費助成申請書（第1号様式）をもってなごや認知症カフェ登録申請を受理したものとする。	
4 登録カフェの取り扱い (1) なごや認知症カフェとして一覧に掲載し、インターネット等で情報公開する。 (2) カフェ開催時、認定ステッカーを掲示することができる。	
5 登録廃止手続 (1) カフェ実施主体の代表者は、カフェの廃止等に伴い、登録を廃止する場合は、	

・なごや認知症カフェ開設助成事業実施要領

なごや認知症カフェ開設助成事業実施要領

1 目的

この要領は、名古屋市認知症相談支援センター運営事業実施委託仕様書 第5（2）ウに基づき、軽度認知障害又は認知症（以下、「認知症」という。）の方が、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう仲間づくりや生きがい支援、介護する家族の負担軽減、地域住民への啓発のため開設する、名古屋市内における認知症カフェ（以下「カフェ」という。）の実施、助成手続き等について必要な事項を定める。

2 カフェ実施主体

カフェの実施主体は、地域住民団体やボランティア団体、NPO法人、介護事業所、福祉施設、医療機関等の団体とする。

3 助成

名古屋市認知症相談支援センター（以下「認知症相談支援センター」という。）所長は、4に定める助成要件に合致すると認められるカフェの実施主体（以下「カフェ実施主体」という。）の代表者に対し助成金を交付する。

4 助成要件

（1）活動目的

以下のア～エの全部又は一部を主たる目的とする、認知症の本人及び家族、それに加え地域住民、専門職等地域の誰もが気軽に集える活動拠点であり、営利、宗教、政治活動を目的としないもの。

ア 認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換

イ 家族の介護負担の軽減

ウ 認知症状の悪化予防

エ 地域での認知症啓発

（2）助成対象者

次のいずれにも該当する団体とする。

ア 市税を滞納していない者

イ 暴力団又は暴力団員の統制下でない者

ウ 申請日から6か月前までに認知症カフェを開設した者、又は決定通知日より3か月以内に開設可能な者

ただし、すでに「なごや認知症カフェ」に登録しているカフェ実施主体が助成要件を満たすようになった場合も含む

エ 認知症カフェの実施について、名古屋市が行う他の補助金等（なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領に定める運営助成は除く）の交付を受けていない者

オ 事業を着実に実行でき、適切な事業運営が確保できると名古屋市認知症相談支援センター所長が認める者

（3）対象者

認知症の本人及び家族、地域住民、専門職等を中心に、誰もが参加できるものとする。

（4）参加人数

開設当初の参加人数が5人以上見込まれるもの。ただし、その後の増減は問わない。

（5）事業実施場所

名古屋市内で5人以上が集い、1の目的を達成できる場所で実施する。

（6）実施回数・時間

月1回以上一定の場所で定期的に開催する。1回あたりの開設時間は概ね2時間以上とする。

（7）実施期間

3年間は継続した事業実施が見込まれること。

（8）人員配置

ア 本人・家族等からの相談に対応するため、以下のいずれの条件も満たす専門職を1名配置する。

（ア）医師・看護師等の医療関係者や社会福祉士・精神保健福祉士等の福祉関係者、認知症キャラバン・メイト等認知症に関する知識を習得している者

（イ）認知症の相談業務に従事した経験のある者

イ 認知症サポーター等のボランティアの参加を積極的に促進する。

（9）利用者負担

食糧費、会場借り上げ代等の実費以外は徴収不可とする。

（10）参加者の募集

知人や自らの事業の利用者だけでなく、地域に広く募集すること。

（11）その他

認知症地域支援推進員及びいきいき支援センターとの連携に努めること。

5 助成内容

助成の対象は、原則としてカフェ開設に際し必要な物品の購入経費とし、1か所につき5万円を限度とする。

6 助成手続等

（1）カフェ実施主体の代表者は、なごや認知症カフェ開設経費助成申請書（第1号様式）及び口座振替申込書（第2号様式）を、開設しようとする住所を管轄するいきいき支援センターを通じて、認知症相談支援センター所長に提出する。

（2）認知症相談支援センター所長は、申請内容を審査し適当と認めたときは、なごや認知症カフェ開設経費助成決定通知書（第3号様式）をカフェ実施主体の代表者に交付する。

（3）予算を上回る申請があった場合は、選考を行う。選定順位は、開催回数、参加人数に基づき決する。

（4）助成金の交付決定を受けたカフェ実施主体の代表者は、決定通知日から3ヶ月以内に、なごや認知症カフェ開設報告書（第4号様式）を、いきいき支援センターを通じて認知症相談支援センター所長に提出する。

（5）申請者は、助成金の残金が生じたときは、これを助成交付を受けた年度（4月1日から翌年3月31日までをいう。）終了後の4月末日までに認知症相談支援センターへ返納しなければならない。

（6）開設助成を受けてから3年間は、年度終了後1ヶ月以内に、事業報告書（第5号様式）を、いきいき支援センターを通じて認知症相談支援センター所長に提出する。

7 助成金の返還

認知症相談支援センターは、助成対象が次のいずれかに該当するときは、助成金の交付決定を取り消し、すでに交付した助成金の返還を命ずることができる。

（1）虚偽その他不正の手段によって助成金の交付を受けたとき。

（2）助成要件に該当しないこととなったとき又は申請をした当時に助成要件に該当していなかったことが判明したとき。

8 認知症相談支援センター及びいきいき支援センターの役割

（1）認知症相談支援センターは、カフェの推進を図るために必要な調査、研究、啓発及び、その他必要な事業を行う。

（2）認知症相談支援センターは、いきいき支援センターに配置された認知症地域支援推進員（以下「推進員」という。）及びいきいき支援センター、カフェ実施主体に対してカフェ推進について必要な指導、援助を行う。

（3）推進員及びいきいき支援センターは、カフェ実施主体に対して、カフェ開設、運営についての支援を行う。

9 なごや認知症カフェへの登録

助成金の交付決定をもって、カフェを「なごや認知症カフェ」として登録する。

10 書類の保存

助成を受けたカフェ実施団体の代表者は、カフェ開設にともなう関係書類を、年度終了後3年間保存しなければならない。

11 その他

この要領の施行について必要な事項は、認知症相談支援センター所長が別に定める。

附 則

この要領は、平成27年7月1日から施行する。

附 則

この要領は、平成28年3月18日から施行する。

附 則

この要領は、平成28年8月1日から施行する。

・なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領

なごや認知症カフェ運営助成事業実施要領

1 目的

この要領は、名古屋市認知症相談支援センター運営事業実施委託様書 第5（2）ウに基づき、軽度認知障害又は認知症（以下、「認知症」という。）の方が、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう仲間づくりや生きがい支援、介護する家族の負担軽減、地域住民への啓発のため開設するなごや認知症カフェ（以下「カフェ」という。）の運営にかかる経費の助成手続き等について必要な事項を定める。

2 助成

名古屋市認知症相談支援センター（以下「認知症相談支援センター」という。）所長は、3に定める助成要件に合致すると認められるカフェの実施主体（以下「カフェ実施主体」という。）の代表者に対し助成金を交付する。

3 助成要件

（1）助成対象者

次のいずれにも該当する団体とする。

- ア なごや認知症カフェ登録事業実施要領（以下、「登録要領」という。）において「なごや認知症カフェ」として登録しており、登録上、開催頻度が月2回以上であるカフェ実施主体である者。
- イ 市税を滞納していない者
- ウ 暴力団又は暴力団員の統制下でない者
- エ カフェの実施について、名古屋市が行う他の補助金等（なごや認知症カフェ開設助成事業実施要領に定める開設助成は除く）の交付を受けていない者
- オ 事業を着実に実行でき、適切な事業運営が確保できると名古屋市認知症相談支援センター所長が認める者

（2）実施回数・時間

実際に月2回以上、一定の場所で定期的に開催していること。1回あたりの開設時間は概ね2時間以上とする。

（3）参加人数

各回の参加人数（運営の担い手を除く）が5人以上であること。

（4）実施期間

3年間は継続した事業実施が見込まれること。

（5）人員配置

- ア 本人・家族等からの相談に対応するため、以下のいずれの条件も満たす専門職を1名配置していること。
 - （ア）医師・看護師等の医療関係者や社会福祉士・精神保健福祉士等の福祉関

係者、認知症キャラバン・メイト等認知症に関する知識を習得している者

（イ）認知症の相談業務に従事した経験のある者

イ 認知症サポーター等のボランティアの参加を積極的に促進すること。

（6）利用者負担

食糧費、会場借り上げ代等の実費以外は徴収不可とする。

（7）参加者の募集

知人や自らの事業の利用者だけでなく、地域に広く募集すること。

（8）その他

認知症地域支援推進員及びいきいき支援センターとの連携に努めること。

4 助成内容

「なごや認知症カフェ」の登録内容及び実際の各月におけるカフェの実施回数に応じ、次の金額を助成するものとする。

（1）「なごや認知症カフェ」の登録上の開催頻度が月2回または3回であるカフェ

ア カフェを月2回または3回実施し、各回とも助成要件を満たす場合

月額2,000円

（2）「なごや認知症カフェ」の登録上の開催頻度が月4回以上であるカフェ

ア カフェを月4回以上実施し、各回とも助成要件を満たす場合

月額4,000円

イ カフェを月2回以上実施し、月2回または3回のみ助成要件を満たす場合

月額2,000円

5 助成金の使途

消耗品費や印刷製本費、講師謝金などのカフェの運営にかかる経費とし、利用者個人にかかる飲食代や材料代等の実費負担分を除いたものとする。

また、助成金を交付された者は、収支について、帳簿等を作成し管理しなければならない。

6 助成手続等

（1）半期ごとに申請を受け付け、審査し、交付決定を行う。なお、半期の途中月から開設するカフェも申請することができる。

<受付期間>

上半期分（4月～9月）	9月1日から10月5日まで
下半期分（10月～3月）	3月1日から4月5日まで

（2）カフェ実施主体の代表者は、なごや認知症カフェ運営経費助成申請書（第1号様式）及び口座振替申込書（第2号様式）に添付資料を添えて、カフェの

住所を管轄するいきいき支援センターを通じて、認知症相談支援センター所長に提出する。このとき、なごや認知症カフェに未登録の場合は、登録要領第3条に基づき、登録申請をすること。また、登録内容に変更がある場合は、いきいき支援センターに申し出ること。

（3）認知症相談支援センター所長は、申請内容を審査し適当と認めたときは、なごや認知症カフェ運営経費助成決定通知書（第3号様式）をカフェ実施主体の代表者に交付する。

（4）予算を上回る申請があった場合は、次のとおり選考を行う。なお、選定順位は、開催回数、参加人数、実施期間に基づき決する。

- ア 上半期分の申請で予算を上回った場合
 - イ 下半期分の申請で予算を上回った場合
- 下半期分の申請について選考を行う。

7 助成金の返還

認知症相談支援センターは、助成対象が次のいずれかに該当するときは、助成金の交付決定を取り消し、すでに交付した助成金の返還を命ずることができる。

- （1）虚偽その他不正の手段によって助成金の交付を受けたとき。
- （2）助成要件に該当していなかったことが判明したとき。

8 認知症相談支援センター及びいきいき支援センターの役割

- （1）認知症相談支援センターは、カフェの推進を図るために必要な調査、研究、啓発及び、その他必要な事業を行う。
- （2）認知症相談支援センターは、いきいき支援センターに配置された認知症地域支援推進員（以下「推進員」という。）及びいきいき支援センター、カフェ実施主体に対してカフェ推進について必要な指導、援助を行う。
- （3）推進員及びいきいき支援センターは、カフェ実施主体に対して、カフェ開設、運営についての支援を行う。

9 書類の保存

助成を受けたカフェ実施主体の代表者は、申請にかかる関係書類を年度終了後3年間保存しなければならない。

10 その他

この要領の施行について必要な事項は、認知症相談支援センター所長が別に定める。

附 則

この要領は、平成28年8月1日から施行する。

「なごや認知症カフェ」運営者交流会 実施報告

- (1) 「なごや認知症カフェ」運営者交流会の目的
今後、「なごや認知症カフェ」が、カフェの目的を達成し、期待される5つの役割を発揮していくには運営支援が重要になる。また、より効果的な運営を行うには、各カフェの事業報告や運営者に対する運営状況等のアンケート調査結果から得られた現状や課題等にもとづいた具体的な支援が求められる。
- そこで、運営支援の1つとして、カフェ運営者が一堂に会し、グループでの情報交換や好事例の共有、課題等に対してアイデアを出し合う運営者交流会を実施した。なお、本交流会を通じて、認知症相談支援センターやいきいき支援センター等々に求められる活動支援について検討する機会とした。
- 運営者交流会には、運営者38カ所56名と認知症地域支援推進員25名の計81名が参加した。

- (2) 内容
1) 日時
2016年12月14日(水)13時30分～16時45分
- 2) 場所
IMYビル4階 大会議室(名古屋市東区)
- 3) 目的

「なごや認知症カフェ」の運営者同士が交流し、情報交換することで、より効果的なカフェ運営について学び合い、今後のカフェの運営に役立てていくことを目的に実施する。また、カフェの目的や役割について再確認する機会とする。

4) プログラム

- (1) 「なごや認知症カフェ」の目的と5つの役割についての説明
(2) 「なごや認知症カフェ」の在り方に関する調査研究の報告
愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター
助教 金治 宏氏
名古屋認知症相談支援センター職員
「なごや認知症カフェ」を拠点とした地域づくり」
(3) 講演 「認知症カフェを拠点とした地域づくり」
藤田保健衛生大学医学部 認知症・高齢診療科
教授 武地 一氏
- (4) グループワーク
1) 自己紹介
うちのカフェは〇〇なところです
2) 情報交換
カフェをやってきて良かったこと・嬉しかったエピソード
3) アイデアを出し合おう!
・地域とつながりをつくるために、やっていること・やりたいこと
・認知症の人と家族が過ごしやすい場所にするための工夫

- (3) グループワークの方法
アンケート調査の「カフェを継続していくうえでの課題や問題点(選択式、複数回答可)」で回答が多かった上位2つの「認知度が低い」と「参加者が少ない」を検討課題として取り上げ、グループ

で「地域とつながりをつくるためにやっていること・やりたいこと」と「認知症の人と家族が過ごしやすい場所にするための工夫」について検討した。

グループは、運営者と認知症地域支援推進員の5～6名を1グループとし、12グループで検討を行った。各グループで出された意見はワークシートに記録してもらい、その記録をもとにカテゴリーリストを作成し、分析結果をまとめた。

(4) グループワークの結果

まず、情報交換では「やってきてよかったこと・うれしかったエピソード」についてカフェ運営者同士で共有し、その結果は表1に整理している。カフェを開設した効果は、認知症の人や家族だけでなく、他の参加者やその地域、そして施設・事業所等の運営スタッフにもあらわれていることが明らかになった。

表1「カフェをやってきてよかったこと、うれしかったエピソード」

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 認知症の本人にとつての効果	(1) 役割ができた
	(2) 自分の話や特技が披露できた
	(3) 表情が変わった
	(4) 仲間等のつながりができた
2. 家族にとつての効果	(5) 家族同士の交流ができた
	(6) 悩みが相談できた
	(7) 元気づけられた
	(8) (違う側面を見て) 本人に対する見方が変わった
3. 他の参加者にとつての効果	(9) 認知症の正しい理解につながった
	(10) 横のつながりができた
4. 地域にとつての効果	(11) 安心感につながった
	(12) 身近で活躍できる場ができた
	(13) 身近で支援や情報が行き渡る場ができた
	(14) 施設のイメージが改善できた
5. 施設にとつての効果	(15) 地域のことを考える機会となった
	(16) 地域とのつながりやカフェをいっしょに行う仲間ができた
	(17) 利用者ではなく同じ参加者として話ができ
	(18) 施設行事等に地域住民が参加してくれた
6. 施設等のスタッフにとつての効果	(19) 利用者以外と接する機会ができた
	(20) モチベーションがアップした
	(21) スタッフの技術等が生かされた
	(22) スタッフ同士のつながりができた

続いて、「地域とつながりをつくるために、やっていること・やりたいこと」についてアイデア出しを行い、その結果は表2に整理している。各カフェでは、カフェの開設や周知をきっかけに、「地域」や「地域のキーパーソンの協力」を得るために、民生委員や町内会長等に相談したり、「高齢者ふれあい給食会に参加してPR」のように地域行事に積極的に参加するなど、地域に向い

のつながりを深めている。特に地域密着型サービス事業所においては、「運営推進会議をきっかけに
つながりをつくる」のように、まずは運営推進会議の場を生かして、地域とのつながりを築いている
ことがうかがえた。

地域に出向きつつも、「まつりにみなさんと呼ぶ」のように施設等行事に地域住民を招待し、「そ
こからつながっていききたい」、「施設を知ってもらおう機会としたい」という意見もあった。加えて、行
政やいきいき支援センターはもちろん、近隣の医療や介護の関係事業所ともカフェへの参加や協力
を通じて、連携強化を図っている。

周知方法では、「目立つチラシをつくる」、「カフェの様子をおたよりにして回覧板で回す」、「年間
計画を立ててチラシを配布する」、地元情報誌の「ホームニュース」に記事を掲載してもらうなど、
具体的な各カフェでの工夫が紹介された。

表 2 「地域とつながりをつくるために、やっていること・やりたいこと」

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 運営推進会議を生かす	(1) 運営推進会議のなかで相談する
	(2) 運営推進会議をきっかけにつながりをつくる
2. 地域に出向き、話を する	(3) 民生委員や町内会長に相談する
	(4) 高齢者ふれあい給食会に参加する
	(5) その他の地域行事等に参加する
	(6) 回覧板や掲示板での案内をお願いする
3. 他機関に協力をお願い する	(7) 地域住民をおまつりなどの施設行事に招く
	(8) 行政や地域包括支援センターの協力を得る
	(9) 近隣の医療・介護の関係事業所の協力を得る
	(10) 近隣の民間企業の協力を得る
4. 周知を工夫する	(11) チラシづくりと配布先を考える
	(12) インターネットを活用する
	(13) 地元の情報誌に掲載を依頼する
	(14) 看板をつくる
	(15) 口コミをお願いする

また、「認知症の人と家族が過ごしやすい場所にするための工夫」については、表 3 に整理してい
る。

「認知症カフェの必要性を分かりやすく伝えたい」や「みんなが地域で支えていけるように認知
症はこわくないということを最初に伝えたい」のように、まずは地域の人びとや参加者にカフェの
目的を知ってもらうことや認知症を正しく理解してもらうことが、認知症の人と家族が過ごしやす
い場所づくりにつながるのではないかとこの意見が出された。そして、まずは一度参加してもらえ
るように入力しやすいカフェの雰囲気や心がけがたり、「同じ場所、同じ時間で行っている」、「土曜
日に開催」など参加しやすい環境をつくっているカフェもあった。さらに「日によって内容を変え
ている」、「出入りも自由」、「話がでるカフェを目指す」などプログラムを工夫していたり、専門
職の配置を生かした取り組みを行っているカフェがあった。

また、認知症の人と家族が過ごしやすい環境づくりにおいては、「話が合いそうな方と同じテー
ブルにする」や「各テーブルにスタッフが入る」などのように席の配置を配慮したり、「最初はひとり
にしない」ように意識的に声かけを行っているなど、場のコーディネートが重要であることがあら
ためて認識された。そういった場をうまくコーディネートするために、「スタッフ同士で情報共有」
や「振り返り」の機会を大切に行っているカフェもあった。なお、介護者同士が話しやすい「家

族が相談しているときは当事者を見守る」や「介護経験者が話し相手になる」など介護者に対する
支援を行っているカフェもあった。

カフェの運営については、施設等のスタッフだけで実施するのではなく、「学生ボランティアと考
えていききたい」や「ボランティアに来てもらい、地域とのつながりをつくりたい」など積極的にボ
ランティアの力を借りて、役割分担をしながら一緒にカフェに取り組んでいきたいという姿勢も
うかがえた。


表 3 「ご本人、ご家族が過ごしやすい場所にするための工夫」

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 認知症や認知症カフ ェを正しく伝える	(1) 認知症カフェを知ってもらう
	(2) 認知症を正しく理解してもらう
2. 参加しやすい環境を つくる	(3) 参加しやすい雰囲気をつくる
	(4) 参加しやすいプログラムにする
	(5) 介護者同士が話しやすい場をつくる
	(6) 専門職配置の特性を生かす
	(7) 送迎する
3. 場をコーディネート する	(8) スタッフ同士の情報共有
	(9) 席の配置を配慮する
	(10) 最初はひとりにならないように配慮する
	(11) 受付をしつかりと行い、誘導する
	(12) 振り返りの場をつくる
4. ボランティアの協力 を得る	(13) ボランティアの力を借りる
	(14) ボランティアと役割分担する

(5) まとめ：今後の課題

「なごや認知症カフェ」運営者交流会では、運営の課題に対して具体的なアイデアを出し合い、
共有できた一方で、カフェを運営するうえでの新たな悩みや課題も明らかになった。上記の考え・
アイデアを持って取り組んでいる「新規掘り起しが課題」「地域の集まりに行ってもなかなか難
しい」など周知や集客の難しさを感じているカフェもあった。

一方で、「参加者が 40 人を超えて多すぎる」「これ以上人が増えたときの対応が心配」「グルー
プがすでにできてしまい、新しい人が入りにくい」など、次の段階の課題に直面して悩んでいるカ
フェもあった。一方で、「認知症の人に参加してもらいたい」「閉じこもっている人を参加につなげる
のは難しい」「サービスタップにつながる人に来てほしい」など、カフェとしてもっとも参加して
もらいたい人たちの参加がなっていないという発言も多くあった。また、「協力者同士の関係性を
いかに築くか」「協力者にいかにカフェで活躍してもらえるか」など協力者への活動支援につい
ての課題も交流会では出されていた。



「なごや認知症カフェ」
はじまる

「なごや認知症カフェ」の在り方に関する調査研究 報告書

2017年3月発行

金治 宏（愛知淑徳大学）・名古屋市認知症相談支援センター

【問い合わせ先】

名古屋市認知症相談支援センター

住所 〒462-8558 愛知県名古屋市北区清水4丁目17-1

TEL 052-919-6622 FAX 052-913-8553